

国際日本研究センター国際日本語教育部門3ヶ年プロジェクト成果報告論文集2

# 日本語学習者の 母語・地域性をふまえた 日本語教育研究とウェブ辞典構築

—国内外の日本語教育研究機関との協働的研究—  
(2013~2015)

日本語 Japanese  
japonais ญี่ปุ่น 日本語  
اللغة اليابانية 日语 にほんご

東京外国語大学国際日本研究センター

国際日本  
研究センター  
International Center  
for Japanese Studies

国際日本語教育部門3ヶ年プロジェクト成果報告論文集 2

# 日本語学習者の母語・地域性をふまえた 日本語教育研究とウェブ辞典構築

—国内外の日本語教育研究機関との協働的研究—  
(2013-2015)

東京外国語大学国際日本研究センター

# 目次

「発刊にあたって」	1
小林幸江（東京外国語大学国際日本研究センター国際日本語教育部門長）	
<b>■ 第1章</b>	
〈報告〉「国際日本語教育部門3ヶ年プロジェクト〈2〉の概要」	6
小林幸江（東京外国語大学）	
<b>■ 第2章</b>	
〈論文〉「認知スタンスの言語使用に対する影響について」	
—中国人日本語学習者が使う日本語を例に—	14
趙華敏（北京大学）	
〈論文〉「『東京外国語大学英語上級学習者コーパス』における前置詞の誤用類型： —日本語母語話者・中国語母語話者英作文の対照」	25
共著：望月圭子（東京外国語大学）、ローレンス・ニューベリー＝ペイトン（東京外国語大学博士後期課程）	
〈論文〉「英語・中国語からみた日本語の無界性：複合動詞と空間認知」	43
共著：望月圭子（東京外国語大学）、申亜敏（早稲田大学）	
〈論文〉「言いさし文における日仏対照研究—Parce que, puisque, から—」	67
秋廣尚恵（東京外国語大学）	
〈論文〉「言語要素（語・文法）のリンク教材に関する可能性： タイ語母語学習者への教材作成・活用を踏まえて」	81
鈴木美加（東京外国語大学）	
〈研究ノート〉「アラビア語エジプト方言における詫び表現の機能とストラテジー」	89
共著：谷口龍子（東京外国語大学）、ハーネム・アフマド（カイロ大学）	
〈論文〉「中級日本語学習者の作文における語彙使用の誤用と問題点」	99
森本一樹（英国 リーズ大学）	
〈論文〉「『東京外国語大学上級英語学習者コーパス』にみられる接続表現におけるテンス誤用」	107
キャロライン狩野（東京外国語大学）	
<b>■ 第3章</b>	
〈報告〉「学習者誤用コーパス用ウェブ検索システム」	118
呉佳厚（国立台湾師範大学）	
李迎日（東京外国語大学 大学院総合国際学研究所）	
井上剛（東京外国語大学 外国語学部）	
佐野洋（東京外国語大学）	

# I N D E X

Preface .....	1
Yukie Kobayashi (Tokyo University of Foreign Studies)	
<b>■ Chapter 1</b>	
REPORT: <b>Overview of “Japanese Language Research and Construction of Web Dictionary Based on Learners’ Native Languages and Regional Characteristics — In Cooperation with Educational and Research Institutes Offering Japanese Language Study both within Japan and Abroad.”(2013-2015)</b> .....	6
Yukie Kobayashi (Tokyo University of Foreign Studies)	
<b>■ Chapter 2</b>	
ARTICLE : <b>“A Study about the Influence of Cognitive Stance Bringing to Language Use-Taking the Japanese Used by Chinese Native Speakers for Example-”</b> .....	14
Hua Min Zhao (Peking University)	
ARTICLE : <b>“A Contrastive Study of Prepositional Errors in TUFFS Sunrise Advanced Learners’ Corpora of English by Native Speakers of Japanese and Chinese”</b> .....	25
Keiko Mochizuki , Laurence Newbery-Payton (Tokyo University of Foreign Studies)	
ARTICLE : <b>“Unboundedness in Japanese Lexicon : Comparative Analysis of Compound Verbs in Chinese and Spatial Lexicon in English”</b> .....	43
Keiko Mochizuki (Tokyo University of Foreign Studies), Ya Ming Shen (Waseda University)	
ARTICLE : <b>“Contrastive Study about “lisashi” in French and Japanese”</b> .....	67
Hisae Akihiro (Tokyo University of Foreign Studies)	
ARTICLE : <b>“Perspective on Vocabulary Elaboration Exercises in Materials Developed for and Implemented with Thai Students”</b> .....	81
Mika Suzuki (Tokyo University of Foreign Studies)	
ARTICLE : <b>“Pragmatic Function of Expressions and Strategies of Apology in Arabic (Egyptian Dialect)”</b> ...	89
Ryuko Taniguchi (Tokyo University of Foreign Studies), Hanem Ahmad (Cairo University)	
ARTICLE : <b>“Errors and Problems in the Use of Vocabulary in Compositions by Intermediate Learners of Japanese”</b> .....	99
Kazuki Morimoto (The University of Leeds, U.K. )	
ARTICLE : <b>“Time-Related Conjugational Error Types in “TUFFS Sunrise” Advanced Japanese Learners’ Corpus of English”</b> .....	107
Caroline E. Kano (Tokyo University of Foreign Studies)	
<b>■ Chapter 3</b>	
REPORT : <b>“Design and Implementation Technique of Web Search System for Learners’ Error Corpora”</b> .....	118
Wu Chia Hou (National Taiwan Normal University), Yeong il YI (PhD Student, Tokyo University of Foreign Studies), Go Inoue (Undergraduate Student, Tokyo University of Foreign Studies), Hiroshi Sano (Tokyo University of Foreign Studies)	

# 「日本語学習者の母語・地域性をふまえた日本語教育研究とウェブ辞典構築 —国内外の日本語教育研究機関との協働的研究」(2013—2015)

## 論文集発刊にあたって

国際日本語教育部門（以下、当部門）は、2009年4月に東京外国語大学に設置された国際日本研究センター（以下、センター）の5部門の一つです。当部門のメンバーは現在、センターの専任、本学の総合国際学研究院、国際日本学研究院所属の5人よりなり、「日本語教育の国際的展開の基礎構築」のため、①日本語教育の現状把握、②言語別教材の開発の二つを柱として活動しています。

センター設立の初年度には、①「日本語教育の現状把握」を推進するために、国内外の高等教育機関における日本語教育事情を調査しデータ構築を開始しました。2015年現在、データは質量ともに充実し、より使いやすい形に進化しセンターのホームページ上に掲載されています。

また、②「言語別教材の開発」を推進するために、日本語学習者の母語・地域を、中国語・タイ語・アラビア語・フランス語・英語の5つに絞り、各国の日本語教育研究機関の特任研究員との協働的研究をめざし、2010年度から現在に至るまで国際日本語教育部門3ヶ年プロジェクトを2期にわたって実施しました。

まず、2010年度から2012年度にかけて国際日本語教育部門3ヶ年プロジェクト〈1〉「日本語学習者の母語・地域性をふまえた日本語教育研究—国内外の日本語教育研究機関との協働的研究」のプロジェクトを立ち上げました。この成果は2013年3月に『国際日本研究センター・国際日本語教育部門3ヶ年プロジェクト成果報告・論文集』として刊行されました。次いで、2013年度から2015年度にかけて国際日本語教育部門3ヶ年プロジェクト〈2〉「日本語学習者の母語・地域性をふまえた日本語教育研究とウェブ辞典構築—国内外の日本語教育研究機関との協働的研究」を行ってきました。

現センターは、新たな出発をめざし2015年度をもってひとつの区切りを迎えます。本論文集は、国際日本語教育部門3ヶ年プロジェクト〈2〉で達成された研究成果をまとめたものです。と同時に、それは現センターの中で、国内外の日本語教育研究機関との協働的研究を目指した当部門の活動の記録を残すものでもあります。

多くの皆様にご覧いただき、ご意見、ご批判を賜れば幸甚の至りに存じます。

2016年3月31日

国際日本研究センター・国際日本語教育部門

部門長 小林 幸江

# 第 1 章

〈報告〉

## 国際日本語教育部門3ヶ年プロジェクト〈2〉

「日本語学習者の母語・地域性をふまえた日本語教育研究とウェブ辞典構築  
—国内外の日本語教育研究機関との協働的研究」(2013-2015) の概要

小林 幸江 (東京外国語大学)

### はじめに

「日本語学習者の母語・地域性をふまえた日本語教育研究とウェブ辞典構築 - 国内外の日本語教育研究機関との協働的研究」(2013-2015) は、国際日本語教育部門 (以下、当部門) で、第2期<sup>1</sup>の3ヶ年プロジェクトとして行われたものである。本報告では、まず、期間中の当部門の活動について述べ、次に本プロジェクトの概要についてまとめる。

### 1. 国際日本語教育部門の活動 (2013-2015)

#### 1-1 当部門の設置目的

当部門は、国際日本研究センター (以下、センター) 設置以来、「日本語教育の国際的展開の基礎構築」を目指し、「日本語教育の現状把握」及び「言語別教材の開発」の二つの業務を柱として活動してきた。

#### 1-2 部門構成員

以下に、設立当初から現在に至るまでの当部門の構成員を示す。表中の下線は部門責任者、( ) は所属 (名称は当時のもの)、[ ] はそれぞれの専門を示す。

年度	部門員 (所属) [専門]
2009	<u>小林幸江</u> (留学生日本語教育センター) [日本語教育学] 望月圭子 (総合国際学研究院) [日本語・英語・中国語対照言語学] 海野多枝 (大学院総合国際学研究院) [第二言語習得論] 鈴木美加 (留学生日本語教育センター) [日本語教育学] 谷口龍子 (国際日本研究センター専任) [日本語教育学、言語学、語用論]
2010	<u>小林幸江</u> ・望月圭子・海野多枝・鈴木美加・谷口龍子
2011	<u>小林幸江</u> ・望月圭子・鈴木美加・谷口龍子 (海野多枝: 休職 2011 ~ 2012)
2012	<u>小林幸江</u> ・望月圭子・鈴木美加・谷口龍子・(海野多枝)
2013	<u>小林幸江</u> ・望月圭子・鈴木美加・谷口龍子 佐野洋 (総合国際学研究院) [計算言語学・教育工学・外国語教育] <sup>2</sup>
2014	<u>小林幸江</u> ・望月佳子・鈴木美加・谷口龍子・佐野洋
2015	<u>小林幸江</u> <sup>3</sup> ・鈴木美加 <sup>4</sup> ・谷口龍子 (大学院国際日本学研究院) 望月圭子 佐野洋 (総合国際学研究院)

#### 1-3 当部門の任務の達成状況

当部門の設置目的 (1-1) の達成状況 (2016/01/31 現在) は次のとおりである。

まず、「日本語教育の現状把握」の成果は、世界の60の日本語教育高等教育機関から得られた「日本語教育事情調査」のデータとして、センターのHP「オンラインリソース」に掲載されている、これについては、佐野洋 (2016) に詳しい。また、「言語別教材の開発」の達成状況については、本報告の「2-3 プロジェクト〈2〉の達成状況と課題」で

述べる。

## 2.3 3ヶ年プロジェクト〈2〉「日本語学習者の母語・地域性をふまえた日本語教育研究とウェブ辞典構築－国内外の日本語教育研究機関との協働的研究」(2013-2015) の概要

### 2-1 目的

本プロジェクトでは、第1期と同様、アラビア語、英語、中国語、フランス語、タイ語の5つの母語、地域を対象に、それぞれの母語話者や地域の日本語教育に資することを目的とし、国内外の日本語教育研究者との協働的研究の推進に努めた。

本プロジェクトでは、「日本語学習者の母語・地域性をふまえた日本語教育研究とウェブ辞典構築」を表題に掲げているが、これは以前から、部門員の望月圭子、佐野洋が中心となって進めている、日本語・英語・中国語の3か国語の対照研究に基づく「オンライン日本語誤用辞典」の実用化を目指したものである。これについては、本論文集の第3章〈報告〉「学習者誤用コーパス用ウェブ検索システム」(佐野洋他)に詳しい。

### 2-2 各母語・地域の研究テーマ及び担当者、特任研究員・連携研究員

以下に表にまとめて示す。

母語・地域	主な研究テーマ(担当者)	特任研究員(無印)・連携研究員(連)
中国語	日本語と中国語の対象研究  (望月圭子・谷口龍子)	趙華敏氏(北京大学外国語学院教授)(2013～2015) 彭広陸氏(北京大学外国語学院教授)(2013～2015) 張威氏(中国人民大学外国語学院教授)(2013～2015) 申亜敏氏(早稲田大学政治経済学術院・明治学院大学非常勤講師)(2013～2015) 張麟声氏(大阪府立大学人間社会研究科教授)(2013～2016)
英語	「オンライン英作文学習者コーパス・誤用辞典」の構築 (望月圭子・佐野洋)	森本一樹氏(リーズ大学本語学科シニアフェロー)(2013～2015) 狩野キャロライン エリザベス氏(連)(本学特任外国語教員)(2013～2014)(本学非常勤講師)(2014～2015) シア ティエンミン テレンス氏(東洋大学経済学部専任講師)(2013～2015) 福田翔氏(明治学院大学非常勤講師→富山大学准教授)(2013～2015)
日本語・英語・中国語	オンライン日本語誤用辞典の構築 (望月圭子)	小柳昇氏(拓殖大学工学部・十文字学園短大非常勤講師)(2013～2015)
タイ語	タイの大学における技能養成に向けた語彙教育 (鈴木美加)	タサニー・メーターピスイット氏(タマサート大学日本語学科准教授)(2013～2015)
アラビア語	アラビア語と日本語の挨拶表現に関する対照語用論研究と日本教育学研究 (谷口龍子・小林幸江)	榮谷温子(本学非常勤講師)(2011～2014)
フランス語	フランス人日本語学習者の誤用から考察する省略、従属節の対照研究 (谷口龍子)	秋廣尚恵氏(連)(本学大学院総合国際学研究院講師)(2013～2016)

### 2-2 研究活動

2013年度以降、センターの概算要求が大幅に削減されたこともあり、当部門の予算も年を追うごとに逼迫していき、第1期のプロジェクトの時とは比べ物にならないほど、外部講師への依頼が難しくなった。そこで、第2期では、部門員の創意工夫、研究者ネットワークの活用、さらに、国内外の特任研究員、連携研究員の協力を得て、本プロジェクトに資する有意義なワークショップ、国際ワークショップ、研究会、講演会等を継続的に行い、国内外の日

本語教育研究者との協働研究を推進するように努めた。本プロジェクトでは、「文法・語用と教育」というシリーズを組み、研究会等の企画を行い、言語研究の成果をどのように日本語教育に結び付けてゆくかという言語研究と教育現場のインターフェイスを目指した。

予算減への措置として、第2期では、センターの対照日本語部門及び当部門の望月圭子の科研「英日中国語ウェブ誤用コーパス構築と母語をふまえた英語・日本語・中国語教授法開発」（基盤研究B）（2013年度-2015年度）（望月圭子代表、佐野教授分担研究者）と共催で研究会を行い経費節減を図った。

各年の活動は以下の通りである。表中の番号(1)は主催、共催の別、(2)は発表題と講師名（所属先）、要旨を示す。なお、要旨は、センター発行の「ニュースレター」（第11号～第17号）から引用した。

## 2013年度

各チームからそれぞれの研究計画にそって特任研究員、連携研究員が推薦され、プロジェクト第2期の協働研究が本格的にスタートした

<b>1. (2013/07/24) 文法・語用と教育シリーズ第1回 講演会</b>
(1) 主催
(2) 『『みかん』構文』岩崎勝一氏（UCLA カリフォルニア大学ロサンゼルス校 応用言語学教授） 【要旨】 日常会話でよく使われる定型構文“Ni1（だ）よ Ni2”（『みかんよ みかん』『おれだよ おれ』等）について構文文法、関連性理論、会話分析等により分析された。“Ni1（だ）よ Ni2”は述語文であり、Nにはどんな名詞も使われ、これらは繰り返される、「だ」はNi2の後にはつけられない、二つのピークがあるかたまりとして下降調子で発話される、というイントネーション・パターンを持つなどの構造的特徴がみられる。 また、この構文は、会話当事者間に大きな共有情報があることを前提とし、この前提は二人の間に intimacy が存在することも前提となる（implied premise）。さらに、その前提を考慮し、結論（implied conclusion）を引き出し、表明することを相手に要求し、相互理解を再確認させるという語用論的効力があることが明らかとなった。（谷口 2013）
<b>2. (2013/07/25) 文法・語用と教育シリーズ第1回 研究会</b>
(1) 主催
(2) 「多重文法」岩崎勝一氏（UCLA カリフォルニア大学ロサンゼルス校 応用言語学教授） 【要旨】 個人の中に複数の文法が存在する様子が談話分析を通して紹介された。「会話」はもっとも普遍的な言語の形であり、文法の基礎となっている。話し言葉（SG）と書き言葉（WG）は、独立して各個人の中で階層を成し、最終的に conceptual grammar として統合される。言語使用者は環境に応じどちらかの文法に頼りながら言語を産出していく。国会 データの政治家や原爆被害者の談話データから、形式名詞「こと」や助詞「を」等の使用頻度を例に挙げ、SG と WG を同時にアクセスしながら話をしている様子が紹介された。（谷口 2013）
<b>3. (2013/08/03) 文法・語用と教育シリーズ第2回 国際ワークショップ 「母語をふまえた外国語教育'日本語・英語・中国語の対照研究と E-LEARNING 教材開発」</b>
(1) 主催
(2) 「日本語教育における複合動詞教育」張威（中国人民大学） ・「オンライン“日本語・英語・中国語対訳 好ましい表現”辞典の構築」趙華敏、孫斐（北京大学）、楊煜雯（銘傳大学）、谷口龍子、キャロライン狩野、テレンス・シャア、佐野洋、望月圭子（東京外国語大学） ・「東京外国語大学日本語学習者コーパスと オンライン日本語誤用辞典構築への展望」 ・小柳昇、福田翔、片山晴一（東京外国語大学）、市川淳太（アジア・アフリカ語学院） ・「東京外国語大学オンライン英作文学習者 コーパス・誤用辞典にみられる日本人上級英語学習者による前置詞の誤用」・古賀健太郎、大熊洋祐、キャロライン狩野、Matthew Miller, Andrew Chen, 荒川和仁、斎藤翔太、片山晴一、井上剛、菅原更紗、佐野洋、望月圭子（東京外国語大学） ・「オンライン英語・中国語対訳日本語複合動詞辞典の構築への展望」・テレンス・シャア、申亜敏、福田翔、井上剛、佐野洋、望月圭子（東京外国語大学） 【要旨】 1980年代本学での留学経験をもち、現在中国における日本語教育の重鎮となられた、当センター特任研究員張威先生（中国人民大学）、同趙華敏先生（北京大学）をお招きし、日本語教育における複合動詞教育の重要性、「好ましい表現」の日本語・英語・中国語対照データの構築と対照研究（本学佐野洋教授、谷口龍子 准教授他との協働研究）の発表があった。 また、当センターにおける母語をふまえた日本語教育研究の一環として、「学習者コーパスに基づくオンライン日本語誤用辞典」、「オンライン英作文誤用辞典」 <a href="http://sano.tufs.ac.jp/lcshare/">http://sano.tufs.ac.jp/lcshare/</a> 及び「日本語・英語・中国語対照：複合動詞・句動詞辞典」の構築と対照研究についての発表があった。発表者は、特任研究員申亜敏、同テレンス・シャア、同福田翔各氏、佐野洋教授をはじめ、当センターの研究プロジェクトに協力者として参加している大学院生・学部生たちも英語で発表し、若手研究者育成の良い機会にもなった。

このワークショップには、北京大学袁毓林・李淑静各教授、台湾師範大学陳浩然・謝妙玲・張莉萍各教授（科研基盤B〈代表者：望月圭子〉により招聘）も参加され、活発な議論がかわされた。（望月 2013）

#### 4. (2014/01/25) 文法・語用と教育シリーズ第3回研究会 「日本語・英語・中国語の対照研究と日本語教育」

(1) 主催

(2)

- ・「言語類型論から見た中国語と日本語の対照研究——視点を中心に」彭広陸教授（北京大学）
- ・「目的語残存受身文」における目的語残存の条件について——中国語との対照という視点から——于康教授（関西学院大学）

【要旨】

「視点」をテーマに、「言語類型論 (typology) から見た中国語と日本語の対照研究—視点を中心に—」（彭広陸先生：当センター特任研究員・北京大学）、「目的語残存受身文」における目的語残存の条件について—中国語の対照という視点から—（于康先生：関西学院大学）の発表が行われた。彭氏は、中国語と日本語の「視点」の諸相について、語、連語、文、談話の各レベルで概観した上で、日本語は視点の一貫性が強く主語が一貫しているのに対して、中国語は動作の主体に視点が置かれることから、談話の中で主語が変わり得る点を指摘された。于氏は、受身により目的語の格が変化しない「目的語残存受身文」（NP1はNP2をVれる/られる）を、NP1とNP2間の所有と所属、全体と部分のような意味的なつながりの有無により2種類に分け、目的語と動詞がコロケーションである場合に目的語が残存しやすいことを指摘された。また、日本語の目的語残存文は、受影者を主語に取り立て、中国語は文のテーマを主語に取り立てる点も主張された。（谷口 2014）

- ・「日本語・英語・中国語の結果表現：日本語・中国語の複合動詞、英語の句動詞・結果構文の対照研究」テレンス・シャア、申亜敏、福田翔（本センター特任研究員）

【要旨】

本部門のプロジェクト「母語をふまえた日本語教育研究」（英語、中国語担当は本学教員佐野洋氏、望月圭子氏）の一環として研究発表（テーマ「日本語・英語・中国語の結果表現：日本語・中国語の複合動詞、英語の句動詞・結果構文の対照研究」発表者：本センター特任研究員テレンス・シャア氏、同申亜敏氏、同福田翔氏）も行われた。典型的に見ると、SVO言語は補語が発達し、副詞との違いが明確であるが、SOV言語の場合は、動詞の後ろに結果補語を置くことができない。また、動詞の性質を比較すると、日本語と英語は状態変化や「完結性」(Telicity)が動詞に含意されていることから、結果補語が共起しなくても「達成動詞」となるが、中国語の動詞は「完結性」を持たないために、動作の結果を示すためには補語が必要となる点が指摘された。（谷口 2014）

### 2014年度

3か年プロジェクト中間年のこの年は、台湾で日本語教育に携わっている講師を招き、日本語教育の実際に焦点をあて、従来とは異なる交流を視点到ワークショップを開催した。また、センターで受け入れている博報堂の研究者を講師に招いてのワークショップ、部門員の望月圭子代表の科研チームとの共催による研究会をおこなった。

#### 1. (2014/09/08) 「母語・地域性をふまえた日本語教育研究」ワークショップ

(1) 主催

(2) 「日台体験型交流活動を通じた学びとは」

文野峯子氏（人間環境大学名誉教授） 工藤節子氏（東海大学）台湾

【要旨】

今年で9年目を迎える日台体験型交流活動は、日本と台湾の大学生がコミュニケーションをすることで問題解決をしていく場が組み込まれた合宿形式の活動である。台湾の学生たちは日本語の上達を期待して参加するが、日本語に限らず学生たちの何かが変わる。日本の大学生も何かが大きく変わる。それは何か。そもそも言語の学びとは何か、をワークショップの参加者とともに議論を行った。（谷口 2014）

#### 2. (2014/12/11) ワークショップ

(1) 主催

(2) 『依頼行為の対照研究—日本語母語話者と中国人日本語学習者』

孫楊氏（中国揚州大学外国語学院准教授、本学外国人研究員）

#### 3. (2015/03/20) 文法・語用と教育シリーズ第4回研究会

(1) 主催

(2) 「学習者コーパスに基づく日本語誤用辞典～日本人による英語・中国語学習者コーパス誤用類型との対比～」

小柳昇氏（特任研究員、拓殖大学非常勤講師） 市川淳太氏（アジア・アフリカ語学院日本語学科専任講師）

望月圭子（東京外国語大学総合国際学研究院） コメンテーター：佐野洋（東京外国語大学）

【要旨】

はじめに本コーパスの開発担当者である小柳昇氏（センター特任研究員）からオンライン日本語誤用辞典の活用方法について説明があった。これらは、日本語誤用辞典は正誤表がわかる機能がほしいという海外の日本語教師からの要求により生まれた。それは語彙、文法、語用のレベルにおける日本語学習者の誤用分析のデータとして有効であるだけでなく、だれもが日本語の正誤がチェックできるという実用性を詳しく説明し、さらに今後のコーパス研究の可能性についても提示された。

次に本プロジェクトを企画する望月圭子氏が、日本人の英語学習者に“in”の過剰使用が多い原因として、日本語の「～内」「～の中」を「内部空間に融合しているモノ」とする空間認知が関与している可能性があること示された。  
最後に、本コーパスのシステム開発担当者の佐野洋氏（本学教員）から、日本語、英語、中国語に共通してみられる前置詞の普遍性と個別性に関するコメントがあり、研究会が締めくくられた。（谷口 2015）

## 2015年度

プロジェクト最終年の年度初めに提示された部門経費は10万円に満たず、プロジェクト遂行はさらに厳しさを増した。最終年には、プロジェクトの論文集の刊行を優先させ、当部門主催の研究会等は開催せず、他部門との共催により実施せざるを得なかった。

### 1. (2015/08/01～02) 国際ワークショップ「卓越した外国語教育科学」

(1) 主催：東京外国語大学「学習の可視化・多様化を指向したe-Learning教育システムの開発と教育の高度化」事業

共催：国立台湾師範大学/Pennsylvania State University The Advanced Center for the Study of Learning Sciences 科研基盤(B)「多言語コーパスの構築と言語教育への応用可能性」(川口裕司代表) 科研基盤(B)「アジア諸語の社会・文化的多様性を考慮した通言語的言語能力達成度評価法の総合的研究」(富盛伸夫代表) 科研基盤(B)「英日中国語ウェブ誤用コーパス構築と母語をふまえた英語・日本語・中国語教授法開発」(望月圭子代表) 東京外国語大学国際日本研究センター国際日本語教育部門 協賛：旺文社

#### 【全体要旨】

国際日本語教育部門「母語・地域性をふまえた日本語教育研究とウェブ辞典構築-国内外の日本語教育研究機関との協働的研究」の一環として、2015年8月1-2日 The 3rd International Workshop on Advanced Learning Sciences 2015を開催した。曾志朗院士(中央研究院)、協定大学国立台湾師範大学より、鄧守信教授・宋曜廷教授・陳柏熹教授・陳浩然教授、陸潔先生(上海外国語大学)、Hintat Cheung教授(香港教育学院)、David Monk教育学院長・Li Ping教授(ペンシルバニア州立大学)、長谷川信子教授(神田外国語大学)、迫田久美子教授(国立国語研究所)、本学より富盛伸夫名誉教授・川口裕司教授・高島英幸教授・投野由紀夫教授・佐野洋教授・望月圭子が、脳科学と第二言語習得、e-learning、ウェブ誤用辞典構築、華語文能力測検について活発な議論を行った。

(望月 2015)

以下、部門院の発表

(2) Cross-Linguistic Learners' Corpora: English, Chinese, Arabic and Japanese

望月圭子 / 佐野洋 / Caroline Kano / Ebeid Ehab / Ahmed Karim Ezz / Laurence Newberry-Payton / 申亜敏 / 游韋倫 / 井上剛 (東京外国語大学)

#### 【要旨】

詳細は、次のサイトに詳しい。<https://mdle.tufs.ac.jp/3rdIWALS/>

### 2. (2015/07/11) 『外国語と日本語との対照言語学的研究』第16回研究会

(1) 共催：国際日本研究センター・対照日本語部門

(2)

1「マダガスカル手話等の一致動詞について」箕浦信勝氏(東京外国語大学, 手話言語学、一般言語学)

#### 【要旨】

箕浦氏は、手話の文法、特に一致動詞について日本手話とマダガスカル手話を対照させた。日本手話では、順向動詞はP・R項とだけ一致し、反転動詞はA項とだけ一致する。マダガスカル手話は順向動詞的でありながらA項とも一致するものも見られることが実際の手話をビデオで紹介しながら説明された。

(早津 2015)

2「フランス語における非従属節化の問題をめぐって」秋廣尚恵氏(東京外国語大学, フランス語学、統語論)(連携研究員)

#### 【要旨】

秋廣氏は、フランス語の従属節で因果関係を表す4つの接続詞-car, comme, parce que, puisqueについて発表された。談話文法レベルで、「発話行為」(speech acts)を遂行する機能を果たすこと、主節から独立性の高い非従属的な様々な接続詞の用法が観察されるということを実例を基に解説した。

(谷口 2015)

3講演：「言語類型と2種類の複合動詞」影山太郎氏(国立国語研究所, 言語学：形態論、統語論、意味論)

#### 【要旨】

影山氏は、日本語のV+V型複合動詞とN+V型複合動詞について、形態的な言語類型の観点から分析した。日本語において前者の複合動詞の生産性が極めて高く、後者が少ない理由は、述語領域と名詞領域における形態的な膠着性(agglutinative)の非対称性が影響しているということである。

(谷口 2015)

## 2-3 プロジェクト〈2〉の達成状況と課題

第2期のプロジェクトは、逼迫した予算の中で成果を目に見える形にすることが求められた。一方で、本学がSGUに採択されたこと、また、大学院前期課程の改編に伴い、国際日本学研究院が立ち上げられたこと(2015)等による業務の増加が著しく、第1期プロジェクト時より、研究環境は、予算的、時間的に年々厳しさを増していった。そのため、第2期プロジェクトでは、部門として行うべきものに優先順位を設け、そのうえで大学、他部門、部門員の科研との共催の形を取る等工夫して研究会等を開催した。しかし、実際には、部門長はじめそれぞれが多忙を

極め、プロジェクト2年目以降は定期的な集まりもままならず、部門としてまとまりに欠け、部門らしさが十分出せなかったと反省している。

期間中、当部門の設置目標にある「言語別教材の開発」の具体的な教材開発には至っていない。しかし、2010年度以降、2期にわたる3か年プロジェクトを通し、当部門は、国内外の日本語教育研究機関との協働的研究を推進し、教育研究を目的としたオンライン英作文学習者コーパス・誤用辞典（センターHP「オンラインリソース」）を公開する等、「言語別教材の開発」のための基盤研究を着実に実施してきたといえる。

今後、プロジェクトで培われた基盤研究がそれぞれの教育機関で、具体的に「言語別教材の開発」につながっていくことを切に願うものである。

また、第2期プロジェクトの期間中も国内外の研究者とよい出会いがありいい関係を築き、意義ある協働研究を進めることができた。今後このネットワークをどう活用していくかが、課題となる。

## おわりに

当部門の3ヶ年プロジェクト〈2〉は、今年度が最終年となる。それは、2009年度に設立された現国際日本研究センターの最終年とも重なる。センターは今後新たな形で研究活動を継続していくことになるが、2期にわたるプロジェクトを通して築かれた国内外の研究者とのご縁、連携関係は、今後の協働研究推進の礎になるものである。それをもとに、新たな研究組織が国内外の日本語教育にさらに寄与することを切に願うものである。

最後に、このプロジェクトにご協力いただいた多くの皆様に、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

## 参考文献・資料

国際日本研究センター 刊行物

<http://www.tufs.ac.jp/common/icjs/jp/1500.html>

「国際日本研究センター・ニューズレター」第11号（2013年6月）～第17号（2015年6月）

ジャーナル「日本語・日本学研究」 vol.3

<http://www.tufs.ac.jp/common/icjs/jp/1300.html>

谷口龍子（2013）「みかん構文」「多重文法」岩崎勝一（UCLA）講演会・研究会開催「国際日本研究センターニューズレター」2013/10 No.12

望月圭子（2013）「文法・語用と教育シリーズ2 母語をふまえた外国語教育“日本語・英語・中国語の対照研究とE-LEARNING教材開発”国際ワークショップ」「国際日本研究センターニューズレター」2013/10 No.12

谷口龍子（2014）「日本語・英語・中国語の対照研究と日本語教育」研究会報告「国際日本研究センターニューズレター」2014/2 No.13

谷口龍子、早津恵美子（2015）「日本語・英語・中国語の対照研究と日本語教育」研究会報告「国際日本研究センターニューズレター」2015/10 No.17

佐野洋（2016）「日本語教育事情調査データのDB化とサイト公開—国内外の高等教育機関における日本語教育事情調査（中間報告Ⅳ）」

『日本語・日本学研究』Vol.6 東京外国語大学国際日本研究センター（2016年3月発刊予定）

## 注

- 1 第1期3か年プロジェクト（2010～2012）は、『国際日本語教育部門3か年プロジェクト成果報告論文集 日本語学習者の母語・地域性をふまえた日本語教育研究—国内外の日本語教育研究機関との協働的研究（2010～2012）』（2013）参照。
- 2 海野多枝の後任として、佐野洋が新たに部門構成員に加わった。
- 3 2015年4月1日より学内の組織改編により、所属が大学院国際日本学研究院に変更になった。
- 4 同上。

# **Overview of “Japanese Language Research and Construction of Web Dictionary Based on Learners’ Native Languages and Regional Characteristics**

— In Cooperation with Educational and Research Institutes Offering Japanese Language Study both within Japan and Abroad.” (2013-2015)

KOBAYASHI Yukie (Tokyo University of Foreign Studies)

The International Center for Japanese Studies was established in April 2009 with the mandate to develop a foundation for Japanese language education research. The Center's goal is to build a global hub for Japanese education. The International Japanese Education division have two main objectives.

The first is to assess the present state of Japanese language education in higher education institutions both inside and outside of Japan, as well as creating a database of its findings that will contribute to research on Japanese education. The second is to develop materials for Japanese education. To achieve this, the project II titled “Japanese Language Research Construction of Web Dictionary Based on Learners’ Native Languages and Regional Characteristics—In Cooperation with Educational and research Institutes Offering Japanese Language Study both within Japan and Abroad” was carried out for 3 years from 2013 to 2015 following to the former project(2010-2012).

The study developed an interface for a Japanese language education research program with Arabic, English, Chinese, French, and Thai languages that will allow further research to be built atop of it.

## 第 2 章

# 認知スタンスの言語使用に対する影響について<sup>1</sup>

—中国人日本語学習者が使う日本語を例に—

趙華敏（北京大学）

キーワード：認知スタンス 言語使用 「私」の有無 事態の内と外 授受表現

**【要旨】** 認知言語学研究の発展は従来の言語研究と違う角度から言語の本質と特徴を解釈し、言語を記述・分析する手がかりをもたらししてきた。その研究方法は母語を対象として記述する場合ばかりでなく、外国人がその国の言葉を使うときに生じる違和感を分析するにも有用である。

本論文では、中国人日本語学習者が日本語を使うときにしばしば現れる「あれっ」と思われるような不自然さを認知言語学の立場から分析して、以下の結論が得られた。①認知スタンスが事態把握の型を決定する。②中国語は主客対立的な事態把握型の言語で、記述対象の事態の外からそれを語る。③中国人日本語学習者の「私」の多用、無生物を主語にする語り方、授受表現の不使用など、日本語母語話者に違和感を感じさせる使い方は主客対立的な事態把握と大いに関係がある。

## 1. はじめに

認知言語学研究の発展は従来の言語研究と違う角度から言語の本質と特徴を解釈し、言語を記述・分析する手がかりをもたらししてきた。その研究方法は母語を対象として記述する場合ばかりでなく、外国人がその国の言葉を使うときに生じる違和感を分析するにも有用である。

本論文では、中国人日本語学習者が日本語を使うときにしばしば現れる「あれっ」と思われるような不自然さを認知言語学の立場から分析しようと思う。

次の例を見よう。

- (1) 私は李と申します。
- (2) 日本での生活はきっと私の日本語を上手にならせると思います。
- (3) 息子は恐竜好きで、誕生日に祖母が買ってあげた恐竜の絵が入ったシャツがもう死ぬほど気に入っている。

(1) は中国人日本語学習者が自己紹介をするときの定番のようなものである。筆者の観察では、中国で5、6年日本語を勉強した学習者でも、特に注意していなければ、しばしば出てくる使い方である。「私」を言わなければ落ち着かないようである。

(2) は翻訳調を匂わせる表現で、日本語母語話者が馴染まない言い方である。

(3) は中国人日本語学習者をさんざん悩ませる授受表現の例である。日本語母語話者が「祖母が買ってくれた」「祖母に買ってもらった」と表現するところを、中国人日本語学習者では「祖母が買ってあげた」と表現する問題である。あるいは、授受表現の不使用になる「祖母が買った」と表現するのも珍しくないだろう。

一見別々の問題のようだが、認知言語学の「事態把握」の型と密接な関係がある。本論文ではこのような認知スタンスの言語使用に対する影響の立場から、上のような現象を分析してみたい。

## 2. 先行研究と本論の立場

『認知言語学キーワード事典』（2002）の「解釈／捉え方（construal）、解釈する（construe）」の項で、次のように

定義されている。『『解釈』とは、発話のプロセスにおいて把握事態を分節し、意味あるものとして構築する創造的な営みを言う。解釈の仕方を特に『捉え方』と呼び、専門用語として用いる』。

池上（2009）ではこの「解釈／捉え方（construal）、解釈する（construe）」のことを事態把握といて、多くの研究で言及している。池上（2012）では、事態把握の仕方に関して、大きく分けて〈主客合一〉的な事態把握と〈主客対立〉的な事態把握<sup>2</sup>があると述べ、両者の定義を以下のように指摘されている。

〈主客合一〉的なスタンスでの事態把握は「話者が言語化しようとする事態内に身を置き、当事者として体験的に事態把握する場合。実際には問題の事態の内に身を置いていない場合であっても、話者は（心理的な自己投入を経て）問題の事態の内に入り込み、あたかもそこに臨場する当事者であるかのように体験的に事態把握する。」

〈主客対立〉的なスタンスでの事態把握は「話者が言語化しようとする事態の外に身を置き、傍観者、ないし観察者として客観的に事態把握をする場合、実際には問題の事態の中に身をおいている場合であっても、話者は（心理的な自己分裂を経て）自らの分身の一つを事態の外に移動させ、そこから傍観者、ないし、観察者であるかのように（自らのもう一つの分身が残ったままになっている事態を）外から客観的に事態把握する。」

日本語話者の場合は、〈主客合一〉的な事態把握を取りやすいから、〈自己投入〉の認知的営みもより容易に実行する。一方、中国語の場合、「中国語話者のスタンスは英語話者に近い印象を受ける」と述べられている。

この日本語の主観的把握については、池上（2005）ではすでに Langacker の主観的把握の考え方について補足ないし手直しとして「日本語話者としての立場からの枠組み修正の試み」として、次のように述べている。「日本語の——とりわけ英語のような言語との対比を特に強調するという——立場からするならば、むしろ〈主観的〉な事態把握のほうが言語化を意図しての事態把握の基本的な——プロトタイプといてよい——形式ではないかということである。」

上原（2001）では言語類型論のための主観性に関する言語表現の（代表的な）3タイプとして、i 移動表現、ii 人の内的状態を表す表現、iii 聞き手に対する心的距離を表す表現を考察し、次のような結果を出している。

i 移動表現に関しては、日本語はより主観的で、英語はより客観的なほうに近い。中国語は英語ほど客観的ではないが、日本語よりかなり客観的なほうにあるようだ<sup>3</sup>。

ii 人の内的状態を表す表現に関しては、日本語はより主観的で、英語はより客観的になっている。中国語は英語と同じように客観的だと位置づけているようだ<sup>4</sup>。

iii 聞き手に対する心的距離を表す表現に関しては、日本語はより主観的で、英語はより客観的なほうに近い。中国語は英語ほど客観的ではないが、日本語よりかなり客観的なほうにある<sup>5</sup>。

広瀬（2012）では、言語使用は「状況把握」（私的自己による思いの形成）、「状況報告」（公的自己による思いの伝達）、「対人関係」（公的自己による聞き手への配慮）という三つの層からなり、言語のもつ「自己中心性」が公的自己にあるか、私的自己にあるかによって、三つの層の組み合わせが異なるという言語使用の三層モデルを出している。

公的自己中心の英語では、通常、状況把握と状況報告が一体化し、それに対人関係の層が付加される。状況把握と状況報告が一体化するということは、状況を報告する状況外の視点が優先されるということであり、話し手は、報告上必要なことはできるだけ言語化することになる。私的自己中心の日本語では、通常、状況把握が状況報告および対人関係から独立している。したがって、状況把握においては、話し手は自由に状況の中に身をおき、状況内から状況を捉えることができ、また、すでに自分の意識の中に確立していることは言語化する必要はない。

上の先行研究で引用した池上氏の日本語話者の〈主客合一〉的な事態把握と英語話者の〈主客対立〉的な事態把握は以下のように図示できるだろう。

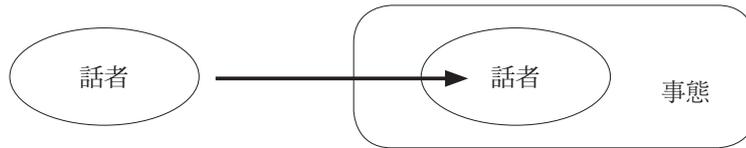


図1 「主客合一的把握」

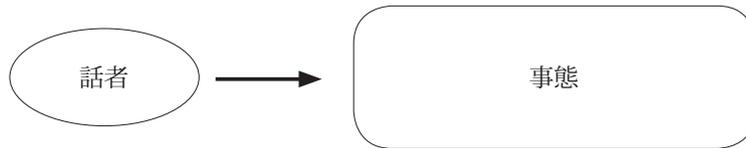


図2 「主客対立的把握」

話者：言語主体

事態：把握の対象

○：言語表現の表示範囲

→：把握の方法

以上をまとめると、事態の捉え方では大きく分けて主観的と客観的にわけることができ、日本語は主観的なほうに属し、英語は客観的なほうに属されると一般的に認められているが、中国語に関しては、まだ定かではないところがある。

事態把握のことを語るときによく上げられる『雪国』の冒頭の翻訳例をもう一度見よう。

日本語：国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。

英語：The train came out the long tunnel into the snow country.

Translated by EDWARD G. SEIDENSTICKER

中国語1：穿过 县界 长长的隧道， 便是 雪国。 (叶渭渠)  
 抜ける 国境 長いトンネル である 雪国

中国語2：穿过 县界上 长长的隧道， 便是 雪国。 (高慧琴)  
 抜ける 国境にある 長いトンネル である 雪国

ここで議論の焦点になるこの文の主語は列車なのか、列車に乗っている主人公の目から見た情景なのかについては、日中では偶然の一致になっている。このように、中国語は日本語と同じように主客合一的の把握もすれば、英語のように主客対立的の把握もするので、中国人日本語学習者が日本語を使う際、余計に混乱してしまう。

これまでの研究では、日本語は「主観的」で、英語は「客観的」であり、中国語は英語に近いという見方が主流になっている。筆者も同感を持ち、すでに発表した論文の中で『「事態把握」の仕方による両言語の差異が中国語母語話者の日本語の運用に影響をもたらしている』(2014) と思っている。

次節ではその言語的証拠をあげながら分析し、認知スタンスの相違による中国人日本語学習者の言語使用への影響を明らかにしたい。

### 3. 中国人日本語学習者が使う日本語の例

「はじめに」で言及したように、中国人日本語学習者の使う日本語を観察していると、文法や語彙の問題をクリアした学習者でも、日本人母語話者の日本語としっかりいかない問題がある。本節では、その実例を見てみたい。

#### 3.1 「私」の有無

事態把握は主観的か、あるいは客観的かによって、話の中で話し手の「自我」がどのように存在するかを決める。主観的な言語では話し手が自分のことを事態の中に投入して語るのも、自分のことが現れた言語形式の中に見えなくなる。わざわざ「私」を有標にする場合はかえって特別な意味が帯びてくるのである。

(1) の「私は李と申します」に対しては、日本語母語話者なら、「森と申します」はもっともふつうの自己紹介になるだろう。

次の例を見よう。

(4) ①私は一年生より日本語を一生懸命勉強してきました。四年間ぐらいの勉強を通して、②私は日本語の読み書き能力は絶えずに上達してきました。今、③私は一級能力試験に合格して、日本人との会話は問題ないと思います。そして、④私は大学でいろいろな日本語コーナの活動によく参加しています。例と申しますと、去年、⑤私は担当者として、日本文化祭りという活動を行いました。その祭りは学生にたいへん受けられました。また、二年生の夏休み、⑥私は日本からの大学生と一緒に植林したことがあります。その活動によって、⑦私は自分の能力を活かしたいという気持ちをもっと強くなりました。そして、私の英語の能力にも自信があります。今、⑧私はもう CET4 と CET6 に合格して、もし学生の中に、英語を母国語としている学生があったら、彼らとの交流は問題ないと思います。

(5) 今まで、①私はよくいろいろな日本人との交流活動に参加しました。例えば、日本企業の会員との交流会や日本人にキャンパスを案内することなど。参加したことだけでなく、②私は国際交流活動を企画したこともあります。二年生の時中日交流協会の宣伝部副部長をやっていました。日本文化や日本歴史に関する講座を企画し、行ったこともあります。講座は大成功しました。参加した人は非常に多く、大変いい評価を得ました。このような経験によって、③私は自分の責任感と明るい性格を培うことができました。

(4) と (5) は筆者が担当する三年生前半の「日本語の作文」の授業での学生の自己 PR の例から取ったものである。日本語そのものの適切でない部分をここで無視することにし、「私」の有無を検討の課題にしよう。筆者の判断では、(4) も (5) も①以下の「私は」は全部削除しても、いっこう意味の伝達には差し支えないだろう。

#### 3.2 事態の内にいる自分と外にいる自分

(6) 大阪大学での一コマの授業は私の考え方を変えたきっかけになりました。

(7) このような経験は私の責任感と明るい性格を培いました。

「はじめに」の (2) と一脈通じる使い方である。学部 3 年生の日本語の作文の授業に出た例である。日本語母語話者なら、おそらく次のように違う角度から表現するのがふつうだろう。

(6´) 私の考え方は大阪大学での一コマの授業によって変わった。

(7´) 私はこのような経験を通じて責任感と明るい性格を持つようになった。

(8) 豊かな社会経験は、私に視野を広げさせ、能力を鍛えさせ、友達を作らせ、本に載っていない知識を教えてくださいました。

学部 3 年生がインターンシップを語る感想の冒頭の文である。同じ意味のことを日本語母語話者に書いてもらったら、次のような文が返ってきた。

(8´) 社会で働く経験を多くすることによって、私は視野が広がり、(さまざまな) 能力も身につき、また友人もできた。そして、本では得られない知識も得ることが出来た。

両方は次のようなところで違っていると言えよう。

(8) は「豊かな社会経験は」によって、インターンシップを一つの事態として語ることにしているのに対して、(8´) は「私は視野が広がり」によって、インターンシップという事態の中において自分の体験を語るイメージを作り出している。

次は翻訳の授業で出た例である。

(9) ①从这家人的楼窗望出去，可以望见好大一片市区。／家の窓から眺めると、市内の町並みが一面に広がる。……

②这是个周末的夜晚，……／週末の夜、……<sup>6</sup>。

『漢日翻訳教程』苏琦 编著 商務印書館 1994：298 - 299)

読みやすいように、中日の対応になっているところを示しておく。

①从 这家人的 楼窗 望出去  
から この家の 窓 眺める →家の窓から眺める<sup>7</sup>

②这 是 个 周末的 夜晚  
これ だ 一つ 週末の 夜 →週末の夜

6名の修士課程の学生が翻訳したが、申し合わせたように次の翻訳が返ってきている。

翻訳参考訳の①「家の窓から眺めると」に対して、学生の訳では次のようになっている。

① a. この家の窓から眺めると

b. この一家の窓から眺めたら

c. この家の窓から外を眺めると

d. その家の窓から眺めると

e. ある家庭の窓から眺めると

f. ビルにあるこの家の窓から見渡したら

のように、どれも「家」の前に「こ・そ・あ」のどれかがついている。参考訳と比べれば、「こ・そ・あ」がつくことによって、話者が離れたところから物語る感じが強くなっていることが分かる。

②では学生の訳がまた参考訳と大きな違いが見られた。

a. とある週末の夜のことである。

b. ある週末の夜

c. それはある週末の夜である。

d. 今夜は週末だから

e. ある週末の夜だった。

f. ある週末の夜だった。

のように、中国語には「这是个／これは一つの」があったから、やはり「ある週末の……だった」、「それは……だった」、「今夜は……だった」と、話者の視点を押さえておかなければ落ち着かないようである。

(6) (7) (8) は話者自身のことを語る文だが、日本語母語話者のように自分のことを事態の中に投入して語るのではなく、一步離れて、話者自身のことをあたかも他人のこのように語るのが中国人日本語学習者のやり方になる。日本語母語話者が聞く場合、違和感を感じるのである。

(9) は本来、第3人称の小説で、語り手は自分の見たことを語るのだが、参考例の翻訳は主客合一のやり方で翻訳されている。学生は完全に第3人称のやり方で翻訳している。このほうがむしろ中国人日本語学習者にとっては当た

り前の語り方になっている。

### 3.3 授受表現の誤用と不使用

授受表現は従来、中国人日本語学習者にとって難しい学習事項の一つである。なぜ、どこが、どのように難しいかについては、たくさんの先行研究で議論されているが、認知スタンスの角度からの研究は、管見の限り、まだ少ないようである。

上の例を再掲し、問題のありかをみよう。

(3) 息子は恐竜好きで、誕生日に祖母が買ってあげた恐竜の絵が入ったシャツがもう死ぬほど気に入っている。

中国母語話者の認知スタンスから考えれば、このような述べ方はごく普通の成り行きになる。というのは、語り手は「息子が祖母から得られた恐竜の絵が入ったシャツがもう死ぬほど気に入っている」ことを伝えることが目的で、外側から見た場合は「祖母が買ってあげた」ことになる。しかし、日本語母語話者ならば、語り手は「息子」と同じ立場に立って、「祖母が買ってくれた」ことをありがたく思っている。その気持ちを伝えるために考えられる言い方は次のようになるだろう。

(3´) 息子は恐竜好きで、誕生日に祖母が買ってくれた恐竜の絵が入ったシャツがもう死ぬほど気に入っている。

あるいは、語り手は「息子」と同じ立場に立って、「祖母に買ってもらった」ともいえる。

(3´´) 息子は恐竜好きで、誕生日に祖母に買ってもらった恐竜の絵が入ったシャツがもう死ぬほど気に入っている。

以上は授受表現の誤用であるが、授受表現の不使用については、筆者が担当する翻訳コースの修士の授業で出た用例を見よう。

(10) 有资料显示，每天最少跟父亲互相接触两小时的孩子，与每周跟父亲玩的时间不超过六小时的孩子相比，不仅智力发达，而且也能跟小朋友友好相处。／参考訳：お父さんが一日最低二時間は子どもとつきあい、一緒に遊んでくれる子どもは、週に六時間以下しか、お父さんと遊んでもらえない子どもに比べると、知能が高いばかりでなく、友だちに好意をもって迎えられるとのデータがあります。

焦点は「跟父亲玩／お父さんと遊んでもらえる」にある。

学生の日本語訳は次のようになっている。

①データによりますと、毎日父親と少なくとも2時間を接触する子供は毎週父親と6時間も遊ばない子供より知力が発達だけではなく、子供たちとの仲も良くことが明らかにします。

②少なくとも二時間接触する子供は、毎週父とせいぜい六時間接触する子供より、知力の発だけでなく、子供と仲間よく付き合うことができるとある資料が表明します。

③資料によると、一週ごとに父親と遊ぶ時間が6時間に達していない子どもたちに比べて、毎日少なくとも父親と2時間触れ合う子どもたちの方は、知力が高いのみならず、仲間たちとも仲良く付き合える。

(11) 年轻人不可能永远年轻。不久即将步入中年，成为公司和国家的中坚力量。唯有使年轻人严格要求自己，公司和国家才有希望。／参考訳：若者もいつまでも若くはられない。やがて中年になり会社や国の中核になる。若者にこそしっかりしてもらわなければ会社も国も将来が危うくなる。

学生の訳文では次のようになっている。

①若者は永遠に若いことができません。ほどなく中年に入り、会社と国家の中堅になる。若者に自分で自分を厳格に要求させてこそ会社と国家は希望があるのです。

②永遠まで若い人はいないに違いない。若者はそろそろ中年に入り、会社や国の大黒柱になるから、自身に対して厳しい要求を出すこと抜きに、会社や国には希望が無いだろう。

③若者は永遠まで若いままでいられません。中年になってから、会社と国家の大黒柱となります。若者が自分に対して厳格であってこそ、会社と国家の未来に希望に満ちることができます。

④若者はいつまでも若いままでいるわけがない。まもなく中年の仲間入りをして、会社や国の中堅になる。若者は自分を厳しく律するこそ、会社や国には希望が生まれる。

⑤若者はいつまでも若いままでいるわけがない。まもなく中年になり、会社と国の柱になるのだ。若者に厳格に自分を律してもらってこそ、会社と国の将来性がある。

参考訳の「若者にこそしっかりしてもらわなければ」のところが学生の訳文①は「自分を要求させ」、②は「自身に要求を出す」、③は「自分に厳格であって」、④は「自分を律する」ことになっていて、「テモラウ」の不使用になっている。14名の学生の中で1名だけは⑤のように「若者に自分を律してもらって」になっている。

上の例から見られるように、修士課程に入った学生でも授受表現を使いこなすまではまだほど遠い。

## 4. 認知スタンスによる言語使用の相違

この節では認知スタンスによる言語使用への影響という立場から前掲の用例を分析してみたい。

### 4.1 中国母語話者の認知スタンス

2の先行研究で日本語母語話者の〈主客合一〉的な事態把握と英語母語話者の〈主客対立〉的な事態把握を図示した。

〈主客合一〉的な事態把握の言語では、図1の話者が→の示したように、自分のことを言語表現の表示範囲の中に投入して事態を把握する。そうしたら、多くの場合、「私」は言語化されないのが普通である。〈主客対立〉的な事態把握の言語では、話者が離れたところで言語表現の表示範囲の中の事態を観察し、事態を把握する。言い換えれば、「話者」である「私」を離れたところで事態の中の一人物として語るのである。先行研究で触れたように、日本語は「主客合一的把握」型の言語で、「主客対立的把握」型は英語話者の認知スタンスのプロトタイプだと言えよう。中国語は英語に近い認知のスタンスをしているといわれている。

おそらくどの言語も絶対にそのどれかと言えないだろうが、筆者は「より」をつけて、中国語は「より主客対立的把握」型のほうに属されると思う。

### 4.2 「私」の有標化について

3.1の用例で見られたように、中国人日本語学習者の使う日本語の中には「私」が異常に多い。

このような問題については、近藤・姫野(2012)では次のように説明している。「イマ・ココの主観的把握を好む日本語母語話者には、事態の中に自身の周りを感じや知覚で捉え、目や耳で知覚できるもの、認識できるものを言語化し、知覚できないものは言語化の対象としない傾向がある。通常、われわれの視界には、自分自身は入り込まない。自分の体の一部、例えば手足などが見えていることはあるが、たとえ見えていても、通常はそれらを認識することはなく、言語化の対象にはならない。主観的把握の傾向のある日本語母語話者には、『私』は事態を観察し把握する原点であり、認識の対象にならない。『私』は見えないのである。」

客観的把握の傾向にある中国語母語話者は日本語で表現するとき、学習暦の短い学習者ほどこのようなマイナスの転移が強く見られるのである。客観的把握の傾向にある中国語母語話者は事態の外から対象を語り、「私」を事態の中の一員として見ている。「私」を言わなければ、誰のことを言っているのか、不安になるのである。したがって、自己紹介にしても、自分のことを文章にしても、「私」が頻繁に出てくるのである。

自己紹介の例を図示すれば、以下ようになる。

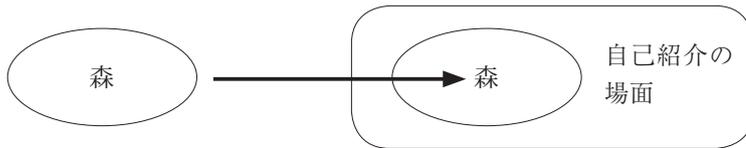


図3 「主客合一的把握」  
「森と申します。」

自己紹介の場面では、「主客合一的把握」だと、複数人間が同じ事態の中において、自分のことをみんなに紹介することになる。それぞれ自分の名前を名乗るのが当然のことで、わざわざ「私」を強調する必要はない。それに対して、「主客対立的把握」だと、状態が違って来るのである。

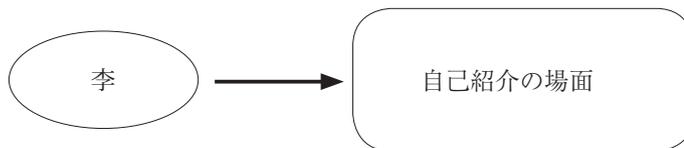


図4 「主客対立的把握」  
「私は李と申します。」

「李」から見れば、これから自己紹介をすることになる。複数人間は自己紹介の場におかれ、自分のことをほかの人に紹介する。複数人間に対しては、「私は李と申します」になるのである。

例(4)も(5)も図4と同じように、「自己PR」を一つの事態と捉え、自分はどんな人物かをピーアールするので、「私」は頻繁に使われるのである。

#### 4.3 事態の外にいる自分

例(6)(7)の「一コマの授業」、「経験」のような無生物は有生物をどうこうするのは日本語の言語習慣に合わないといえ、それまでだが、これも「主客対立的把握」の結果から説明がつく。

例(6)で説明しよう。

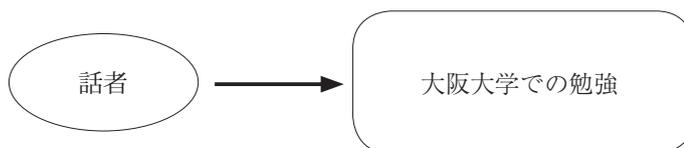


図5 「主客対立的把握」  
「大阪大学での一コマの授業は私の考え方を変えたきっかけになりました。」

話者は大阪大学での勉強は自分にとってどんなものだったかを語る場面になる。したがって、「大阪大学での勉強」という事態の中に自己を投入して語るのではなく、「大阪大学での勉強」は自分をどうしたのかを語ることになるので、「大阪大学での一コマの授業は……」になったわけである。日本語母語話者にとって、違和感を感じる語り方にはなるが、「主客対立的把握」のスタンスをとる中国人日本語学習者にとっては自然に出てくる語り方になる。

(8)の「豊かな社会経験は、私に視野を広げさせ……」も同じ道理で説明できる。

(9)も作者は事態の外から「家」の中で起きたことを語ることになる。すなわち、外から「家」にいる人物の一人一人のことを描いていく。それで①の「この家から眺めると」となるのである。「この家」で始まったら、手で指しながら言っているイメージが強く、たとえ家の中においても、作者はこの家のメンバーと違う立場に立つことになると感じられるだろう。②の「週末の夜」と「ある週末の夜」のイメージの相違も同じ道理で説明できるだろう。外から

の観察者なら、常に「これは週末の夜だ」と事態の時間を抑えて、そのときそのときの状況を語っていく必要が出てくるのである。

#### 4.4 授受表現の不使用

(10) の「お父さんと遊んでもらえない子どもに比べると」と(11)の「若者にこそしっかりしてもらわなければ」の中国人日本語学習者の授受表現の不使用も認知スタンスと大いに関係している。

例(10)を図示してみよう。

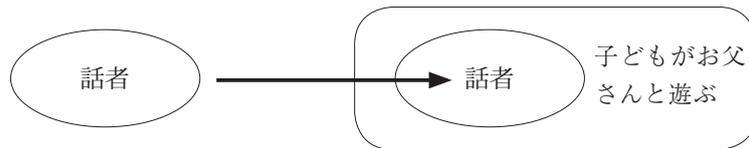


図6 「主客合一的把握」

「お父さんと遊んでもらえない子どもに比べると」

話者は自分のことを事態の中に投入して語る場合、子供が父親と一緒に遊べることは子供の期待することになる。この事態のありがたさを表すために授受表現の使用が必要になってくる。

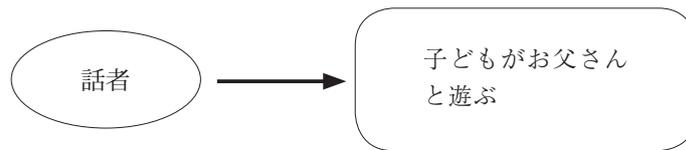


図7 「主客対立的把握」

話者は単なる事態を語るなら、「父親と6時間も遊ばない子供」のように、「父親に遊んでもらう」ありがたみを特に強調する必要がなくなるので、授受表現を使わなくても不都合がない。それで中国人日本語学習者の言語生活には日本語母語話者のように授受表現を使う必要がない場合が多いので、日本語の授受表現を使いこなすのが難しいと筆者は主張したい。

授受表現の不使用の原因は(11)の説明にも適用する。

## 5. おわりに

以上、中国母語話者が使う日本語と日本語母語話者の使う日本語との相違を例に、認知スタンスが言語使用に与える影響を観察してきた。結論をまとめると、以下ようになる。

- ①認知スタンスが事態把握の型を決定する。
- ②中国語はより主客対立的な事態把握型の言語で、記述対象の事態の外からそれを語る。
- ③中国人日本語学習者の「私」の多用、無生物を主語にする語り方、授受表現の不使用など、日本語母語話者に違和感を感じさせる使い方は主客対立的な事態把握と大いに関係がある。

## 参考文献

- 池上嘉彦 (2005) 「日本語の中の 'Subjective Construal」 『日本認知言語学会論文集』 第5巻 PP 547-557
- 池上嘉彦 (2012) 〈言語の構造〉から〈話者の認知スタンスへ〉 『国語と国文学』 平成二十四年十一月特集号 明治書院 PP 3 - 17
- 池上嘉彦 (2013) 「〈視点〉から〈事態把握〉へ—〈自己ゼロ化〉の言語学と詩学」 多言語における視点研究シンポジウム 北京大学

- 上原 聡 (2001) 「言語の主観性に関する認知類型論的一考察」『日本認知言語学会論文集』第1巻 PP 1-11
- 近藤安月子・姫野伴子 (2012) 「私 (原点)」『日本語文法の論点 43 「日本語らしさ」のナゾが氷結する』研究社 PP 4
- 趙華敏 (2013) 「認知と言語の使用について」東京外国語大学日本研究センター夏季セミナーでの講演
- 趙華敏 (2014) 「日本語研究と日本語教育」『日本言語文化研究』(第十輯) 学苑出版社 PP 3-21
- 趙華敏 (2015) 「認知と言語の使用について - 中国母語話者が使う日本語から見て」『日本語教育における日中対照研究・漢字教育研究』駿河台出版社 PP209 - 228
- 辻 幸夫編 (2002) 11 『認知言語学キーワード辞典』 研究社 PP 20
- 廣瀬幸生 (2012) 「主観性と言語使用の三層モデル」言語と(問)主観性研究フォーラム in 仙台
- 蘇琦 (1994) 『漢日翻訳教程』 商務印書館 PP298 - 299

## 注

- 1 本論文は東京外国語大学で行われた2013年、2014年夏季セミナーでの講演や一連の研究論文をもとにまとめたものである。
- 2 <主観的把握><客観的把握>とも呼ばれている。
- 3 氏の論文では中国語の位置するところに「?」がついてあるので、筆者は「ようだ」をつけた。
- 4 同4。
- 5 iiiの中国語のところに「?」がついていなかった。
- 6 刘心武の《远处的霓虹灯》/遠くのネオン《北京晚报》1991.5.18)に載った小説の冒頭の段落。日本語訳は教科書にあった翻訳参考例である。
- 7 →の前の部分は中国語と対応している語彙で、→の後は翻訳参考例の訳文である。以下のところも同じ方法を使っている。

# **A Study about the Influence of Cognitive Stance Bringing to Language Use**

—Taking the Japanese Used by Chinese Native Speakers for Example—

Hua Min Zhao (Peking University)

Keyword: cognitive stance; language use; the presence of “I”; inside and outside of the event; Give-receive expression

Cognitive linguistics adopts a perspective which is different from precedent studies. It tends to explain the essential features of language. With the development of cognitive linguistics, we have some new methods to describe and analyze the language. This research method is not only suitable for the study of native language, also can be used to analyze the misuse of foreign learners.

This thesis aims to analyze unnatural expressions in Japanese used by Chinese native speakers from the perspective of cognitive linguistics. The following conclusions are obtained in this paper: 1.The type of cognitive stance decides the way of explanation.2. The Chinese language often explains a target from the outside of the event in the way of subject-object opposition.3. Chinese learners normally prefer to use “I”, to describe an event with inanimate objects as syntactic subjects, and not to apply Give-Receiving expression, which are mostly due to the subject-object opposition in Chinese language but could make Japanese feel confused.

# A Contrastive Study of Prepositional Errors in TUFs Sunrise Advanced Learners' Corpora of English by Native Speakers of Japanese and Chinese<sup>i</sup>

Keiko Mochizuki and Laurence Newbery-Payton  
(Tokyo University of Foreign Studies)

Keywords: Learner Corpus, Contrastive Linguistics, Prepositions, Native Language Interference

1. Introduction
2. Data Set
3. Error Overview
4. Error Analysis
5. Conclusions

## 1. Introduction

This paper presents a contrastive study of translations into English by native speakers of Mandarin Chinese (henceforth, Chinese) and Japanese, focusing on learners' misuse of prepositions. The error distribution provides evidence of native language transfer as a contributory factor towards the erroneous usage of prepositions in English and suggests the need to consider learner background when creating and evaluating written tasks.

## 2. Data Set

### 2.1 Corpus Overview

The data examined in this paper is taken from the "Sunrise Corpus", a learner corpus of English under construction at Tokyo University of Foreign Studies by a team lead by Keiko Mochizuki, with the aid of the International Center for Japanese Studies, Tokyo University of Foreign Studies (henceforth TUFs) and a Type B Research Grant (KAKEN Research Project Number: 25284101) from the Japan Society for the Promotion of Science: "Construction of a Japanese-English-Chinese Online Error Corpus and development of English, Japanese and Chinese language pedagogy taking into account learners' native languages (2013-2015)"

The "Sunrise Corpus" is comprised of pieces of academic writing and translation tasks by English learners from five institutions: National Taiwan Normal University (henceforth, NTNU), Shanghai International Studies University (henceforth, SISU), Fu Jen Catholic University (henceforth, FJU), University of Taipei (henceforth, UT) and Tokyo University of Foreign Studies (henceforth, TUFs). While the TUFs data comprises tasks by native speakers of Japanese, the learners at the other four institutions are native speakers of Chinese.

Learners' compositions are corrected for grammatical and stylistic errors by native English speakers in the "Sunrise Corpus" team. Corrections aim to preserve to as great an extent as possible the structures used by learners. Following correction, errors are tagged using the UAM software tool and the texts are then converted into XML format and uploaded to an online search engine. As of December 2015, a portion of the corpus data is available from the Online Dictionary of Misused English Based on a Learners' Corpus<sup>1</sup>. Furthermore, TUFs and SISU data is accessible from the Learners' Error Corpora of English Searching Platform<sup>2</sup>. A summary of the "Sunrise Corpus" is presented in table 1.

Table 1: Summary of the “Sunrise Corpus” (as of November 2015)

Institution	Total number of files	Total number of words
FJU	6	2,614
NTNU	60	28,590
SISU	62	17,919
UT	20	8,422
TUFS	493	221,917
Total	641	279,462

## 2.2 Translation Task

This paper examines a subset of the “Sunrise Corpus”. The focus is on a single translation task assigned to English majors at TUFS and SISU. A translation task was selected so as to control learners’ output as far as possible and thus render more discernable native language influence. The original text, written in Japanese by one of the authors, was first translated into Chinese and English by native speakers of each language, who aimed at a natural rendering of the source text to offer a comparison to both the original Japanese text and to the English translations produced by learners. In this paper we refer to the original Japanese text and these initial translations into Chinese and English as “original texts”. All three original texts are included in the appendix.

The title of the original text was “Traditions of Hospitality in China, Britain and Taiwan” (*Japanese title: “Omotenashi no Bunka: Chugoku, Ijirisu soshite Taiwan”*). The theme of the text was chosen so as to present relatively few vocabulary-related difficulties to learners; where appropriate, a gloss was provided for culturally specific terms. A summary of the data appears in table 2.

Table 2: Translation Task Data Set

Institution	Files	Total Words
SISU	62	17,919
TUFS	41	13,119

## 2.3 Learners’ English Proficiency

The TUFS students had a mean length of English study of 8.5 years and a mean TOEIC score of 745. The mean length of English study of the SISU learners was 12 years, but unfortunately, we did not have access to comprehensive measures of their English proficiency. 30 of the 62 learners held the CET6 qualification with a mean score of 598. Furthermore, 15 learners held the CET4 qualification with a mean score of 580. Considering the learner data available, we provisionally concluded that both groups of learners possessed roughly equal levels of proficiency, that is to say approaching CEFR B2 level, and so were sufficiently close to merit comparison. Reference was made to a conversion table produced by Ishikawa (2012), a summary of which is reproduced below.

Table 3: English Proficiency Test Conversion Table (based on Ishikawa, 2012)

CEFR	TOEIC	CEM, TEM
A2	225	*
B1.1	550	CET4
B1.2	650	*
B2.1	785	TEM4/CET6
B2.2	860	*
C1	935	TEM8

### 3. Error Overview

#### 3.1 Error Summary and Typology

Prepositions proved to be a major source of difficulty for both groups of learners. Errors involving the prepositions *at*, *in* and *of* appeared with particular prevalence. A numerical summary of these errors is presented in table 4.

Table 4: Summary of Prepositional Errors Across All Learners

Preposition	Instances of overuse	Instances of underuse	Total frequency of errors
At	66	155	221
In	189	92	281
Of	95	61	156
at/in/of (total)	350	308	658
All prepositions	555	562	1117
Proportion of at/in/of to total errors(% , ldp)	63.1	54.8	58.9

The error frequencies in table 4 seem to suggest that the prepositions *at*, *in* and *of* cause particular problems for learners. Indeed, these three prepositions together account for almost 60% of all preposition errors observed in the translation tasks. Columns 2 and 3 of table 4 show “overuse” and “underuse”, which are defined below.

Overuse describes instances where the preposition used is deemed unnecessary. (1) includes overuse of the preposition *in* (a strikethrough represents an error, an underline a correction, so in (1), *in* has been corrected to *of*).

(1) I would like to talk about my memory ~~in~~ of Shanghai first. (TUFS)

(1) also shows an instance of underuse, by which is meant the absence of a preposition where one is deemed to be required, in this case, the preposition *of*. In other words, a single error may be classified as both an instance of overuse and an instance of underuse. (2) contains overuse of the preposition *of*, but as there was no preposition in the relevant position in the original sentence, (2) is not deemed to be an instance of underuse. The qualitative difference between overuse and underuse will become clear in the following section.

(2) After I sat tight, teacher would put a handful of Longjing tea into a traditional Chinese teacup ~~of traditional Chinese~~ ~~flavor~~ with a top. (SISU)

Furthermore the term “error pair” is used to refer to a given preposition in a learner’s translation and its correction. For instance, we describe the error(s) in (1) and (2) as *in/of* and *o/of* error pairs respectively (the *o* symbol is used to represent the absence of any preposition).

#### 3.2 Statistical Testing

The error frequencies in table 4 provide only the broadest overview of the nature of learners’ errors. Furthermore, they do not distinguish between the two groups of learners. Thus, statistical testing was conducted to determine whether there were significant differences in the adjusted frequencies (per 10,000 words) observed in the two groups relating to the prepositions *at*, *in* and *of*.

Chi<sup>2</sup> tests were conducted on total frequency of errors, frequency of overuse errors and frequency of underuse errors. A summary appears in table 5 below. Statistically significant rows are shaded in grey; the final column lists the data sets displaying a higher frequency of each error.

Table 5: Chi<sup>2</sup> Test Results

Error Type	Preposition	Chi <sup>2</sup> value (DF:1)	P value	Higher frequency data set
Total Errors	At	16.71	0.0000	SISU
	In	19.79	0.3156	
	Of	14.66	0.0001	TUFS
Overuse	At	5.74	0.0166	TUFS
	In	20.14	0.0000	SISU
	Of	11.56	0.0007	TUFS
Underuse	At	42.30	0.0000	SISU
	In	21.03	0.0000	TUFS
	Of	3.08	0.0791	

Table 5 makes apparent the following phenomena. First, there are significant differences in error frequency in almost categories, and a particularly striking difference concerning errors involving the preposition *at*.

Second, there is a significant difference in both underuse and overuse of the preposition *in*, yet no significant difference for total error frequency of *in*. We can speculate that this is due to qualitative differences in the types of errors being made. In other words, the SISU data displays overuse of *in* whereas the TUFS data displays underuse of *in*; these qualitatively different error types cancel each other out when examining total quantitative error frequency.

Third, there is a significant difference in total error frequency and overuse of the preposition *of*, but not for underuse, with higher error frequencies observed in the TUFS data in both cases.

Finally, the TUFS data contains overuse of *at* and underuse of *in*, whereas the SISU data exhibits the opposite trend, with underuse of *at* and overuse of *in*.

The next stage of analysis focused mainly on the preposition *in*. First considering instances of overuse, we conducted a log test to ascertain whether there were significant differences in the frequency of error pairs. The pair *in/at* appeared with a high frequency in the SISU data ( $p < 0.0001$ ) and the pair *in/of* appeared with a high frequency in the TUFS data ( $p < 0.01$ ). Underuse of *in* displayed a similar trend, with a high frequency of *at/in* pairs in the SISU data ( $p < 0.0001$ ) and a high frequency of *of/in* pairs in the TUFS data ( $p < 0.01$ ), corroborating the fourth phenomenon observed above. A summary of the log test results is presented in table 6 below.

Table 6: Error Pair Log Scores

Error Pair	Higher frequency data set	Log score	Significance Level
<i>in/at</i>	SISU	32.65	$p < 0.0001$
<i>in/of</i>	TUFS	10.73	$p < 0.01$
<i>at/in</i>	SISU	37.60	$p < 0.0001$
<i>at/of</i>	TUFS	8.02	$p < 0.01$
<i>of/at</i>	SISU	5.80	$p < 0.05$
<i>of/in</i>	TUFS	10.91	$p < 0.001$

The results of the statistical testing presented in this section suggest not only that *at*, *in* and *of* present difficulties for learners but also that they present different difficulties to different sets of learners and that their overuse and underuse are not independent phenomena but are closely linked. Below, we conduct sentence level analysis of the actual errors observed in the learners' translations.

#### 4. Analysis

Having established the differing nature of preposition misuse by the two sets of learners, we now attempt an

analysis of the actual errors observed. With the Chinese, English and Japanese original versions as a guide, there appears to be evidence of native language interference in learners' approaches to the translation tasks. This will become clear through sentence level comparison of the errors made by each group of learners. While numerous phenomena can be remarked on from the results in table 5 and table 6, the current paper will largely limit discussion to the *in/of*, *of/in* and *in/at* error pairs, which seem worthy of particular attention.

#### 4.1 *In* and *of* errors

The table below summarizes the actual errors made by learners and their frequencies. The phrases in the second column are representative of errors produced by learners at each point in the text. The preceding numbers refer to the numbers of the equivalent sentences in the original English text.

Table 7: Observed Errors Involving *In* and *Of*

Error Pair	Error	SISU frequency	TUFS frequency	Total frequency
In/of	② *"memory in"	2	8	10
	⑤ *"professor in Chinese"	1	1	2
	⑩ *"savor filled in the Babao rice"	1	0	1
Of/in	⑥ *"bedroom of dormitory"	1	7	8
	⑪ *"menu of the Chinese restaurant"	1	0	1
	④ *"degree of Chinese"	0	12	12
	⑮ *"life of those days"	0	1	1
	① *"time of life"	0	1	1
Total frequency		6	30	36

The final row of table 7 shows that the TUFS data contains more errors of this type than the SISU data. The final column shows that this difference is not spread uniformly but is largely concentrated in three particular phrases: "memory in", "bedroom of the dormitory" and "degree of Chinese". One further point to note is that there are only two phrases in which error frequency is higher in the SISU data than in the TUFS data, although the difference in frequency is just 1 in each.

Table 8 below extracts the five phrases referred to above and displays them alongside the Chinese and Japanese original texts. We do not assume or claim that the original texts are the only natural phrasings of the content of the text in Chinese and Japanese respectively. Nonetheless, they do provide a reference when considering errors made by native speakers of those languages. Indeed, there are notable parallels between these original texts and the strategies taken by learners in their translations. Underlined Japanese and Chinese text in table 8 indicates the section of each sentence equivalent to the preposition error.

Table 8: Selected Observed Errors alongside Japanese and Chinese Original Texts

Error Type	Error	Japanese original text	Chinese original text
In/of	② **“memory in”	まず、最初に、上海留学中の思い出についてお話しします。	首先，就让我谈谈在上海留学时的一段回忆。
	⑩ **“savor filled in the Babao rice”	蒸したての八宝飯の「やさしく、柔らかく、幸福な甘さ」は、忘れることができません。	刚蒸好的八宝饭所带有的那种“软软、热热、甜甜”的幸福滋味，到现在仍然记忆犹新。
Of/in	⑥ **“bedroom of dormitory”	その頃は、復旦大学の先生方には、研究室がなく、論文指導は、大学に隣接する宿舎に住んでいらっしゃるご自宅の書斎兼寝室で行われました。	当时复旦大学的老师们并没有个人的研究室，每次的论文指导课都是在紧邻大学的老师宿舍里的书房兼寝室里进行的。
	⑪ **“menu of the Chinese restaurant”	その後、中国料理店で、八宝飯をみつけると、必ず注文し、胡先生のおもてなしを思い出すのです。	从那以后，每当在中国餐馆里看到八宝饭，我一定会点来品尝，不为别的，就只为想再回味一次胡老师和他家人的待客之道。
	④ **“degree of Chinese”	東京外国語大学で中国語学の修士号を得た私は、中国政府公費留学生として、1986年から1988年にかけて、復旦大学(Fudan University)に留学しました。	从1986年到1988年，在修完东京外国语大学的硕士课程之后，我以中国政府公费留学生的身份到上海复旦大学留学了两年，

First, we consider the second most frequent error for the in/of error pair, particularly prevalent in the TUFSS data, \*\*“memory in”. Explanation is required for why TUFSS students seemingly had more difficulty than SISU students in translating this sentence. The equivalent sentences from the Chinese and Japanese original texts are reproduced below.

(3) a. 在 上海 留学 时 的 一段回忆  
*Zai Shanghai liuxue shi de yiduan huiyui*  
 TEMPORAL Shanghai study abroad time POSSESSIVE memory  
 “Memories of my time studying abroad in Shanghai”

b. 上海 留学 中 の 思い出  
*Shanghai ryugaku chu no omoide*  
 Shanghai study abroad DURATION POSSESSIVE memory  
 “Memories of my time studying abroad in Shanghai”  
 (My memories of studying abroad in Shanghai)

First, note that both the Japanese character 中 *naka/-chu/-ju* and the English preposition *in* can express both spatial and temporal meanings, and that for this reason, Japanese learners may associate the two forms. Second, there is no explicit spatial marking in the Japanese sentence, as “study abroad in Shanghai” is expressed by a compound noun, 上海留学 *Shanghai-ryugaku*. Japanese native speakers seem to be conflating the temporal marking of i. (the period of) “study abroad”; ii. the (implicit) spatial marking of “Shanghai”; and iii. the possessive marking of “memory”, which are located adjacent to each other in (3b). \*\*“memories in Shanghai” is the product of the erroneous use of *in* to encompass all these meanings.

(3a) differs in structure to (3b), in that the temporal and attributive markers are at far ends of the sentence and are each marked separately and explicitly. Furthermore, these three markers can be said to be closer in structure and distribution to those in the English sentence, namely “in”, “time” and “of”.

It should be emphasized that this use of *in* by Japanese native speakers runs contrary to their overall tendency to overuse *of*. In errors in other parts of the text, the presence of *の no* in the Japanese original appears to be closely related to the use of *of*. Indeed, there is not a single *of/in* or *in/of* error pair in the TUFs data in which *の no* does not appear in the original Japanese text. That such a relationship is not apparent in this sentence suggests that the reason for the overuse of *in* has its roots in the syntactical features of the Japanese sentence and the relative similarity in the syntax of the Chinese and English sentences.

The possible effect of compound nouns was noted above, but compound nouns also appear in another *in/of* error pair in “\*professor in Chinese”. In (4) below, both the Chinese and the Japanese original texts express the phrase using a compound noun.

- (4) a. professor {of/\*in} Chinese  
 b. 汉语语言学家  
 Hanyu-yuyan-xuejia  
 c. 中国語 {の / ø} 学者  
 Chugokugo-gakusha

In this instance, there is only one error in each data set. The use of a compound noun circumvents use of a preposition, which thus precludes errors involving *in*. The point here is that where forms in Chinese and Japanese resemble one another, the frequency of errors is also similar. (4c) may be expressed naturally with the addition of *の no*. Nonetheless, the non-use of *の no* seems to have precluded the negative transfer observed in learners’ translations. The Chinese text too avoids use of 的 *de*, through the use of a compound noun.

While some readers may consider “\*professor in Chinese” in (4a) to be acceptable English usage, we reject this on the basis of native intuition and on evidence from the Corpus of Contemporary American English (henceforth, COCA). Collocations of “professor of” and “professor in” occur with frequencies of 13,689 and 1,345 respectively. Furthermore, close examination reveals that a large majority of hits for the latter are not comparable to the sentence in question.

The third most prevalent error in the two data sets, namely “\*bedroom of dormitory”, appears to relate to the difference in usage of post-positions in Chinese and particles in Japanese, as was the case in the “\*memory in” error.

- (5) a. ご自宅の書斎兼寝室で  
 gojitaku no shosai-ken-shinshitsu de  
 b. 在…宿舍里的书房兼寝室 { \*里 }  
 zai…sushe li de shufang jian qinshi { \*li }  
 c. { in/\*at } their private bedroom-cum-study

The Chinese (5b) and English (5c) sentences are similar in that they both require an explicit internal spatial marker, 里 *li* and *in* respectively. By contrast, the spatial meaning in (5a) is provided exclusively by the lexical meaning of 書斎兼寝室 *shosai-ken-shinshitsu* “bedroom-cum-study” and the particle で *de*. Importantly, で *de* does not itself imply internal or any other specific type of space; it does no more than mark an optional locative argument in the sentence, in contrast to に *ni*, which marks an obligatory argument (Mochizuki and Kano 2012 p.235). Nevertheless, に *ni* does not specify the properties of a spatial complement it marks (for present purposes, we exclude other uses of

に *ni*). This ambiguity is not possible in Chinese and English. Omission of 里 *li*, or deletion of *in* (or its replacement with another preposition) is not permissible. According to Po-Ching and Rimmington (2004 p171) “在 *zai* is the most versatile of coverbs, in the way it governs its locational objects. Most commonly the object requires a postposition which indicates its position precisely”. This is illustrated in (6) and (7) below: the usage of roughly corresponding pre- and post-positions in Chinese and English is not matched by a comparable usage of particles in Japanese. Thus the actual errors discussed above would seem to reflect fundamental differences in the spatial marking between the languages.

(6) a. Meet {at the station/in the station building/on the platform}

b. { 駅で / 駅構内で / ホームで } 待ち合わせをする

{Eki de/Eki-konai de/homu de} machiawase wo suru

c. { 在车站 / 在车站里(面) / 在站台上 } 集合

{Zai che zhan/zai che zhan li (mian)/zai zhan tai shang} jihe

(7) a. At the TUFUS monument/ In the classroom/On the roof

b. TUFUS モニュメント前にいる / 教室にいる / 屋上にいる

TUFUS monyu ni iru/kyoshitsu ni iru/okujo ni iru

c. 在 TUFUS 雕刻前 / 在教室里 / 在屋顶上

Zai TUFUS diaoke qian/Zai jiaoshi li/Zai wuding shang

The sentences above illustrate the fact that に *ni* and で *de* are not directly related to the spatial perception of the corresponding nouns, as is the case in Chinese and English.

The final error clearly dividing the two data sets, and the single biggest source of errors in the whole text, appears in the phrase “degree of Chinese”. An oversight in the translation of the original Japanese text into Chinese resulted in the phrase not being included in the Chinese original (this is reflected in table 8 by the absence of any underlined text in the column for the Chinese original text). While this makes direct comparison of the SISU and TUFUS data problematic, conclusions can nonetheless be drawn from the high frequency of errors made by the Japanese native speakers.

(8) a. degree in Chinese

b. 中国語学 の 修士号

Chugokugo no shushigo

As is evident in (8), English and Japanese differ in the ways they express this phrase. The use of *in* in (8a) cannot be immediately visualized in purely spatial terms and can instead be characterized as stative (Evans 2010 p239). Japanese learners may have attempted a word for word translation, producing the incorrect “degree of Chinese”. A full discussion of the relation between the usage of の *no* and the usage of *of* is beyond the scope of this paper, but の *no* is generally recognized to have a wider usage than *of*, which contributes to the frequent overuse of *of* by Japanese learners of English. Similar examples of errors made by native speakers of Japanese that appear to be the product of word for word translations are prevalent in the Sunrise Corpus. Examples appear in (9) below.

(9) a. Performers and visitors of this party are all students in my high school and performers dance or sing.

(このパーティーの参加) (*of/at* error pair)

b. The same things are true to the system of Japan.

- (日本の制度) (of/in error pair)
- c. Though the food prices are higher in urban areas, wages of part time job is good.  
(アルバイトの時給) (of/for error pair)
- d. There was the forest of mangrove.  
(マングローブの森) (of /compound noun error pair)

It could be hypothesized that even had the Chinese original text faithfully included the phrase in (10), the SISU data would have contained fewer *of/∅* error pairs than the TUFSS data. This is because unlike *の no* in (8b), *的 de* in (10) is not obligatory, its inclusion subject to context.

- (10) 中国语言学硕 | 的 /∅| 士学位  
Zhongguo yanyu xue |de/ ∅ |xue  
“degree in Chinese”

Finally, we turn to the two errors made by Chinese native speakers but not by Japanese native speakers, namely \*‘‘savor filled in the Babao rice’’ (11) and \*‘‘menu of the Chinese restaurant’’ (12).

- (11) a. 蒸したての八宝飯の「やさしく、柔らかく、幸福な甘さ」  
b. 刚蒸好的八宝饭所带有那种“软软、热热、甜甜”的幸福滋味  
c. the ‘gentle, delicate, blissful sweetness’ of that freshly steamed *babaofan*

Japanese native speakers have a tendency to translate the *の no* in (11a) directly as *of*, but in this instance this matches the natural English usage in (11c). That is, the ‘gentle, delicate, blissful sweetness’ is perceived as a property possessed by the *babaofan* desert, rather than something physically contained within it. In contrast, the Chinese original in (11b) uses the verb 带 *dai*, which encompasses the meanings ‘to wear’, ‘to carry’ or ‘to have’. In other words, it provides a more physical representation of property. This may explain the one error by a Chinese native speaker who selected the English preposition *in* to express this relation. Note again that no Japanese native speaker made the same mistake.

The second error appearing only in the SISU data (made by a single learner) is presented below in (12), together with the original texts.

- (12) a. Thereafter, whenever I go to a Chinese restaurant and find *babaofan* on the menu, I always make a point of ordering it, and recall the kind hospitality which Professor Hu extended to me.  
b. その後、中国料理店で、八宝飯をみつけると、必ず注文し、胡先生のおもてなしを思い出すのです。  
c. 从那以后，每当在中国餐馆里看到八宝饭，我一定会点来品尝，不为别的，就只为想再回味一次胡老师和他家人的待客之道。  
d. \*Since then, every time I saw Babao rice in the menu of Chinese restaurants, I must order it and enjoy them.  
(SISU)

(12d) is a significant rephrasing of the original Chinese and so is difficult to analyze. Nevertheless, the use of *in* appears to reflect the use of 里 in the original Chinese. As noted above, *で de* in Japanese does not necessitate the nature of locational complement (in this case, internal), allowing a sentence such as (14).

- (14) 中国料理店で八宝飯をみつけると、必ず店に入って注文し、胡先生のおもてなしを思い出すのです。

“Whenever I see babaofan on the menu in the window of a Chinese restaurant, I go in and order it to recall the kind hospitality which Professor Hu extended to me”

To summarize this section, the nature and frequency of errors involving *in* and *of* made by the two groups of learners points to the potential effect of their respective native languages. In the context of the current study, the relative similarity of spatial markers between Chinese and English appears to have facilitated SISU students’ translations, whereas the lack of precise spatial markers and the wide-ranging function of the particle *de* appear to have presented challenges to the TUFs students. In the following section we turn our attention to errors involving *in* and *at*, categorizing errors into conceptual categories and revealing a clear dichotomy of misuse.

#### 4.2 *In* and *at* errors

Table 6 shows that native speakers of Chinese made more errors in both the *at/in* and the *in/at* pairs, though this observation alone does not present the full picture of error trends. While clear qualitative differences in *in/at* error pairs are not apparent between the two data sets, analysis of *at/in* errors pairs reveals a clear trend in error patterns, presented in table 9.

Table 9: Observed *At/in* error pairs with Frequencies

Error	SISU Frequency	TUFs Frequency	Total Frequency	Conceptual Category
⑦ * “There were no telephones at my teachers’ houses”	2	3	5	Spatial
⑦ * “telephones were not popular at that period”	1	0	1	Temporal
① * “studying at Shanghai”	1	4	5	Spatial
⑥ * “every thesis guiding course was conducted at the study”	3	14	17	Spatial
⑨ * “I visited my teacher at his home”	2	0	2	Spatial
⑨ * “At the meanwhile”	1	0	1	Temporal
⑮ * “the hospitality I felt at Professor Hu’s home”	1	0	1	Spatial
① * “I have studied at Beijing, Shanghai, London, and Taiwan”	1	2	3	Spatial
① * “When I was at my twenties and thirties”	9	0	9	Temporal
Total	21	23	44	

Table 9 reveals a clear dichotomy between temporal and spatial errors, which is summarized in table 10 below. The total frequency of errors made by each group of learners is almost identical, yet errors in each conceptual category are concentrated in one or other of the data sets. This is particularly striking in the case of temporal errors, which appear exclusively in the SISU data. Overall, the SISU data and TUFs data show a statistically significant propensity towards temporal and spatial errors respectively.

Table 10: Conceptual categorization of *at/in* error pairs

	SISU	TUFs
<b>Spatial Errors</b>	9*	23
<b>Temporal Errors</b>	12 †	0
<b>Total Errors</b>	21	23

\*LL 5.13,  $p < 0.05$

† LL 17.75,  $p < 0.0001$

Extending analysis from *at/in* error pairs to all instances of the overuse of *at* reveals a similar trend. In other words, the native speakers of Chinese tend to overuse *at* in temporal expressions, whereas the native speakers of Japanese tend to overuse *at* in spatial expressions.

Table 11: Conceptual division of errors involving overuse of *at*

	SISU	TUFS
<b>Spatial Errors</b>	12*	34
<b>Temporal Errors</b>	16#	4
<b>Total Errors</b>	28	38

\* LL 5.31,  $p < 0.05$

# LL 11.84,  $p < 0.001$

The majority of the *at/in* temporal errors observed in the SISU data are of the kind seen in (15), where the native speakers of Chinese use the same preposition to mark a period of time (such as “my twenties and thirties”) as to mark a punctual time (such as “at the age of”), leading to overuse of *at* as a temporal marker.

(15) \*I studied in Beijing, Shanghai, London, and Taiwan at my twenties and thirties.

This incorrect English usage appears to be a reflection of temporal marking in Chinese, for the temporal marker 在 *zai* is used to mark time irrespective of its duration, as exemplified by the examples below.

(16) a. 在我二三十岁的时候也曾经到北京、上海、伦敦以及台湾留学过

{In/During/\*At} my twenties and thirties, I studied abroad in Beijing, Shanghai, London and Taiwan.

b. 在我二十岁的时候也曾经到北京留学过

{At/\*In/\*During} the age of twenty I studied abroad in Beijing.

Of course, a particular age such as “twenty” is not truly punctual, having an easily perceivable time span. What is important is that this period of time is treated and expressed as uniform and contiguous. Thus, the English preposition *at* is not limited to expressing only punctual time as in the examples in (17a), which are punctual in the sense that it is not as straightforward to practically or conceptually perceive their duration. *At* is also capable of marking a period of time, provided that said period can reasonably be perceived as a single unit. Consider the examples in (17b), which can refer to a period of several days or more, but one which is commonly and naturally perceived as a single (often, functional) unit.

(17) a. at 5.30, at 2 o'clock

b. at Christmas/New Year/Easter, at lunch time

This use of *at* does not however extend as far as a phrase like “twenties and thirties”, presumably due to objective restraints (the length of time encompassed) as well as subjective restraints (the lack of a unifying property or function to allow its perception as a single unit, as in (18) below, in which *at* marks the underlined defined stage ending in a terminal point).

(18) The urban world in which he lived at the end of his life is represented in crowd scenes, the industrial landscape of chimneys and guns, and mechanical clamps. (COCA)

Further examples of native speakers of Chinese marking a single unit of time with *at* are offered below. “Period” in (19a) and “meanwhile” in (19b) both imply duration and do not appear in collocation with *at* as a punctual temporal marker.

(19) a. \* Since telephones were not popular at that period, most visits haven’t been told in advance.

b. \* At the meanwhile, they gave me, an uninvited guest, a treatment of the new eight-treasure rice pudding.

As with its spatial usage, 在 *zai* does not encode specific temporal information. In contrast to its spatial use however, there is no differentiation through the use of postpositions, at least in the case of (16). This presents native speakers of Chinese with the challenge of selecting the appropriate English preposition for the temporal situation being described. Just as spatial 在 *zai* does not specify spatial structure, nor does it specify temporal structure, with the result that duration does not affect its distribution. Thus, in sentences such as (16a), (19a) and (19b), which do not express punctual time, it cannot serve as direct equivalent to English *at*.

In contrast to Chinese native speakers’ overuse of *at* in this sentence, different errors appeared in the TUFSS data. While no native speaker of Japanese used *at* here, some used *during* instead of *in*, indicating a recognition of duration that is less discernable among the native speakers of Chinese. Word list data reveals that among the TUFSS data *during* ranked 122<sup>nd</sup> with a frequency of 25, whereas it ranked 225<sup>th</sup> with a frequency of 14 in SISU data. This equates to an adjusted frequency of 19.1 for TUFSS and 7.8 for SISU.

(20) \* I have studied at Beijing, Shanghai, London and Taiwan when I am during twenty and thirty years old.

(TUFSS)

The misuse of *during* in (20) shows a clear parallel with the Japanese にかけて *ni kakete*, which is used in (21a) to express a somewhat imprecise time span. In (21b) by contrast, punctual time can be marked by に *ni* but not by にかけて *ni kakete*.

(21) a. 私は、20代から30代 {にかけて/\*に}、北京、上海、ロンドン、台湾に留学したことがあります。

b. 私は、20歳のとき {に/\*にかけて}、北京に留学したことがあります。

Next we briefly examine the underuse of *at* in spatial expressions. Is there a qualitative difference between the TUFSS data and the SISU data? As was seen in table 5, TUFSS students exhibited overuse of *at* overall, but this overuse is largely limited to spatial expressions. This can be seen as a product of the non-obligatory nature of precise spatial marking in Japanese.

(22) \* Students received the individual guidance of essay at professors’ study and bedroom

(23) \* At first, I will talk about the memory during the life studying at Shanghai.

The errors above are not qualitatively different to those spatial errors present in the SISU students’ translations, but their frequency of occurrence is, statistically speaking, significantly higher.

Returning to the trend noted in table 11, we find a parallel between the two data sets. Namely, excluding *at/in* error pairs, the majority of instances of overuse of *at* involve “dynamic” situations. Examples are given below.

(24) \* After I got the master's degree of Chinese linguistics at Tokyo University of Foreign Studies, I went Fudan University for studying from 1986 to 1988 by the support of Chinese government. (*at/from* error pair) (TUFS)

(25) \* Moreover, he removed the cap of a red candy box, which was like a present at a wedding party, and offered me some candies, saying 'How would you like some candies?' and gently smiling. (*at/from* error pair) (TUFS)

(26) \* After I was given the degree of Master at Tokyo International Studies University, I continued my study in Shanghai Fudan University as a Chinese state-financed student from 1986 to 1988, on which my professor was Hu Yushu, a prominent Chinese linguist. (*at/from* error pair) (SISU)

(27) \* Nowadays, whenever I look back those days, I always conjure up visions of all the visits at my teacher's. (*at/to* error pair) (SISU)

In each case, the learner's translation erroneously selected the simple spatial marker *at*, which does not fully express the situations being described. For example, (24) and (26) express a benefactive action as opposed to the mere location of said action: observe the difference with (28). (25) is furthermore temporally distant: unlike (24) and (26), (25) cannot be interpreted as an event prior to the speech time along the lines of (29). Finally, (27) fails to express the inherent motion of the action described ("visit at" occurs with a frequency of 143 in COCA, compared to a frequency of 7113 for "visit to"; moreover, *at* is not used in a spatial sense in the majority of the former).

(28) I was given a free sample of a new energy drink at Tokyo University of Foreign Studies.

(29) # At the wedding party, he removed the cap of a red candy box like a present and offered me some candies.

The common feature of these errors is that the situations described therein are reduced to punctual events, which deprives them of their richness of meaning. The high frequency of errors involving *at*, in and of as seen in table 4 may to some extent be attributed to learners' overreliance on these core prepositions at the expense of others.

## 5. Conclusion

This paper has made apparent various phenomena which point to the effect of native language interference on the translations of learners of English. Where structures in Chinese and Japanese are similar errors frequencies were similar; where the two languages differ, there are significant differences in error frequency, with relative similarity to English structures seemingly contributing to the balance of errors.

What are required going forward are concrete proposals for how to best adapt teaching materials to their particular needs. In other words, it is necessary to make apparent the differences between the language of study and the native language, draw attention to the types of errors these differences cause, and provide effective explanations aimed not at linguistic but at learners.

## References

- Evans, Vyvyan (2010) From the spatial to the non-spatial: the 'state' lexical concepts of *in*, *on* and *at*. In Paul Chilton and Vyvyan Evans (eds.) *Language, Cognition and Space The State of the Art and New Directions*, 215-248. London: Equinox Publishing.
- Evans, Vyvyan and Andrea Tyler (2003) *The Semantics of English Prepositions Spatial Scenes, Embodied Meaning and Cognition*. Cambridge University Press: Cambridge.

Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge University Press: Cambridge.

Mochizuki, Keiko and Laurence Newbery-Payton (2015) *Comparative Studies on Spatial Representation in English and Japanese Based on the Advanced Learners' Corpus of English*. Presented at JACET Kanto 9<sup>th</sup> Annual Convention.

Rimmington, Don and Po-Ching Yip (2004) *Chinese A Comprehensive Grammar*. London: Routledge.

石川慎一郎・前田忠彦・山崎誠編『言語研究のための統計入門』附属ディスク.2010. くろしお出版

長野格・秋山武清・豊田暁(2004)「所属・所在を表す前置詞 OF、AT、IN について」『日本実用英語学会論叢』11:69-78

望月圭子・キャロライン狩野(2005)「英語・日本語における空間・時間に関わる格標識：日本語母語話者による英作文学習者コーパスにみられる誤用類型」『東京外国語大学論集』85:219-236

## Online Resources

1. Corpus of Contemporary American English

<http://corpus.byu.edu/coca/>

(Accessed 13/12/2015)

2. Lancaster University Log Likelihood Calculator

<http://ucrell.lancs.ac.uk/llwizard.html>

(Accessed 13/12/2015)

3. Learners' Error Corpora of English Searching Platform

[http://ngc2068.tufs.ac.jp/corpus\\_eng/indexFlyv6.php](http://ngc2068.tufs.ac.jp/corpus_eng/indexFlyv6.php)

(Accessed 13/12/2015)

4. Online Dictionary of Misused English – Based on a Learners' Corpus

[http://sano.tufs.ac.jp/lcshare/htdocs/?action=pages\\_view\\_main&page\\_id=49](http://sano.tufs.ac.jp/lcshare/htdocs/?action=pages_view_main&page_id=49)

(Accessed 13/12/2015)

5. 石川慎一郎研究室ホームページ

[http://language.sakura.ne.jp/s/kaken\\_icnale.html](http://language.sakura.ne.jp/s/kaken_icnale.html)

(Accessed 13/12/2015)

## Appendix

[A] Original Japanese Text ( Keiko MOCHIZUKI)

私は、20代から30代にかけて、北京、上海、ロンドン、台湾に留学したことがあります。留学時代の思い出として、今、懐かしく思い出すのは、先生方のお宅に招かれ、おもてなしを受けた思い出です。

まず、最初に、上海留学中の思い出についてお話します。

東京外国語大学で中国語学の修士号を得た私は、中国政府公費留学生として、1986年から1988年にかけて、復旦大学(Fudan University)に留学しました。指導教授は、著名な中国語学者であった胡裕樹教授(Prof. HuYushu)でした。その頃は、復旦大学の先生方には、研究室がなく、論文指導は、大学に隣接する宿舎に住んでいらっしゃるご自宅の書斎兼寝室で行われました。先生方のご自宅には電話もなく、突然訪ねていくことが多かったのですが、突然お伺いしても、必ずドアを開けてくださった、そんな牧歌的時代でした。

ある日、予約なしに胡先生のおうちを訪ねた私に、ご一家は、「ちょうど八宝飯(Babaofan; もち米で作った8つのドライフルーツが飾られたデコレーションケーキ)が蒸しあがったから、食べなさい」と、ふるまってくくださったのです。蒸したての八宝飯の「やさしく、柔らかく、幸福な甘さ」は、忘れることができません。その後、中国料理店で、八宝飯をみつけると、必ず注文し、胡先生のおもてなしを思い出すのです。

論文の個人指導は、蒲団がロールケーキのように巻かれ、整えられて長椅子と化した胡先生のベッドに座って行わ

れました。私がベッドに座ると、胡先生はまず、龍井茶（LongJing Green Tea）を蓋付きの中国式マグカップにひとつまみ入れて、魔法瓶からお湯をいれ、お茶を淹れてくださいました。そして、結婚式の引き出物のような、赤いキャンディーボックスの蓋をとって、「キャンディーをどうぞ」と優しく微笑みながらすすめてくださったのでした。とても質素な時代でしたが、胡先生ご一家のおもてなしは、いまでも宝物のような思い出として、胸に刻まれています。

[B] Original Chinese Text( Keiko Mochizuki, translated by Shen YaMing)

在我二三十岁的时候也曾经到北京、上海、伦敦以及台湾留学过。如今每当我回想起当时的留学生活时，总是会想起每回到老师家里做客时的情景。首先，就让我谈谈在上海留学时的一段回忆。

从1986年到1988年，在修完东京外国语大学的硕士课程之后，我以中国政府公费留学生的身份到上海复旦大学留学了两年，我的指导教授是著名的汉语语言学家胡裕树教授。当时复旦大学的老师们并没有个人的研究室，每次的论文指导课都是在紧邻大学的老师宿舍里的书房兼寝室里进行的。也由于当时老师宿舍里还没有安装电话，所以常常都是无事先告知的突然造访，但是尽管如此，老师及其家人每次也都一定欣然开门迎客，我也从未尝过闭门之羹。那是一个如此纯朴的时代！

有一天，又是一个突然的造访。胡老师一家人对突然出现的我说道：“正好有蒸好的八宝饭，吃了再走吧！”，一边拿出八宝饭招待我这个不速之客。刚蒸好的八宝饭所带有的那种“软软、热热、甜甜”的幸福滋味，到现在仍然记忆犹新。从那以后，每当在中国餐馆里看到八宝饭，我一定会点来品尝，不为别的，就只为想再回味一次胡老师和他家人的待客之道。

每次上课时，老师都会将棉被卷成像西式卷心蛋糕似的长条状，然后将床铺整理得如同一条长凳子，要我坐在上面上课。我一坐定后，老师会先在一个传统中国式的、带盖子的茶杯里放入一小撮的龙井茶叶，然后从热水瓶里倒出热开水，为我沏上一杯热茶。之后，再拿出一个好象装喜糖用的大红色的糖果盒，打开盒子，亲切地微笑着要我吃糖。虽然是一个物资不是很丰裕的时代，但是胡老师以及他家人对我的热情款待的回忆，始终就像一个宝藏一样，永远地深深地埋藏在我的心中。

[C] Original English Text( Keiko Mochizuki, translated by Caroline Kano)

① When I was in my twenties and early thirties, I myself had the opportunity of studying in Beijing, Shanghai, London and Taiwan. ② Of all my memories of studying abroad, what I still now remember most fondly, are the occasions when I was invited to the homes of my professors, and the warm hospitality I received. ③ In this connection, I would first like to talk about my memories of studying in Shanghai.

④ After receiving my M.A. in Chinese from Tokyo University of Foreign Studies, I went as a Chinese government-sponsored exchange student to Fudan University, where I studied from 1986 to 1988. ⑤ My academic supervisor was the eminent Sinologist, Professor Hu Yushu. ⑥ In those days, professors at Fudan University did not have their own room, and supervision of students' theses would be conducted in their private bedroom-cum-study in the university lodgings adjoining the university building, where they lived. ⑦ As the professors' lodgings were not equipped with a telephone, students would often call on them unexpectedly. ⑧ But however sudden a student's visit might be, in those idyllic times, their professor would always invite them in.

⑨ One day, when I arrived at Professor Hu's home without an appointment, he and his family welcomed me with a "We've just steamed a *babaofan* (a cake made with glutinous rice, decorated with eight kinds of dried fruit), so do have some!" ⑩ I will never forget the 'gentle, delicate, blissful sweetness' of that freshly steamed *babaofan*.

⑪ Thereafter, whenever I go to a Chinese restaurant and find *babaofan* on the menu, I always make a point of ordering it, and recall the kind hospitality which Professor Hu extended to me.

⑫ An individual guidance session on a student's thesis would be conducted seated on Professor Hu's bed, which, with the bed cover rolled up like a Swiss roll, was turned into a sofa. ⑬ As soon as I had sat down on Professor Hu's bed, Professor Hu would place a few leaves of Longjing green tea in a Chinese-style mug with a lid, add some

hot water from a thermos, and serve it to me. ⑭ He would then take the lid off a red sweet box which looked as though it might have been a gift he had received as a guest at a wedding, and, smiling kindly, and with a “Do have a sweet!”, offer me one. ⑮ They were very modest times, but the warm hospitality which I received from Professor Hu and his family still remains like a treasure engraved in my memory.

## 注

- i This paper is based on a presentation entitled “Comparative Studies on Spatial Representation in English and Japanese Based on the Advanced Learners’ Corpus of English” given by the authors at the JACET Kanto 9<sup>th</sup> Annual Convention, held at Aoyama Gakuin Research Center for English Language Teaching on Sunday, July 12<sup>th</sup> 2015.
- 1 Accessible at [http://sano.tufs.ac.jp/lcshare/htdocs/?action=pages\\_view\\_main&page\\_id=49](http://sano.tufs.ac.jp/lcshare/htdocs/?action=pages_view_main&page_id=49)
- 2 Accessible at [http://ngc2068.tufs.ac.jp/corpus\\_eng/indexFlyv6.php](http://ngc2068.tufs.ac.jp/corpus_eng/indexFlyv6.php)

# 「東京外国語大学英語上級学習者コーパス」における前置詞の誤用類型：

—日本語母語話者・中国語母語話者英作文の対照—

望月圭子（東京外国語大学）

ローレンス・ニューベリーペイトン（東京外国語大学博士前期課程）

キーワード：英語学習者誤用コーパス、日本語・英語・中国語の対照、前置詞、空間表現、母語干渉

本稿では、東京外国語大学国際日本研究センターで製作した『オンライン英作文学習者コーパス・誤用辞典』(Online Dictionary of Misused English- Based on a Learners' Corpus) 及び TUFSS Sunrise Learners' Corpora of English をもとに、前置詞“of/in”間、“in/at”間の誤用に焦点をあて、日本語のどのような特性が英語前置詞の誤用に影響するのかについて論じる。

『オンライン英作文学習者コーパス・誤用辞典』は、東京外国語大学英語専攻1年生の必修授業 Academic Writing で執筆された英作文に、英語母語話者が添削し、誤用タグを付けた、前置詞・冠詞の誤用が検索できるオンライン誤用辞典である。さらに、TUFSS Sunrise Learners' Corpora of English では、交流協定大学である台湾師範大学・上海外国語大学との協働で、東京外国語大学英語専攻の学生と同様、上級レベルと想定される中国語母語英語学習者データの提供をうけ、日本語母語英語学習者と中国語母語英語学習者の作文を比較することが可能である。また、前置詞・冠詞の誤用以外にも、全ての添削に誤用タグをつけ、全ての誤用が検索可能になっている。

TUFSS Sunrise Learners' Corpora of English は、筆者が執筆した「上海留学時代の思い出」という日本語のエッセイを、東京外国語大学国際日本研究センター特任研究員キャロライン狩野教授及び申重敏がそれぞれ英語及び中国語へと翻訳し、日本語母語話者には、日本語から英語へ、中国語母語話者には中国語訳から英語へ、という英訳タスクを与えた翻訳英作文を含む。この翻訳英作文学習者コーパスでは、上級レベルの日本語母語英語学習者41作文と中国語母語英語学習者62作文を対象に、語彙使用がコントロールされた状況下で、どのような空間表現の誤用がみられるかを対照することが可能である。

前置詞の誤用に関する日本語母語英語学習者の特徴は、日本語の「～の」の影響で、in を使うべきところに of を使う of/in 誤用が、中国語母語英語学習者よりも卓越している点である。一方、中国語母語英語学習者の誤用特徴は、of/in の誤用よりも、at/in 間の誤用タイプが多く、特に時間表現に関わる at の過剰使用がみられる点である。一方、日本語母語英語学習者は、at/in 間の誤用は、空間表現における in の過剰使用がみられるという中日語間の相違点が観察される。

こうした前置詞に関わる誤用類型が、学習者の母語によって異なる現象をみせる要因として、日本語における「～の」連体修飾表現の卓越性が of の過剰使用をひきおこし、さらに日本語における空間表現の曖昧性（-中、-内、奥等）が、in の過剰使用をひきおこすことが想定される。一方、中国語においては、連体修飾表現は日本語ほど卓越しておらず、また空間認知表現も日本語に比べると多様である。こうした中日語の特性が、英語の前置詞における誤用類型の相違を生み出していることが想定され、母語に基づく英語文法教育の必要性が示唆される。



## 英語・中国語からみた日本語の無界性：複合動詞と空間認知

望月圭子（東京外国語大学）・申亜敏（早稲田大学）

キーワード：複合動詞、空間表現の語彙、英語・中国語対照、非個体化性、無界性、学習者誤用コーパス

### 1. はじめに

本論では、複合動詞・空間表現の語彙に焦点をあて、英語・中国語との対照を通し、統語構造と複合動詞形成の相関性、事象構造、語彙的アスペクト、認知意味論、第二言語習得の視点から、日本語の語彙の特性を論じる。

2節では、日本語の「動詞+動詞」型複合動詞を、同様に「動詞+動詞/形容詞」型複合動詞の体系が非常に豊富な中国語と比較する。日本語と中国語の複合動詞においては、「統語構造が複合動詞の語構造に反映される」という普遍性がみられる。その一方、句構造の主要部が右にある日本語では「目的語節+動詞」補文型複合動詞が卓越しているのに対し、動詞句の主要部が右にある中国語では、「動詞+結果述語」構造があり、結果複合動詞が卓越しているという相違がある。

さらに、3節では、アスペクトを表す複合動詞(e.g. 始動相：～かける/かかる、～だす、～始める/始まる、継続：～続ける/続く、完了：～終える/終わる、～上げる/上がる、～尽くす、～きる、～通す、～抜く)については、中国語においても、アスペクトを表す複合動詞が存在するものの、日本語と異なり、完結相を表す場合に限って複合動詞化可能という特徴がある。このため、中国語を母語にする日本語学習者にとっては、始動相の「～かける/かかる」、「～だす」の習得がむずかしい。日本語の複合動詞が「非完結性」をも表しうるという現象は、統語的に主要部が右にあり、「目的語節+動詞」補文型複合動詞が卓越しているという形態統語論的な要因に加え、日本語の「無界性」(unboundedness)という特性、即ち影山(2002)のいう「ケジメのない日本語」という特性とも関連している。

4節では、空間表現について、英語・中国語の対照から日本語の空間表現を考察する。日本語母語話者による英語作文コーパス<sup>1</sup>にみられる誤用をみると、前置詞 “in” の過剰使用が卓越しているが、これはON(平面上)やAT(点)という認知に基づく表現が、日本語の語彙には、英語・中国語に比べて少ないことに起因すると推測される。

英語では、前置詞 “in/ on/ at” が、明確な空間認知の相違に基づいて用いられる。一方、日本語の場所表現は、述語の義務項か随意項かといった項構造との関係で選択される格助詞「に」「で」が用いられ、IN(内部構造)、ON(平面上)、AT(点、ひとまとまり性)といった空間認知の区別によるものではない。

日本語においては、「～内(うち、～ナイ)」「～中(なか、～チュウ)」「奥」といった、境界や個体の輪郭が曖昧な空間認識表現が卓越しているのである。また、複合動詞「～こむ」も、「技を磨きこむ」「強い精神を鍛えこむ」「オリンピックを前に泳ぎこむ」等の例は、英語や中国語では、「一生懸命」「必死に」「何度も何度も」というような翻訳になるが、「抽象的なもの」(精神性に関わるもの)の「抽象的空間」(日本語における心理的な‘ウチ’の領域)への移動を表す用法ともとれる。こうした心理的な‘ウチ’の領域には、IN(内部構造)、ON(平面上)、AT(点、ひとまとまり性)といった明確な空間認知の区別はなく、その内部構造は、「無界的」である。こうした日本語の特性が、英語の習得においても “on/ at” を使うべきところ、最も広い空間認知的意味をもつ “in” を過剰使用してしまう要因ではないかと推測される。

日本語の「無界的認知」は、日本語母語話者による中国語学習者コーパスで観察される顕著な誤用類型にもみられる。例えば、中国語において、<一+類別詞>は名詞の前につき、名詞を個体化する機能をもつが、日本語母語話者の場合、<一+類別詞>をつけるべきところに、英語母語話者に比べ、顕著に「欠如」がみられる。英語母語話者の場合、英語に冠詞 a/the や、「限定詞」(determiner) と呼ばれる統語範疇が存在することが要因と推測される「過剰使用」が顕著である。こうした日本語対英語母語話者による中国語学習者コーパスにみられる誤用類型の対照から

も、日本語の「非個体化」性、「無界性」が浮き彫りになる。

複合動詞、空間認知、個体化といったキーワードから日本語を英語・中国語と対照してみると、そこにはいずれも、日本語の語彙における時空間における「無界性」が浮かびあがってくる。

## 2. 中国語からみた日本語の複合動詞

日本語の複合動詞の研究として、日本語学・日本語教育の分野においては、吉沢(1952)、寺村(1984)、山本(1984)、姫野(1999)、斎藤(2004)、石井(2007)等が代表的な論考として挙げられ、多くの詳細な論考がある。

また、一般言語理論の枠組みにおける日本語の複合動詞研究として、影山(1993)、Matusmoto(1996)、松本(1998)、由本(2005)、影山(2013)が代表的なものとして挙げられる。こうした一般言語理論を用いた研究の焦点は、「動詞+動詞」型複合動詞が、語彙部門または統語部門のどちらで形成されるのか、どのような項構造をもつ動詞の組み合わせからなるのか、どのような「語彙概念構造」(Lexical Conceptual Structure)から形成されるのか、前項動詞と後項動詞からどのように項構造を受け継ぐのか、複合動詞形成がどのような統語構造の反映なのか、という点であった。

本章では、日本語の特質を中国語の複合動詞との対照から分析する便宜上、一般言語理論の枠組みにおける先行研究を紹介し、同じ理論的枠組みで中国語の複合動詞との対照を試みる。

### 2.1 日本語の統語的複合動詞と語彙的複合動詞

影山(1993:74-97)では、日本語の複合動詞は、その統語的振る舞いの相違により、統語的複合動詞と語彙的複合動詞との二種類あり、(1)のように区別されるとしている。

#### (1) 日本語における二種類の複合動詞

##### a. 統語的複合動詞

払い終える、話し終える、しゃべり続ける、食べすぎる、食べそこなう、助け合う、動き出す、食べかける、しゃべりまくる、走りぬく、数え直す、見なれる、登りきる、やりつける

##### b. 語彙的複合動詞

飛び上がる、押し開く、泣き叫ぶ、売り払う、受け継ぐ、解き放つ、飛び込む、(隣の人に)話しかける、こびり付く、飲み歩く、歩き回る、踏み荒らす、誉め讃える、語り明かす、聞き返す、震え上がる、呆れ返る、持ち去る

さらに、日本語の複合動詞の形態統語論上の制約として、影山(1993:117)は、語彙的複合動詞は、項構造レベルで複合が起こるため、前項動詞 V1 と後項動詞 V2 の複合制約があり、この制約を「他動性調和の法則」(Transitivity Harmony Principle)として提示している。

#### (2) 「他動性調和の法則」(Transitivity Harmony Principle)

日本語の語彙的複合動詞は、原則として、外項をもつか否かの基準により、外項をもつ動詞(他動詞・非能格動詞)か、外項を持たない動詞(非対格動詞)の間での複合しかおこらない。

「語彙的複合動詞」とは、一言で言えば、V1 と V2 の間に如何なる統語的操作(挿入・置換・複合動詞の一部分のみとの照応関係・重複という操作等)も適用されない、語彙部門で形成される複合動詞である。「他動性調和の法則」の原則に従えば、日本語の語彙的複合動詞は、以下の(3)のような動詞の組み合わせからなる。

#### (3) 外項をもつ「他動詞 / 非能格動詞」の間の組み合わせ

##### a. 他動詞 + 他動詞

洗い落とす、ぬぐい落とす、切り落とす、切り倒す、叩き落とす、吹き消す、思い起こす、突き崩す、押し潰す、射止める、追い散らす

b. 他動詞 + 非能格動詞

探し回る、買いまわる、嘆き暮らす、待ち暮らす、待ち構える

c. 非能格動詞 + 他動詞

泣き落とす、競り落とす

d. 非能格動詞 + 非能格動詞

言い寄る、這い寄る、駆け寄る、飛び降りる、駆け下りる

中国語の複合動詞の典型は、日本語では非文法的となる「他動詞 + 非対格動詞」の組み合わせである。こうした日本語と中国語の相違点は、日本語の複合動詞の複合には、形態統語論上の制限が強く働いているのに対し、中国語の複合動詞の複合においては、「他動性調和の法則」のような形態統語論的な制限が働かないことを示唆する。つまり、日本語では、自動詞・他動詞の形態的区別及び主格・対格の形態的標識があるため、動詞の組み合わせにヴォイスに関わる形態統語論上の制限が強く働く。一方、孤立語的な中国語では、自動詞・他動詞の形態的区別も、主格・対格の形態的標識もなく、動詞の組み合わせがヴォイス上の制限を受けず、意味構造をそのまま反映した複合動詞が形成されるのである。

日本語の複合動詞の形成には、他動性調和の原則に加えて、由本(1996)、松本(1998)が提示する「主語一致の原則」も関与する。松本(1998:72)によれば、主語一致の原則は、以下のように定義される。

(4)「主語（卓立項）一致の原則」

二つの動詞の複合においては、二つの動詞の意味構造の中で最も卓立性の高い参与者（通例、主語として実現する意味的項）どうしが同一物を指さなければならない。

中国語の複合動詞形成と対照すると、「他動性調和の法則」も「主語一致の原則」も、主格・対格及び自動詞・他動詞が形態的に区別される日本語の原則であり、孤立語である中国語では、主格・対格も、自動詞・他動詞もいずれも形態的には区別されないので、こうした形態統語的制約は働かない。

2.2 日本語の二種類の補文関係の複合動詞：語彙的複合動詞と統語的複合動詞

影山(1993:74-97)の議論を要約すると、語彙的複合動詞と統語的複合動詞との区別は、以下の表1のような意味的・統語的対比に基づく。

表1 日本語の統語的複合動詞と語彙的複合動詞（影山(1993:74-97)を筆者が要約）

	統語的複合動詞	語彙的複合動詞
	～終える、～続ける、～すぎる、～出す、 ～直す、～なれる、～きる	飛び上がる、押し開く、泣き叫ぶ、受け継ぐ、 解き放つ、飛び込む
I . V1V2の 意味関係	・透明かつ合成的 ・V1がV2の目的語節の動詞となるような 補文関係をなす	・意味の不透明化や語彙化 ・種々雑多な意味関係
II . 生産性	・語彙的な結合制限（他動性調和の原則） を受けない。	・語彙的な結合制限（他動性調和の原則等）有。・辞書 への登録必要。
III . 統語的操 作	以下の統語操作が可能 ①代用 ②尊敬語化 ③受身化 ④サ変動詞による置換 ⑤重複	・左の①から⑤の統語的操作のいずれも適用不可能

2.2.1 日本語の補文関係の語彙的複合動詞

影山(1993)では、補文関係の意味関係をもつ複合動詞は、語彙的複合動詞と統語的複合動詞の二種類にまたがると

している。まず、補文関係の語彙的複合動詞として、以下のような例を挙げている。

- (5) a. ～上げる / 上がる (完了):  
歌い上げる、洗い上げる、鍛え上げる、磨き上げる
- b. ～払う (完全にその状態にある):  
落ち着き払う、酔っ払う、出払う
- c. ～渡る (隅々まで及ぶ):  
響き渡る、晴れ渡る、澄み渡る、知れ渡る、鳴り渡る、行き渡る、冴え渡る
- d. ～違う (動作を間違える):  
聞き間違う、掛け違う
- e. ～違う (動作が一致しない):  
入れ違う、行き違う、すれ違う
- f. ～逃がす (不成功):  
見逃す、取り逃がす
- g. ～止す (中途放棄):  
言い止す、食い止す、読み止す
- h. ～果たす (完遂):  
使い果たす、討ち果たす
- i. ～漏らす (失敗):  
書き漏らす、聞きもらす
- j. ～付く (着手):  
寝付く、居付く、住み付く
- k. ～落とす (不成功):  
言い落とす、書き落とす、聞き落とす、見落とす、釣り落とす、取り落とす
- l. ～交わす (動作のやりとり):  
言い交わす、呼び交わす、見交わす、酌み交わす、取り交わす
- m. ～習わす (習慣):  
言い慣わす、書き習わす、呼び習わす
- n. ～返る (完全にその状態になる):  
沸き返る、しょげ返る、静まり返る、呆れ返る
- o. ～頻る (事象の継続):  
鳴き頻る、降り頻る
- p. ～こなす (習熟):  
使いこなす、歌いこなす、着こなす、弾きこなす、読みこなす、乗りこなす

中国語においては、補文構造は複合動詞として具現化するだろうか？ 結論をいうと、後項述語が結果事象として認識されうる場合に限ってのみ、補文構造が中国語の複合動詞にも想定しうる。由本(2005)が挙げている日本語の補文関係の語彙的複合動詞を例にして考えると、(6)に示すように、中国語においても結果複合動詞が対応するケースが多い。

- (6) a. 鳴り渡る: 响遍 xiang-bian    b. 知れ渡る: 传遍 chuan-bian  
c. 見逃す: 看漏 kan-lou            d. 書き落とす: 写漏 xie-lou  
e. 見落とす: 看漏 kan-lou            f. 使い果たす: 用尽 yong-jin / 用光 yong-guang  
g. 呼び慣わす: 叫惯 jiao-guan

(6) の V2 部分は、以下に示すように、中国語においてはかなり生産力の強い結果複合動詞の V2 となる。

- (7) a. ～遍 bian : ～ということがあまねく行き渡る (～渡る)
- b. ～漏 lou : ～ということが抜け落ちている (～落とす / 落ちる)
- c. ～尽 jin : ～ということをし尽くす (～尽くす / 尽きる)
- d. ～光 guang : (あるものを使った) 結果、あるものが消滅する (使い切る)
- e. ～慣 guan : (ある行為の結果、その行為に) 慣れる (～慣れる)

しかし、「読みかける」「読みさす」「読み続ける」など、アスペクトに関わる V2 で、事態全体が完結性をもたない場合は、中国語では複合動詞になることはできず、始動相「読むことを始める」、中止相「途中まで読んでやめる」、継続相「読むことを続ける」というような動詞句としてしか表せない。なぜなら、中国語の複合動詞の典型は結果複合動詞であり、V2 が結果事象を表す述語でなければならないという完結性の原則が働くからである。

### 2.2.2 日本語の補文関係の語彙的複合動詞

次に、統語的複合動詞としての補文関係の複合動詞は、影山 (1993:96) によれば、統語的複合動詞は、すべて補文関係の複合動詞であるとして、以下のような例をあげている。

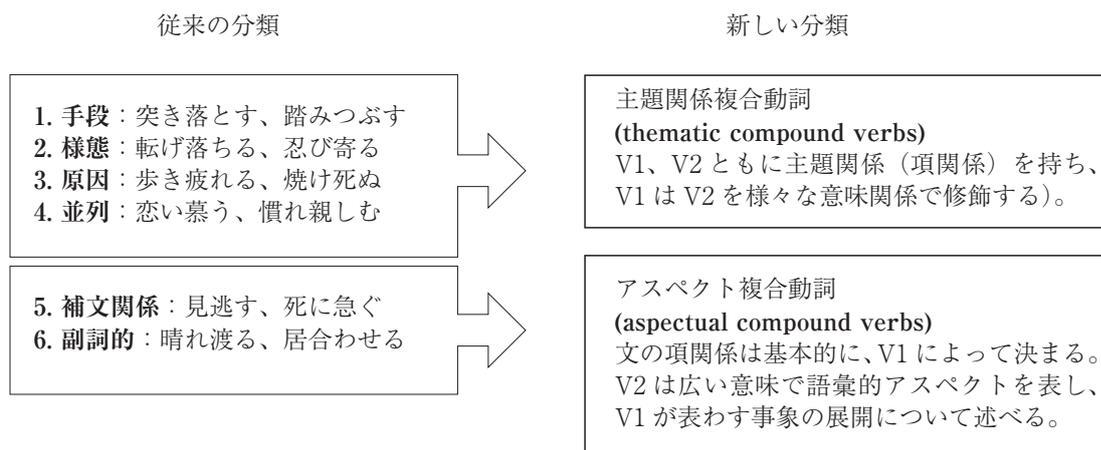
- (8) a. 始動 : ～かける、～だす、～始める
- b. 継続 : ～まくる、～続ける
- c. 完了 : ～終わる、～終わる、～尽くす、～きる、～通す、～抜く
- d. 未遂 : ～そこなう、～損じる、～そびれる、～しかねる、～遅れる、～忘れる、  
～残す、～誤る、～あぐねる
- e. 過剰行為 : ～過ぎる
- f. 再試行 : ～直す
- g. 習慣 : ～つける、～慣れる、～飽きる
- h. 相互行為 : ～合う
- j. 可能 : ～得る

中国語においては、V2 が完結性を表すことが結果複合動詞の条件となるため、(8) の統語的複合動詞のうち、複合動詞として対応できるのは、「完了」の「～終わる / 尽くす / 切る / 通す / 抜く」や、「習慣化」の「～つける / 慣れる / 飽きる」のみである。

### 2.3 日本語における二種類の語彙的複合動詞

影山 (2013:11) では、語彙的複合動詞の新体系として、語彙的複合動詞を以下のように再分類し、語彙的複合動詞と統語的複合動詞の中間に位置するものとして、「アスペクト複合動詞」のタイプを提示している。

(9)



アスペクト複合動詞は、上記(5)で挙げた、「～上げる / 上がる（完了）」、「～払う（完全にその状態にある）」、「～渡る（隅々まで及ぶ）」等の補文関係の語彙的複合動詞に相当する。

影山(2013:3-46)では、主にアスペクト複合動詞の性質について論じ、外国語との対照でも、アスペクト複合動詞はかなり稀な存在で、日本語固有の特徴ではないかと述べている。確かに、日本語のアスペクト複合動詞は、「呆れはてる」「待ちわびる」「褒めちぎる」「降りしきる」「決めあぐねる」「買ったたく」等、V2が原義とは異なる多様な語彙的意味をもち、上級日本語学習者でさえ、なかなか習得できないものが多い。しかし、いくつかの普遍的な語彙的アスペクト概念については、(7)に示したように、中国語においても、同様に複合動詞のV2で表される。この現象を以下3節で考察する。

### 3. 日本語と中国語のアスペクト複合動詞

#### 3.1 中国語の結果複合動詞研究

伝統的な中国語学においては、複合動詞に相当する「動詞＋結果補語」構造の研究は、中国語文法の重要な研究項目であり、また、留学生への中国語教育においても、最も習得が困難な文法項目として研究が進められてきた。

中国語研究において、複合動詞という術語が使われ始めたのは、生成文法の分野で、Li(1990), Huang(1992), 湯(1992a,b), 沈力(1993), Cheng and Huang(1994), Li(1995), Sybesma(1999)等が、中国語学で「動詞＋結果補語」と呼ばれている複雑述語について、項構造、項の受け継ぎ、主要部の位置、語彙概念構造、編入による複合動詞の生成、語彙論と統語論のインターフェースといった観点から分析を始めた1990年代であった。

日本語と中国語との複合動詞の対照研究は、項構造やGB理論の枠組みによる望月(1990a,b), 湯(1992a,b), 日本語の動詞の自他対応と中国語の結果複合動詞の使役交替の対照を行った望月(2004)、項構造、動詞意味論の視点から、日本語の複合動詞との対照を試みながら中国語の複合動詞の体系を論じた申(2007,2009)、英語の結果構文・日本語の結果複合動詞と中国語の結果複合動詞を論じた申・望月(2009)等がある。さらに、中国語を母語とする日本語研究者によるものも多く、日本語教育における複合動詞という視点をもつものも多い。なかでも、張威(1998)は、日本語の自他と中国語の結果複合動詞の実現可能・不可能を表す可能補語との対照研究で、日本語教育・中国語教育にも貢献する研究である。

#### 3.2 中国語の複合動詞の語構造と五分類

日本語との対照の前に、中国語の複合動詞全体像と、結果複合動詞の位置づけを示そう。湯(1989:154-161)は、中国語の複合動詞を、その内部構造から、以下のように五分類している。下線をひいたものは、使役起動交替をおこし、起動自動詞用法と使役他動詞用法の両方を兼ねる能格動詞としての複合動詞である。

- (10)a. 「動詞 + 目的語」型 (Predicate-Object Type):  
 种地 zhong-di (土地を耕す)、结婚 jie-hun (結婚する)  
 充电 chong-dian (充電する)、动员 dong-yuan( 動員する )
- b. 「動詞 + 結果補語」型 (Predicate-Complement Type):  
 推开 tui-kai (押し開ける)  
 打破 da-po (力を加えて壊す / 力が加わって壊れる)  
 摔坏 shuai-huai (速い速度で落として {壊す / 壊れる})  
 喊哑 han-ya (叫びすぎて {声をからす / 声がかかる})  
 累坏 lei-huai (疲れて {体が壊れる / 体を壊す})
- c. 「副詞 + 動詞」型 (Modifier-Head Type):  
 迟到 chi-dao (遅刻する)、热爱 re-ai (熱愛する)  
 瓦解 wa-jie (ばらばらに崩す / ばらばらに分裂させる)  
 改组 gai-zu (～が改組する / ～を改組する)
- d. 「主語 + 述語」型 (Subject-Predicate Type):  
 面熟 mian-shu (顔になじみがある)、头疼 tou-teng (頭が痛い)  
 眼熟 yan-shu (よくみかける)、性急 xing-ji (性格がせっかちである)
- e. 並列型 (Coordinative Type):  
 发展 fa-zhan (発展する / 発展させる)、改变 gai-bian (変える / 変わる)  
 成立 cheng-li (成立する / 成立させる)、丰富 feng-fu (豊富である / 豊富にする)、  
 充实 chong-shi (充実する / 充実させる)

この五種類の複合動詞のうち、結果複合動詞は(10b)の「動詞 + 結果補語」型複合動詞であり、その構造は、以下の(11)のように一般化される。

(11) 結果複合動詞の事象構造及び述語の組み合わせ

	+	
前項述語 (V1)		後項述語 (V2)
a. 事象	原因事象又は先行事象	結果事象
b. 動詞	他動詞 / 非能格動詞 / 非対格動詞	非対格動詞 / 形容詞 <sup>2</sup>

V1は、全ての種類の述語が担うことが可能である。一方、V2は、結果状態を表すために、非対格動詞または形容詞が担うが、例外的に、<V1+ 会 hui> (V1ができる)、<V1+ 懂 dong> (～を理解する)等の状態を表す他動詞が担う場合もある。

### 3.3 中国語における補文関係の複合動詞

日本語において最も生産性が高く、卓越した複合動詞の類型は、補文関係の複合動詞であるが、中国語には補文関係の複合動詞が存在するのだろうか。中国語の複合動詞研究のなかで、初めて「補文関係の結果複合動詞」という分析を導入したのは、申(2007)である。申(2007:198)では、中国語の結果複合動詞を語彙概念構造と項の受け継ぎという基準で五分類し、その一類として補文関係の複合動詞を導入し、V2がV1によって表される先行事象全体に対して、完結のアスペクトを表す類を「補文関係の結果複合動詞」と呼んでいる。具体的には、以下のような例があげられ、(9)で示した影山(2013)の複合動詞の分類のうち、「アスペクト複合動詞」に相当するものである。各例文は、《汉语动词-结果补语搭配词典》を参考に適宜編集している。

(12) 中国語の補文関係の結果複合動詞

- 1) <-完 wan> 「動作の終了：～終わる / 終える」 写完论文 讲完
- 2) <-到 dao> 「動作目的の達成」：看到(見る動作 (look at) の結果、見える (see)), 找到(探して (look for) みつかる (find)) 买到(買い物について入手する), 请到(招聘をお願いして、招聘可能になる)
- 3) <-好 hao> 「動作の完了+好ましい結果状態・結果物の創出：～上げる / 上がる」 写好论文(論文を書いて仕上げた)、蛋糕烤好了(ケーキが焼けた)
- 4) <-上<sub>1</sub> shang> 「動作の結果+ {上方の場所 / 目的 / 基準} に到達する」 UP 概念
  - a) 「上方移動」：登上山顶(山頂に登る), 爬上八楼(8階まで登る)
  - b) 「目標到達」：买上房子(家を買って手に入れる), 住上新房子(新しい家に住めるようになる)
  - c) 「数量詞で表す基準に到達」：最近失眠, 每天只能睡上三, 四个小时。(最近は不眠で、毎日 3,4 時間しか眠れない)、只要中午睡上一刻钟, 下午工作就特别有精神。(お昼に 15 分眠れば、午後は仕事の効率がよい)
- 5) <-上<sub>2</sub> shang> 「平面に対する動作の結果+ある平面にモノが存在するようになる」 ON 概念
  - a) 「固着：～つける / つく」：贴上(貼り付ける), 写上姓名(氏名を書き込む / 書き入れる), 穿上衣服(衣服をつける), 戴上{眼鏡 / 帽子 / 手套} ({眼鏡 / 帽子 / 手袋} を身に着ける)
  - b) 「二つのモノの {結合 / 接触}」 WITH 概念  
关上門(ドアを閉める), 锁上(鍵をかける), 接触上了(連絡がついた / 接触ができた)
  - c) 「状態変化、起動+継続：～始める / ～になる」 起動の ON 概念  
会议还没开大家就议论上了。(会議開始前に皆はすでに討論し始めた)、最近又忙上了。  
(最近また忙しくなった)、爱上一个女演员(女優を好きになる),
- 6) <-光 guang> 「対象の消滅：～切る」 吃光(食べ切る), 喝光(飲み切る), 花光(お金を使い切る), 卖光(売り切る / 売り切れる)
- 7) <-住 zhu> 「結果の固着：しっかりと～する」 风大, 帽子可要戴住了(風が強いので帽子をしっかりとかぶっていないなければならない)、记住(しっかり覚える)
- 8) <-着 zhao> 「目標達成」 找着了(探してみつかった)、那本书借着了(あの本は、借り出すことができた)
- 9) 先行事象への評価：  
<- 错 cuo: 誤る > <- 多 duo: 多い > <- 少 shao: 少ない > <- 早 zao: 早い > <- 晚 wan: 遅い >  
<- 长 chang: 長い > <- 短 duan: 短い >

さて、複合動詞の後項には、一見例外的に、起動相を表すものもある。例えば、<-上 shang><-起 qi><-开 kai> といった例がある。これらは、事象の「起動+継続」という意味を添えるアスペクト複合動詞であるが、中国語学では、結果補語として分類されている。しかし、こうした事象の「起動+継続」も、中国語においては、アスペクト的に、「有界性」をもつ状態変化として捉えられる。これは中国語の完結相を表すアスペクト接辞<-了 le>が、「存続場面のパーフェクト」(Perfect of Persistent Situation; Comrie1976:19-20, 望月 1997:63-64)として、将然相を表す際にも用いられることと関連する。即ち、中国語では、結果相でも、起動相でも、以下の(13)に示すような、「有界的」事象とその継続として、アスペクト接辞<-了 le> 及びアスペクト複合動詞の後項<-上 shang><-起 qi><-开 kai> が用いられる。

これは、日本語でも、瞬間現在のスポーツ中継などの「～走った！」や、探しものがみつかった際の「あった！」と同様、状態変化を表す有界的形式である。



(16) 先行事象に対する評価<sup>4</sup>：

a. 「～誤る」：<- 错 cuo> (～誤る / ～間違う)、<- 对 dui> (～が正しい)：

例：有的问题他处理对 (chuli-dui) 了，有的处理错 (chuli-cuo) 了。(《现代汉语述补结构用法数据库》)  
(ある問題は、彼はきちんと処理したが、ある問題は、処理を誤った。)

b. 「～過ぎる」：<- 多 duo / 少 shao> (多過ぎる、少なすぎる)、<- 早 zao / 晚 wan> (早すぎる、遅すぎる)、<- 长 chang / 短 duan> (長すぎる、短すぎる)

例：我因为起晚 (qi-wan) 了，所以没赶上汽车。(《现代汉语述补结构用法数据库》)  
(私は起きるのが遅かったので、バスに乗り遅れた。)

c. 「～足りる」：<- 够 gou> (～足りる、～尽くす)

例：这个老人尝够 (chang-gou) 了没有文化的痛苦了。(《汉语动词 - 结果补语搭配词典》)  
(この老人は教育を受けていない辛さを味わい尽くしている。)

第三に、V2 が主語節に対して、完結性以外に、「程度の極限」に達しているという意味を表す場合の例を挙げよう。

(17) 「程度の極限」：

a. 「～渡る」：<- 遍 bian>

例：这份广告传单在城里都传遍 (chuan-bian) 了。(《现代汉语述补结构用法数据库》)  
(この宣伝チラシは、街中に行き渡った。)

b. 「～尽くす」：<- 尽 jin>

例：他这一生受尽 (shou-jin) 了各种苦难。(《现代汉语述补结构用法数据库》)  
(彼は生涯でさまざまな苦難を味わい尽くした。)

上記の「完結性」「評価」「程度の極限」を表す中国語の複合動詞は、日本語のアスペクト複合動詞と共通する意味と構造をもっている。

### 3.5 アスペクト複合動詞の認知意味論的比較：「～上がる / 上げる」と中国語の <- 上 >

ここで、アスペクト複合動詞のうち、「～上がる / 上げる」と中国語の <- 上 shang> を取り上げて、認知意味論の視点から比較を試みる。両者は、いずれも具象概念としての「上方移動」を表す際に用いられるが、両者は、メタファーを通して抽象概念である UP 概念を生み出す。

まず、「～上がる / 上げる」は、UP 概念のひとつとして、「苦労した結果、結果物が産出される」という意味をもつ。

(18)a. 論文を書き上げる。

b. ケーキが焼き上がった。

(18a,b) に対応する中国語では、「よい結果物が産出された」という意味の <- 好 hao> というアスペクト複合動詞が対応する。

(19) <- 好 hao> 「動作の完了 + 好ましい結果状態・結果物の創出：～上げる / 上がる」

a. 写好论文 (論文を書き上げた)、

b. 蛋糕烤好了 (ケーキが焼き上がった)

<- 好 hao> は、「～上がる / 上げる」と異なり、結果物の産出のみに焦点があたり、結果に至る過程には焦点があたっていない。

一方、中国語の<-上 shang>は、(12, 4)で示したようなUP概念と、(12,5)で示したON概念の両方の概念を表す。以下、UP概念用法を(20),ON概念用法を(21)として再録する。

(20) <-上<sub>1</sub> shang>「動作の結果+ {上方の場所/目的/基準} に到達する」UP概念

- a)「上方移動」: 登上山顶 (山頂に登る), 爬上八楼 (8階まで登る)
- b)「目標到達」: 买下房子 (家を買って手に入れる), 住上新房子 (新しい家に住めるようになる)
- c)「数量詞で表す基準に到達」: 最近失眠, 每天只能睡上三, 四个小时。(最近は不眠で、毎日3,4時間しか眠れない)、只要中午睡上一刻钟, 下午工作就特别有精神。(お昼に15分眠れば、午後は仕事の効率がよい)

UP概念を表す<-上<sub>1</sub> shang>は、目標達成を表し、目標は上に存在する概念として認知されている。この用法は、日本語のアスペクト複合動詞に対応するものがみつからず、中国語の第二言語習得においては、習得が特に困難である。

(21) <-上<sub>2</sub> shang>「平面に対する動作の結果+平面にモノが存在するようになる」ON概念

- a)「固着: ~つける/つく」: 贴上(貼り付ける), 写上姓名(氏名を書き込む/書き入れる), 穿上衣服(衣服をつける), 戴上{眼鏡/帽子/手套}({眼鏡/帽子/手袋}を身に着ける)
- b)「二つのモノの{結合/接触}」WITH概念  
关上門(ドアを閉める), 锁上(鍵をかける), 接触上了(連絡がついた/接触ができた)
- c)「状態変化、起動+継続: ~し始める/~になる」起動のON概念  
会议还没开大家就议论上了。(会議開始前に皆はずでに討論し始めた)、最近又忙上了。(最近また忙しくなった)、爱上一个女演员(女優を好きになる),

ON概念<-上<sub>2</sub> shang>は、「~つける」が対応する例を除き、日本語のアスペクト複合動詞には対応しない。ON概念<-上<sub>2</sub> shang>の存在は、中国語において、空間表現のON概念が日本語よりも発達していることを示唆する。例えば、日本語と中国語の類別詞は、日本語では助数詞、中国語では量詞と呼ばれるが、机、ベッドの類別詞が以下のように異なる。

(22)a. 日本語の助数詞「台」: 大きな人工物を表す名詞と共起する類別詞

机一台、ベッド一台、車一台

b. 中国語の量詞<-张 zhang>: 平面と捉えられる名詞と共起する類別詞

一张书桌(机一台)、一张床(ベッド一台)

c. 中国語の量詞<-辆 liang>: 車輪をもつ名詞と共起する類別詞

一辆车(車一台)

日本語においては、大きな人工物と認知されるものは、大きな塊として認知され、その内部構造(平面、車輪)に焦点をあてるということがない。中国語は、日本語に比べ、アスペクト複合動詞においても、類別詞においても、ON概念が強い。これは、4節で述べる、日本語の空間認知の非有界性とも通じる現象である。

### 3.6 中国語における目的語補文型結果複合動詞

中国語には、主語節を補文にとる「主語補文」型複合動詞は日本語と同様存在するが、目的語節を補文にとる「始動: V1することを {~かける/~だす/~始める}」「継続: V1することを {~まくる/~続ける}」「未遂: V1することを {~そこなう/~損じる/~そびれる/~しかねる/~遅れる/~忘れる}」「過剰行為: ~過ぎる」「再試行: ~直す」「相互行為: ~合う」といった「目的語補文」型複合動詞は存在しない。日本語と中国語におけるこの相違は、日本語がOV語順であるのに対して、中国語がVO語順であるという統語構造の反映である。即ち、中国語で

は、目的語節の動詞との複合が起こらない。

ここで、注意すべき点は、中国語において「主語補文」型複合動詞が存在するといっても、結果複合動詞であること、即ち、事象の「完結性」が保証されなければならない点にある。中国語は、日本語と同様、主語補文型の結果複合動詞が存在する一方で、目的語補文型複合動詞は存在しないように思われる。以下、日本語の目的語補文型複合動詞が中国語ではどのように表されるかについて考察してみよう。

例えば、始動、継続、未遂、再試行を表す目的語補文型複合動詞は、中国語においては、(23)に示すように、 $[_{VP} V2 + [_{IP} \dots V1 \dots]]$ という目的語節をとる動詞句か、 $[_{VP} 没能 [_{VP} \dots V1 \dots]]$ のように過去の不可能な事態を表す助動詞文に対応し、複合動詞には対応していない。

- (23)a. 「～始める」                     $[_{VP} 开始 kaishi [_{IP} \dots V1 \dots]]$   
b. 「～続ける」                     $[_{VP} 继续 jixu [_{IP} \dots V1 \dots]]$   
c. 「～損なう / 損ねる」            $[_{IP} 没能 meineng [_{IP} \dots V1 \dots]]$   
d. 「～忘れる」                     $[_{VP} 忘 wang [_{IP} \dots V1 \dots]]$   
e. 「～直す」                         $[_{VP} 重新 chongxin [_{IP} \dots V1 \dots]]$

ここで、一見目的語補文をとるようにみえる <定 ding> という複合動詞を考えたい。

- (24)a. 这本书我是用定 (yong-ding) 了, 你找别的书吧。(《现代汉语述补结构用法数据库》)  
(この本は、私が使うことに決めたから、他の本を探してね。)  
b. 这个角色我演定 (yan-ding) 了, 谁也别跟我抢。(《现代汉语述补结构用法数据库》)  
(この役柄は、私が演じることに決めたとわ、誰も私から奪うことはできない。)

<定 ding> は、日本語に翻訳すると、「～することを決めた」という意味になり、目的語補文をとるようにみえる。しかし、中国語の結果複合動詞は、基本的に非対格動詞又は形容詞しかとることができないという事実から考えると、<定 ding> は、自動詞 / 形容詞用法で、「～することになっている」という意味であり、主語補文をとる結果複合動詞と分析される。

では、中国語はなぜ目的語補文をとる複合動詞がないのだろうか？例えば、「書き忘れる」に対応する中国語として、なぜ <\*忘写 wang-xie, [忘れる + 書く]> という複合動詞が不可能なのだろうか？その理由として、第一に、中国語においては、事象を時間順の語順で複合動詞を形成する「因果関係型」、或いは「先行-結果」語順型が、優先順位が最も高い複合動詞の型であることが挙げられる。

第二に、中国語では、動詞の後置成分として、目的語以外に、補語（結果補語、方向補語、可能補語、程度補語、数量補語）が置かれるという統語的要因が挙げられるであろう。以下 (25) に示すように、目的語と補語が共起する場合、動詞の後ろに隣接する位置に来るのは補語であり、目的語は、<把 ba> という目的語を前置する前置詞を伴って動詞の前に移動し、動詞直後の位置を補語に譲るという「補語優先」現象がある。

- (25)a. 把 事情 办完。仕事をやり終える。(結果補語)  
ba shiqing ban-wan.  
b. 把他 叫进来。彼を呼んできなさい。(方向補語)  
ba ta jiao-jinlai.  
c. 把话 又 说了一遍。話をもう一度言う。(数量補語)  
ba hua you shuo le yibian.

中国語においては、目的語と補語が共起する場合、<把 ba' 目的語 + 動詞 + 補語> という語順となり、目的語よりも補語のほうが、動詞の後置成分としての優先順位が高い。このように、中国語の統語構造において、目的語より

も補語が動詞の後置成分として優先される現象が、結果複合動詞の統語的卓越を示し、目的語との複合動詞化がおこらないという語形成にも反映されている。即ち、補語の統語的卓越性が、中国語では、目的語補文との複合動詞化が起こらないという語形成法則に反映されているのである。

### 3.6 語順からみた日本語と中国語の複合動詞

日本語と中国語の複合動詞の語順には、並列型を除き、二種類の普遍原則がある。第一の原則は、「句構造における語順が、複合動詞の語順にそのまま反映される」という「句構造と語構造の語順一致原則」である。第二の原則は、「事象の起こった順に動詞を並べる」という、時間順と語順の間にみられる「表象性」(iconicity)に帰結される「時間順原則」(Tai 1985)である。日本語も中国語も、複合動詞の語順には、両方の普遍原則が働いているが、日本語においては、「句構造と語構造の語順一致原則」が最も卓越性をもつ一方で、中国語においては、「時間順原則」が最も卓越性をもつ。

中国語において「時間順原則」が「句構造と語構造の語順一致原則」よりも卓越性をもつという特徴を最も端的に示す例は、補文関係をもつ結果複合動詞の語順においてみられる。例えば、<吃膩 chi-ni(飽きる - 食べる : 食べ飽きる)>、<跳烦 tiao-fan(踊る - 飽きる : 踊り飽きる)>・<穿惯 chuan-guan(履く - 慣れる : 履き慣れる)> は、前項述語が表す事象が時間的に先に起こり、後項述語が表す事象が時間的に後に起こる結果事象である。

中国語の動詞句は、VO 型語順で主要部が左にあるから、動詞句の主要部と補文の語順が、複合動詞にも反映されるのであれば、複合動詞の語順は、<\*膩吃 ni-chi(飽きる - 食べる : 食べることに飽きる)>、<\*烦跳 tiao-fan(飽きる - 踊る : 踊ることに飽きる)>、<\*慣穿 guan-chuan(慣れる - 履く : 履くことに慣れる)> のように、補文を表す部分が後に来るはずである。これは、例えば「返事を出し忘れた」は、中国語では、複合動詞で表現不可能なため、[<sub>vp</sub> 忘 wang 了 le [IP 回信 huixin]] と、「動詞 + 目的語節」の語順で表すしかないことから予測できる。<吃膩> (食べ飽きる)、<穿惯> (履きなれる)、<跳烦> (踊り疲れる) では、中国語の動詞句の「動詞 + 目的語」語順が複合動詞の語順を決めているのではなく、「何度も食べて飽きた」「何度も履いて慣れた」「長時間踊って疲れた」という、時間順が複合動詞の語順を決めていることになる。日本語と中国語における句構造及び複合動詞の語順原則と原則の優先順位について対照すると、以下の表2のようにまとめられる。

表2 日本語と中国語における句構造、複合動詞の構造と語順原則

	日本語	中国語
1. 動詞句の構造	1. OV 語順 2. 動詞句 : 主要部右 動詞の後に結果述語は許されない。	1. VO 語順 2. 動詞句 : 主要部左 動詞の後に結果述語がおかれる。
2. 複合動詞の語順原則の優先順位	1. 「句構造と語構造の一致原則」 →補文関係の複合動詞が卓越 e.g. 「書き忘れる」 「早過ぎる」 2. 「時間順原則」 e.g. ・因果関係：溺れ死ぬ ・先行 - 結果関係：食べ残す 売れ残る	1. 「時間順原則」 <b>結果複合動詞の卓越性</b> e.g. <吃膩>、<穿惯> →目的語補文型複合動詞は存在しない。 <*膩吃(食べることに飽きる)> <*慣穿(履くことに慣れる)> 2. 「句構造と語構造の一致原則」→ 目的語補文型はないが、主語補文型は存在する。 e.g. <-完>、<-上>、<-錯>、<-多>、<-少>、<-遍>

### 3.7 日本語の複合動詞と語順

以上、日本語の語彙的複合動詞及び統語的複合動詞の類型を中国語との対照を通して考察したが、日本語の統語構造がどのように複合動詞の語順に反映しているのかという観点から捉えなおしてみると、次の表3のようにまとめられる。表4は、日本語の複合動詞には、日本語の統語構造を反映した語順以外に、時間順原則を反映した「因果関係」及び「先行 - 結果」関係の複合動詞が存在することも示している。

表3 日本語の語彙的複合動詞の構造と語順

	V1	V2	統語関係	意味関係
統語的語順	1	V2の副詞成分	主動詞	副詞 - 動詞 1. 付帯状況・様態の複合動詞 持ち寄る、飲み歩く、探し回る、 聞き回る、持ち去る、滑り降りる、転げ落ちる 2. 手段の複合動詞 切り倒す、吸い取る、勝ち取る、 泣き落とす、言い負かす
	2	V2の主語節	主動詞	主語節 - 動詞 3. 主語補文関係 ～かける、～だす、～過ぎる、 ～得る
	3	V2の目的語節	主動詞	目的語節 - 動詞 4. 目的語補文関係 ～終える、～忘れる、～誤る、 ～直す、～慣れる
時間順語順	4	V2の原因事象	結果事象を表す	5. 因果関係 遊びくたびれる、泣きぬれる、溺れ死ぬ、焼け死ぬ、流れ着く
	5	V2の先行事象	結果事象を表す	6. 「先行 - 結果」関係 ～残る / 残す

### 3.8 日本語及び中国語学習者コーパスにみられる誤用

中国語においては、「原因 + 結果」構造が卓越しており、これは、結果複合動詞という語形成レベルにおいても、また生理・心理構文という構文レベルにおいても、「原因 + 結果」構造の卓越性が観察される。こうした中国語の特性は、中国語を母語とする日本語学習者の誤用においても反映される。望月 (2009) は「誤用パターン別上級日本語学習者作文コーパス」<sup>5</sup>において、中国語を母語とする日本語学習者の特性として、使役表現の過剰使用が観察されると述べ、次のような例を挙げている。

(26)a. たくさんの店が道路の両側の空いている場所を占めて、歩行者が歩けないほど混ませました (→混んでいました)。(CC808\_1)

- b. 许多 店家 占据 了 道路 两旁 的 空地,  
Xuduo dianjia zhanju le daolu liangpang de kongdi,  
沢山の店 占める LE 道路 両側 DE 空いている場所  
使得 道路 变得 很 拥挤。  
shide daolu biande hen yongji.  
～をひきおこす 道路 ～になる とても 混雑する

(26a)で、「\*混ませる」という使役形を用いた誤用の要因として、以下のような母語干渉が推測される。即ち、中国語では、(21b)のように、「原因事象 + 結果事象」型構造で表すのが自然だが、日本語では、原因事象を主語にとって、「道を混ませる」という使役表現は非常に不自然で、「たくさんの店が道路の両側に並んでいるので、道は人が歩けないほど混んでいました」とするのが自然な文である。

一方、日本語母語話者による中国語学習者コーパス (東京外国語大学満月コーパス)<sup>6</sup>では、以下の (27a)のように、心理述語文に <让 rang> といった使役標識が脱落している誤用例がみられる。

(27)a. \*( $\phi$ )高兴的在他的课( $\phi$ ), 能学习( $\phi$ )很有意思的中文小说。(学習者による作文)

- b. 让我高兴的是在他的课上, 能学习到很有意思的中文小说。(添削後)  
c. 嬉しかったのは、彼の授業で興味深い中国語の小説が勉強できたことである。

中国語では、心理述語文は原因を主語にとる使役構文をとるのに対して、日本語では、心理述語は経験者を主語に

とる形容詞・自動詞文であるという相違がある。こうした相違は中国語母語話者による日本語では「使役構文の過剰使用」が観察され、一方日本語母語話者による中国語では、「使役標識の脱落」という表裏をなす相関現象が観察される。

#### 4. 英語・中国語学習者コーパスの誤用からみた日本語の空間認知と個体化

本節では、日本語母語話者英語誤用コーパスにみられる「in」の過剰使用」や日本語母語話者中国語誤用コーパスにみられる「一个 yige」の欠如」に焦点をあて、日本語の空間認知が、融合型空間認知であり、「無界」的 (unbounded) であることを論じる。

##### 4.1 日本語・英語・中国語学習者誤用コーパス構築と中間言語研究

東京外国語大学では、以下三種類の日本語・英語・中国語学習者コーパス及び誤用コーパスの構築・誤用分析を行っている。まず、日本語学習者コーパスは、グローバル COE プログラム「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」(2007 年度～2011 年度) において構築され、以下のサイトで公開している。<http://cblle.tufs.ac.jp/llc/ja/index.php?menulang=ja>

本コーパスでは、台湾銘傳大学(中国語母語話者)、英国リーズ大学(英語母語話者又はヨーロッパ言語母語話者)、国立キエフ言語大学(ロシア語又はウクライナ語母語話者)における日本語学習者作文コーパス(作文数 373、文字数 161,533 字、執筆者総数 146 名)を、学習者から著作権に関わる承諾書を得たうえで、学習者情報とともに公開している。さらに、この日本語学習者作文コーパスから文法・語彙上の誤用項目を抽出し、日本語の学習者・教育研究者のための「日本語誤用オンライン辞典」を作成し、以下のサイトで公開している。

<http://cblle.tufs.ac.jp/llc/ja/index.php?menulang=ja>

次に、英語学習者コーパスは、2011 年度より収集され、東京外国語大学英語専攻の学生による英語上級学習者作文コーパス「朝日コーパス」(Sunrise Corpus TUFs, 2014 年 2 月現在、120 名の学習者が執筆した 1,189 作文、TOEIC 平均 800 点程度)に、英語母語話者が添削し、誤用項目が検索可能な「オンライン英作文学習者コーパス・誤用辞典」試用版を東京外国語大学国際日本研究センター HP にて公開している。

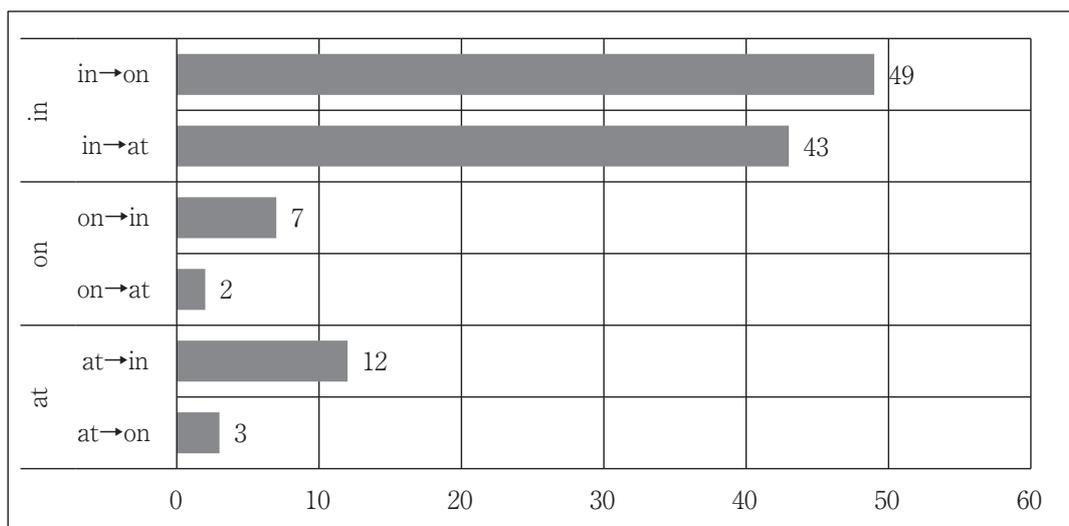
<http://sano.tufs.ac.jp/lcshare/htdocs/index.php>

第三に、中国語学習者コーパスは、2013 年度より、東京外国語大学中国語専攻 3・4 年生の中国語作文に基づく上級中国語学習者コーパス「満月コーパス」(Full Moon Corpus TUFs, 2014 年 2 月現在、81 名の学習者による 248 作文、92,000 字程度、平均 HSK6 級程度)を構築している。以下、この 3 種類の異なる母語の学習者コーパスにみられる誤用を通して、英語・中国語・日本語の空間表現の誤用の要因について分析する。

##### 4.2 英語学習者誤用コーパスにみられる英語の空間表現の誤用：「IN の過剰使用」

「朝日コーパス」において、卓越した誤用類型の一つは、「前置詞 in」の過剰使用」である。望月・狩野(2011)では、朝日コーパスにおいて抽出された空間・時間を表す前置詞 in/on/at の誤用は 116 例あり、その内訳は、(28) のように示されることを示した。

(28) 空間・時間を表す前置詞 in/on/at の誤用数



(28) が示すように、in/on/at の誤用 116 例のうち、in の誤用が 79%(92 例) を占め、最も顕著である。なぜ「in」の過剰使用」が日本語母語学習者に顕著なのだろうか。まず、英語の AT, ON, IN のイメージスキーマを (29) として図示しよう。

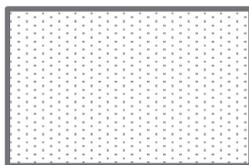
(29) AT / ON/ IN のイメージスキーマ

a. AT



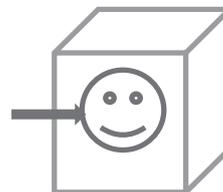
「点」→「ひとまとまり性」

b. ON



「平面」

c. IN



「立体」「内部構造」「内部移動」

以下、日本語母語話者による「in」の過剰使用」の要因が、日本語では無界的空間認知が卓越し、ON/AT のイメージスキーマが顕著ではないことに起因することを論じる。

#### 4.3. 英語・日本語・中国語の空間認知：IN と ON

日本語母語話者による in の誤用では、「場所表現には in が用いられる」という「過度般化」が日本語母語英語学習者には存在する。以下誤用例を挙げよう。各誤用文の後に付された( )内の番号は、執筆年度、学習者 ID を示している。下線は筆者によるもので、(→ X)は、X が正しい表現であることを示している。

(30)The safety in (→on) Japanese trains is also one of the reasons why people feel relaxed enough to sleep. (2012.29)

日本の電車の中の治安のよさも、安心した眠りができる理由でもあります。

公共交通機関であるバス、電車、船、飛行機等の空間は、英語では ON と認知され、on が用いられる。それは、共通理解として「決められた路線図上を移動する」という認知とも関連している。その証拠に、お客の指示に従って移動するタクシーは、on ではなく in a taxi と表現する。一方、日本語では、こうした「公共交通手段⇒路線図⇒ON」という認知は存在せず<sup>7</sup>、「～内」(車内、機内、学内)、「～の中」(電車の中、飛行機の中、学校の中)と

いった表現が用いられ、平面的認知の表現は用いられない。こうした日本語の特性が、「inの過剰使用」を引き起こしていると予測される。中国語においても、場所詞の後につく<-上-shang>が、ONの概念とみなされる。

- (31)a. 车上睡觉      電車の中で眠る。  
 b. 飞机上看电影      飛行機の中で映画を観る。

日本語母語中国語学習者にとって、(31)のような「名詞を場所化する<-上>」の習得がむずかしく、「満月コーパス」においても、脱落している誤用が多いが、英語のON概念の習得がむずかしいのと同様である。

また、中国語では、<-上>は「事象名詞」の後につくこともある。例えば、<课堂上(授業で)、宴会上(宴会で)、学会上(学会で)>のような例があるが、日本語では、格助詞の「で」としか訳せず、空間表現はつかない。望月・狩野(2012)は、英語のonが、「移動に関わる名詞」(e.g. route/course/train/airplane/trip)や「通信伝達に関わる名詞」(e.g. phone/radio/TV/internet)と共起するのは、「経路」(PATH)というイメージスキーマと関連している可能性を示唆し、以下のようなイメージスキーマとONの概念を提示した。

(32)「経路」(PATH)のイメージスキーマとON

「移動の経路」 ON route/course/train/airplane/trip  
 「事象の過程」 课堂上/宴会上/学会上



中国語において、事象名詞に<-上>がつく場合は、(32)のPROCESS「出来事の過程」が想定され、過程の上を、○が漸増的に移動する、即ち「時間の推移」というアスペクトのイメージと関連しているともいえる。日本語では、「授業中<sup>チュウ</sup>」という表現にあたる。

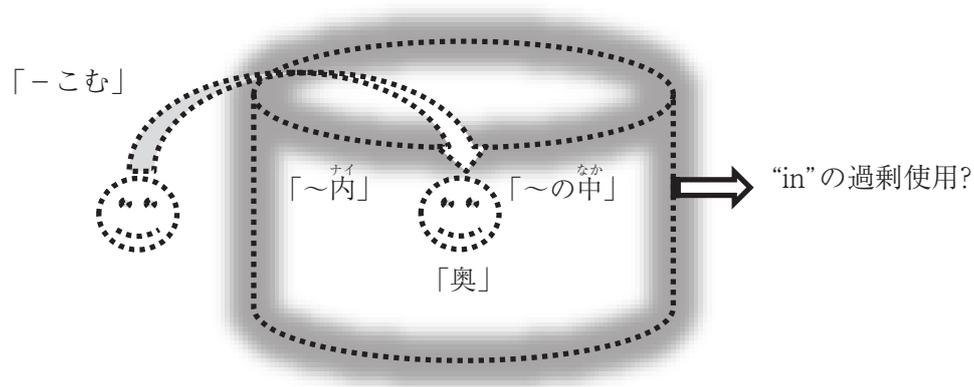
このように、英語・中国語は、ONの空間表現が卓越している<sup>8</sup>のに対し、日本語では、(57)で示したような「点」「平面」「立体」という区別が明確な空間認識が存在せず、(61)に示すような、空間や実体の境界が曖昧な「ウチ」という認識しかないように思われる。

例えば、日本語の「〜こむ」は、生産性が高い複合動詞であるが、「床を磨きこむ」「身体と精神を鍛えこむ」等の用法は、抽象的な「精神性」がある空間の内部へ移動するという「抽象的内部移動」を示している。こうした抽象的内部移動の「〜こむ」は、複合動詞が存在する中国語や韓国語でも、複合動詞にすることができず、「一生懸命|磨く/鍛える|」と翻訳されるという。

また、日本語の「奥」という空間概念も、抽象的な空間概念である。「奥」は心理的に最も遠い場を指し、英語では、interior (内部), back (後部), bottom (底), depth (深い部分), secret (秘密の/神秘的な)等に対応し、英語からみれば多義性をもつが、日本語の語彙としては、「奥」が表す空間は、「遠く深いところに存在する神秘的な、無限の広がりをもつ場」で、その無界性がINというイメージスキーマと結びつくのではないだろうか。

日本語における「〜内<sup>ナイ</sup>」、「〜の中<sup>なか</sup>」「〜こむ」「奥」等、「境界が曖昧な内部空間」と「内部空間に融合しているモノ」というイメージスキーマは、(33)のように表される。

(33) 日本語における「<sup>ナイ</sup>～内」、<sup>なか</sup>「～の中」「奥」「～こむ」の「無界的」イメージスキーマ



#### 4.4. 概念化された場の「点」としての認知：AT と IN

英語では、「概念化された場」(e.g. school, shop, station, hotel, post office) は、ある「一定の機能をもつ場」として「ひとまとまり性」をもち、個体化された点としての AT の概念と結びつく。しかし、日本語にはこのような認知手段はなく、(33) で示したような曖昧な空間として認知されるため、やはり「in の過剰使用」がみられる。以下の誤用例は、「学校」「大学」という概念化され、個体化された場に in を用いた誤用例である。

(34)a. There are a lot of food and drinks stalls in (→ at) the university run by students. (2011.63)

大学には、学生たちによって運営される飲食の屋台がたくさんある。

b. In (→ at) the school, I studied English diligently in order to enter TUFS, Tokyo University of Foreign Studies. (2012.15)

学校では、東京外国語大学に合格するために、英語をがんばって勉強した。

(34a,b) の university/school は、「具体的な場」としてではなく、「大学」「学校」という機能面に視点をおいた「概念化され個体化された場」として、AT と認識され、内部構造認知の IN とは共起しない。しかし、日本語母語英語学習者は、「概念化された場」を「ひとまとまり」として認知する AT の概念でとらえることがむずかしい。その一つの要因に、日本語の場所表現には、「場」の認知の相違によって異なる格助詞を用いることがないことが挙げられる。「に」「で」の使い分けは、空間認知ではなく、統語的な要因に基づいている。

(35)a. 「場所 + に」:

語彙的に「存在」の意味を内包する述語「ある、いる、住む、置く、留まる、泊まる」等と共起し、述語の「必須項」(obligatory argument) となる。中国語では、「動詞 + < 在 zai > 存在場所」構文に相当し、存在場所は動詞の後置成分で補語。

b. 「場所 + で」:

命題の「場面設定」(scene-setting) として、文全体の修飾機能をもつ場合に用いられ、述語にとっては「随意項」(optional argument) であり、基本的にどのような文にもつくことができる。中国語では、「< 在 > 場所 + 述語」に相当し、副詞句。

つまり、空間を表す「に」と「で」の使い分けは、述語の語彙的特性によって決められているため、日本語母語話者は、英語・中国語にみられる空間認知、即ち英語における IN/ON/AT の使い分け、中国語の名詞を場所化する < 上 > の習得が困難となる。一方で、英語・中国語を母語とする日本語学習者にとっては、「に」と「で」の使い分けが学習困難点となる。一般的には、初級ほど、また中国語母語話者ほど、「に」の過剰使用が観察される。「中国語の介詞 < 在 > = 日本語の“に”」という過度般化によるものである。以下、「日本語誤用オンライン辞典」から誤用

例を挙げよう。

- (36)a. ドーピングの問題はどれも複雑なので具体的に答えられないだろう。上に(→で)論じられたことからもっと議論することはあると思われる。(英語母語, Ld\_044\_2009)
- b. 大学院で私の人生の中に(→で)初めての「零」をもらいました。(中国語母語, Mc\_005\_2010)

#### 4.5. 中国語誤用における「数量詞の欠如」: 日本語における個体化認知の欠如

池上(1981), 池上(2007)では、英語が「個体化指向」「有界的」(bounded)な事態把握であるのに対して、日本語は、個体を全体に融合させ、明確な輪郭をもたない「連続体指向」「無界」(unbounded)的事態把握であることが述べられている。この主張を支持する現象として、「満月コーパス」にみられる「“一个 yige”の欠如」による誤用が挙げられる。「“一个 yige”とは、「一個」「ひとつの」の意味をもち、英語の不定冠詞“a”に類似する数量詞であるが<sup>9</sup>、“a”とは異なり、常に義務的に名詞につくわけではなく、沈家煊(1995)によれば、「有界的」(bounded)な事態把握の場合にのみにつく。以下、「“一个”」に代表される数量詞がつく例文を挙げる。

- (37)a. 虽然是一个物资不是很丰裕的时代, 但是胡老师以及他家人对我的热情款待的回忆, 始终就像一个宝藏一样。  
物質的に豊かとはいえない時代でしたが、胡先生と先生のご家族が私をご親切にもてなしてくださった思い出は、宝物のように今も胸に刻まれています。
- b. 日本是一个高度管理的社会, 有人说整个日本如同一个大公司。(人民日报 1995年6月份, 北京大学 CCL コーパスによる)  
日本は高度な管理社会で、日本全体が大企業のようであるともいわれる。

下線部の「時代」「宝物」「社会」「大企業」に相当する中国語には、いずれも“一个”という数量詞がつくのにに対し、日本語ではこうした数量詞がつかない。「満月コーパス」においても、(38)の誤用例が示すように数量詞の脱落が顕著である。

- (38)a. 那时发生了\*(一件)不幸的事。  
その時、不幸な出来事がおこった。
- b. 东大和有\*(一个)很大的公园, 东大和南公园, 附近也有\*(一条)小河。  
東大和にはとても大きな公園がある、即ち東大和南公園である。そして、その付近には小川もある。

一方、英語母語話者による中国語学習者コーパスでは、「“一个”」=英語の不定冠詞“a”という過度般化により、「無界」(unbounded)的な未完了の事態においても“一个”をつけるという過剰使用がみられる。以下は、台湾師範大学<sup>10</sup>より提供された英語母語話者コーパス中にみられた“一个”の過剰使用例であるが、いずれも、予定・可能・蓋然性・否定等の「無界」(unbounded)的な未完了の事態に“一个”をつけた誤用例である。

- (39)a. 我計畫我們去電影院看(\*一部)電影。  
私は、私たちが映画館に行って、一作の映画を見る計画をしている。
- b. 我記得你說過你喜歡丟飛盤, 所以我會把(\*一張)飛盤帶來。  
君はフリスビーが好きだときいたから、私はフリスビーを一つ持ってくるよ。
- c. 我在台北沒有發生(\*一個)大問題, ……  
私は台北では、まだ大きな一つの問題にあったことがない。
- d. 今天他不但忘了帶手機, 也忘了帶(\*一瓶)水。  
今日彼は携帯電話を忘れたばかりではなく、水一本持ってくるのも忘れた。

中国語には、文法範疇としての「数」はないが、類別詞が非常に発達し、数量詞が「有界的」(bounded) な事態把握の場合につく。この点で、中国語は、(40) のように、英語ほど「個体化指向」ではないにしても、日本語よりは、「個体化指向」が強いといえる。

(40)

	① 文法範疇「数」	② 類別詞	③ 個体化
英語	+	-	+++
中国語	-	+++	++
日本語	-	+	-

## 5. 結び

本論では、日本語の語彙の特質を、複合動詞、空間表現、数量詞について、中国語・英語との比較から論じた。論考を通して浮き彫りになるのは、日本語が、英語についてはいうまでもなく、中国語よりも「連続体指向」「無界」的事態把握の特質をもつという事実である。

まず、複合動詞においては、日本語と中国語の共通点は、「統語構造で動詞と最も緊密な関係にある統語成分が複合される」という点である。また、アスペクト複合動詞においても、両言語は非常に豊富な体系をもつ。

一方、日中語の相違点として、日本語で卓越した複合動詞は、「目的語節+動詞」型補文型複合動詞であるのに対して、中国語で卓越した複合動詞は、「動詞+結果補語」という統語構造が反映された結果複合動詞である、という相違がある。このため、中国語では、完結性をもたない始動相「～始める」「～かける」「～出す」、継続相「～続ける」、未遂の「～忘れる」「～そこなう」等の「無界的」事象把握は複合動詞化されない。中国語は、複合動詞において「完結性」という「有界的」事態把握が非常に卓越しているのに対し、日本語は始動相、継続相、未遂といった「無界的」事象についても複合動詞を形成できるという大きな相違がある。

第二に、英語の空間を表す前置詞“in”“on”“at”のうち、日本語母語英語学習者コーパスにおいて、“in”の過剰使用が顕著であるという事実をみた。その誤用原因として、日本語における「～内」<sup>□□</sup>、「～の中」<sup>□□</sup>「～こむ」<sup>□□</sup>「奥」等、「内部空間に融合しているモノ」「境界が曖昧な内部空間」といった空間認知が関与している可能性を論じた。ここにも、日本語母語者において、「無界的」空間認知が卓越し、「無界的」空間に“in”を用いる可能性がみえる。

第三に、日本語母語話者学習者コーパスにおける「中国語の数量詞“一个”の欠如」、英語母語話者学習者コーパスにおける「中国語の数量詞“一个”の過剰使用」が卓越しているという対比は、日本語が「無界」的事態把握の特質をもつため、日本語母語話者にとって、「有界的」事象把握の“一个”の習得が困難であることが示唆される。

日英語の表現類型の相違については、多くの論考があるが、中国語も加えた比較をしてみると、中国語は、さまざまな点で、日本語対英語の両極の中間に位置する言語のように思われる。中国語は、自他対応の語形成において自動詞が基本、脱使役化、複合動詞という点で、日本語と類似するのに対し、VO語順、使役構文の卓越性、数量詞による名詞の個体化という点で、英語と類似する。日本語を英語のみならず、中国語を加えた比較を通して分析することは、こうした意味で非常に興味深い。

最後に、本稿では、母語が異なる英語・中国語・日本語学習者コーパスにみられる誤用類型の相違についても論じた。学習者コーパスの研究は、学習者の母語の特質を検証可能な貴重なデータであり、学習者の母語にねざした効率的な言語教育研究にも大きく貢献する。学習者コーパス研究が、新しい学問領域として大きく研究が進むことを期待して筆をおきたい。

## 使用コーパス

1. 《汉语动词-结果补语搭配词典》1987. 王砚农・焦群・庞颢编. 北京语言学院出版社.
2. 北京大学中国語学研究中心 CCL コーパス.

3. 《现代汉语述补结构用法数据库》2009. 早稲田大学砂岡和子研究室・北京大学中文系詹卫东研究室・東京外国語大学望月圭子研究室共同制作。中国語の複合動詞オンライン辞典。  
<http://ccl.pku.edu.cn/vc/>
4. 東京外国語大学 GCOE 「日本語学習者言語コーパス」  
<http://cblle.tufts.ac.jp/lc/ja/index.php?menulang=ja>
5. 東京外国語大学 GCOE 「日本語誤用オンライン辞書」  
<http://cblle.tufts.ac.jp/lc/ja/index.php?menulang=ja>
6. 東京外国語大学国際日本研究センター 「オンライン英作文学習者コーパス・誤用辞典」  
<http://sano.tufts.ac.jp/lcshare/htdocs/?lang=japanese>
7. 東京外国語大学・国立台湾師範大学・上海外国語大学共同制作  
 ‘Learners’ Error Corpora of English Searching Platform’  
[http://ngc2068.tufts.ac.jp/corpus\\_eng/](http://ngc2068.tufts.ac.jp/corpus_eng/)
8. 東京外国語大学・国立台湾師範大学共同制作  
 ‘Learners’ Error Corpora of Chinese Searching Platform’  
[http://ngc2068.tufts.ac.jp/corpus\\_ch/](http://ngc2068.tufts.ac.jp/corpus_ch/)

## 参考文献

- アンドレア・タイラー, ビビアン・エバンズ著, 国広哲弥監訳, 木村哲也翻訳. 2005. 『英語前置詞の意味論』 研究社.
- 青木博史 (2003) 「複合動詞の歴史的変化」 影山太郎編. 2013. 『複合動詞研究の最先端－謎の解明にむけて』 ひつじ書房.
- Cheng, Lisa Lai-Shen and C.T. James Huang. 1994. “On the Argument Structure of Resultative Compounds”, *In Honor of William S-Y. Wang: Interdisciplinary Studies on Language and Language Change*. 187-221. Pyramid Press, Taipei.
- Huang, James C.T. 2006. “Resultative and Unaccusatives: a Parametric View” 『中国語学』 234号, 1-43. 日本中国語学会.
- 池上嘉彦. 1981. 『「する」と「なる」の言語学－言語と文化のタイポロジーへの試論』 大修館書店.
- 池上嘉彦. 2006. 『英語の感覚・日本語の感覚』 NHK ブックス. NHK 出版.
- 池上嘉彦. 2007. 『日本語と日本語論』 筑摩書房.
- 姫野昌子. 1999. 『複合動詞の構造と意味構造』 ひつじ書房.
- 石井正彦. 2007. 『現代日本語の複合語形成論』 ひつじ書房.
- 影山太郎. 1993. 『文法と語形成』 ひつじ書房.
- 影山太郎. 1996. 『動詞意味論－言語と認知の接点』 くろしお出版.
- 影山太郎. 2004. 『ケジメのない日本語』 岩波書店.
- 影山太郎. 2005. 「辞書の知識と語用論的知識－語彙概念構造とクオリア構造の融合にむけて」 影山太郎編 『レキシコ  
ンフォーラム No.1』 : 65-101. ひつじ書房.
- 影山太郎編. 2013. 『複合動詞研究の最先端－謎の解明にむけて』 ひつじ書房.
- Levin, Beth. 1993. *English Verb Classes and Alternations*. University of Chicago Press.
- Levin, Beth, and Malka Rapaport Hovav. 1995. *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. Cambridge: MIT Press.
- 梁银峰. 2007. <论汉语动补复合词的词汇化过程> (『中国語動詞 - 補語複合語の語彙化過程』) 上海: 学林出版社.
- 陆俭明. 1990. <“VA了”述补结构语义分析> <汉语学习> 1990年第1期.
- 陆俭明. 2001. <“VA了”述补结构语义分析补义> <汉语学习>. 2001年第6期.
- 马真・陆俭明. 1997. <形容词作结果补语情况考察>. <汉语学习>. 1997年1,4,6期.
- 望月圭子. 1990a. 「日・中両語の結果を表す複合動詞」 『東京外国語大学論集』 第40号、13-27.
- 望月圭子. 1990b. 「動補動詞の形成」 『中国語学』 237 : 128-137. 日本中国語学会.

- 望月圭子. 1993. 「場所に関わる『に』と『で』 - 中国語との対照から -」『松田徳一郎教授還暦記念論文集』 370-381. 研究社.
- 望月圭子. 1997. 「中国語のパーフェクト相」『東京外国語大学論集 55』 55-71. 東京外国語大学.
- 望月圭子. 2003. 「日本語と中国語における使役起動交替」『松田徳一郎教授追悼論文集』 236-260. 研究社出版.
- 望月圭子. 2004. 『動詞の使動與起動交替: 漢日語的對照研究』 (Causative and Inchoative Alternation: Comparative Studies on Verbs in Chinese and Japanese) 台灣國立清華大學語言學研究所博士論文.
- Mochizuki, Keiko. 2007. "Patient-Orientedness in Resultative Compound Verbs in Chinese." Yuji KAWAGUCHI (et al.), *Corpus-Based Perspectives in Linguistics*. 267-280. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- 望月圭子・キャロライン狩野. 2012. 「英語・日本語における空間・時間に関わる格標識: 日本語母語話者による英作文学習者コーパスにみられる誤用類型」『東京外国語大学論集』 第 85 号, 219-236.
- 望月八十吉. 1982. 「日本語から中国語を眺める - その 2 -」『日本語と中国語の対照研究』 第 8 号 :1-18. 日本語と中国語対照研究会編.
- 望月八十吉. 1992. 「日・中両国語における能格的表現」, 大河内康憲編『日本語と中国語の対照研究論文集』 49-67. くろしお出版.
- 望月八十吉. 1994. 『現代中国語の諸問題』 好文出版.
- 太田辰夫. 1958. 『中国語歴史文法』 江南書院.
- 斎藤倫明. 2004. 『語彙論的語構成論』 ひつじ書房.
- 沈家煊. 1995. <“有界”与“无界”>《中国语文》第 5 期. 367-380.
- 申亜敏. 2005. 「中国語の自他と結果表現類型」影山太郎編『レキシコンフォーラム No.1』 229-237. ひつじ書房.
- 申亜敏. 2007. 「中国語の結果複合動詞の項構造と語彙概念構造」影山太郎編『レキシコンフォーラム No.3』 pp.195-227. ひつじ書房.
- 申亜敏. 2009. 『中国語結果複合動詞の意味と構造—日本語の複合動詞・英語の結果構文との対照及び類型的視点から—』 東京外国語大学博士論文.
- 申亜敏・望月圭子. 2009. 「中国語の結果複合動詞—日本語の結果複合動詞・英語結果構文との比較から」小野尚之編『結果構文のタイポロジー』 407-450. ひつじ書房.
- Tai, James H-Y. 1984. 'Verbs and Times in Chinese: Vendler's Four Categories' *Lexical Semantics*, Chicago Linguistic Society.
- Tai, James H-Y. 1985. "Temporal sequence and Chinese word order" In John Haiman (ed.), *Iconicity in Syntax*: 49-72, Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Tai, James H-Y. 2003. 「認知相對論: 漢語結果複合動詞的啟示」『語言暨語言學』 第四卷, 第二期 :301-316, 中央研究院.
- Talmy Leonard. 2000. "A Typology of Event Integration" *Toward a Cognitive Semantics, vol. II: typology and Process in Concept Structuring*. Cambridge, MA: The MIT Press. 213-288.
- 田中茂範・松本曜. 1997. 『空間と移動の表現』 研究社.
- 湯 廷池. 1989. 「詞法與句法的相關性: 漢, 英, 日三種語言複合動詞的對比分析」『漢語詞法句法續集』 147-211. 臺灣學生書局.
- 湯廷池. 1992. 「漢語述補式複合動詞的結構、功能與起源」『漢語詞法句法四集』 95-164. 臺灣學生書局.
- 湯廷池. 2000. 「漢語複合動詞的使動與起動交替」『第七屆中國境內語言暨語言學國際討論論文集』 台灣國立中正大學語學研究所.
- 湯廷池. 2002a. 「漢語複合動詞的使動與起動交替」, 『語言暨語言學』 3 卷 3 期 : 615-644.
- 湯廷池. 2002b. 「漢語派生動詞‘-化’的概念結構與語法功能」『中國語文研究』 第 13 期. 9-25. 香港中文大學・北京語言文化大學.
- 湯廷池. 2004. 「漢語動後成分」, 『華語文教學研究』 第一卷第一期, 137-158.
- 寺村秀夫. 1984. 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 くろしお出版.

- 山本清隆 1984. 「複合動詞の核支配」『都大論究』 21, 32-49.
- 王軼群 .2009. 『空間表現の日中対照研究』 くろしお出版 .
- Washio, Ryuichi .1997. “Resultatives, compositionality and language variation”. *Journal of East Asian Linguistics* 6:1-49.
- 徐 丹 .2001. < 从动补结构的形成看语义对句法结构的影响 > 《语言研究》第 2 期 : 5-12. 山西省社会科学院 .
- 吉澤典男 1952. 「複合動詞について」『日本文学論究』 10:pp.32-32-42.
- 由本 陽子 . 2001. 「動詞から動詞を形成する語形成における下位範疇化素性の受け継ぎについて」『言語文化研究』第 27 号 : 453-473. 大阪大学言語文化部・言語文化研究科.
- 由本陽子 .2005. 『複合動詞・派生動詞の意味と統語—モジュール形態論から見た日英語の動詞形成—』 ひつじ書房 .
- 詹卫东 . 2011.< 复合事件的语义结构与现代汉语述结式的成立条件分析 > 《词 - 语界面 - 前沿研究及应用》 北京大学出版社 .

## 注

- 1 東京外国語大学国際日本研究センター国際日本語教育部門「オンライン英作文学習者コーパス・誤用辞典」プロジェクトおよび科学研究費 基盤研究 (B)「英日中国語ウェブ誤用コーパス構築と母語をふまえた英語・日本語・中国語教授法開発 (2013 年度 -2015 年度, 望月圭子代表)」の援助のもとに構築された東京外国語大学で授業時に執筆された英作文誤用コーパスであり、本研究は、上記二研究プロジェクトの研究成果の一部である。
- 2 中国語においては、形容詞、非対格動詞の区別が明確ではない。例えば、< 累 lei> (疲れる) は、形容詞につく程度副詞 < 很 hen> (とても) がついて < 很累 > (とても疲れている) といえるので形容詞として機能するのに対し、< 我累了 > (私は疲れた) は、非対格動詞とみなせる。
- 3 北京大学中文系・早稲田大学砂岡和子研究室・望月圭子研究室で構築しているオンライン中国語補語辞典 (<http://ccl.pku.edu.cn/vc/>)
- 4 詹 (2011) は、この評価型複合動詞を“主観評価型”結果複合動詞と呼んでいる。また、陸 (1990, 2001) 及び馬・陸 (1997) は、「～過ぎる」に当たる中国語の評価型複合動詞を、‘偏离义’ (逸脱の意味) を持つ複合動詞として、< 买贵 mai-gui> (買った結果、値段が高過ぎた)、< 吃多 chi-duo> (食べ過ぎる)、< 来早 lai-zao> (来るのが早すぎる)、< 起晚 qi-wan> (起きるのが遅すぎる)、< 挖浅 wa-qian> (掘った穴が浅すぎる) 等の例を挙げている。
- 5 2006 年度から 2008 年度にわたり東京外国語大学外国語学部日本課程留学生 1,2 年生が授業時に執筆した作文を添削し、誤用パターン別に分類した資料である。平成 19 年度～22 年度科学研究費助成基盤研究 A・「多言語話しことばコーパスと学習者言語コーパスに基づく言語運用の研究と教育への応用」(研究代表者川口裕司、科研費 No.19202015) の助成を受けている。
- 6 科学研究費 基盤研究 (B)「英日中国語ウェブ誤用コーパス構築と母語をふまえた英語・日本語・中国語教授法開発 (2013 年度 -2015 年度, 望月圭子代表)」の助成により、東京外国語大学中国語専攻の授業時に執筆された中国語学習者コーパスに基づく誤用コーパス。
- 7 但し、類別詞である助数詞「-本」が、決められた路線を走る機能として捉えられる場合、類似の認知が起こる。

- a. 寝坊をして、電車一本のがしてしまった。
- b. このあたりは混むから、電車一両、前の車両に乗ろう。

の「電車一本」では、運行されている交通機関としての「電車」への認知として、やはり「路線図」がイメージされ、「細長いもの」から「移動の経路」へと意味拡張した「-本」が用いられる。一方、b. の「電車一両」では、物体としての電車が、両輪をもつという認知から「両」が用いられる。

また、助数詞「-本」は、通信関係にも用いられ、「情報の移動経路」としての認知スキーマが関係している。

- c. 電話を一本かけた。
  - d. 手紙を一本書いた。
- 8 中国語の類別詞「量詞」< 张 zhang> も ON 概念で、机・ベッドは、機能面が ON として把握されるため < 张 > と共起するが、日本語では、机・ベッドは「大きなもの」という BIG 認知で、数量詞「-台」と共起し、「量詞」< 张 > の習得に時間がかかる。
  - 9 中国語の類別詞は非常に豊富な体系をもつが、ここでは、“一个 yige” を数量詞の代表として記載する。
  - 10 臺灣師範大學國語中心で中国語を学ぶ英語母語話者が執筆した中国語作文 600 作文で、CEFR で A2,B1,B2 レベルの台湾教育部中国語検定試験 TOCFL の試行版による。提供して下さった陳浩然教授、張莉萍教授に感謝申し上げます。

# Unboundedness in Japanese Lexicon:

## Comparative Analysis of Compound Verbs in Chinese and Spatial Lexicon in English

Keiko Mochizuki

(Tokyo University of Foreign Studies)

YaMing Shen

(Waseda University)

Keyword: Unboundedness, VV compound verbs, Spatial Lexicon, Comparative Analysis with English and Chinese, Individuality, Learners' Corpora

This paper focuses on “Unboundedness” in Japanese lexicon by comparing Japanese VV compound verbs with Chinese VV compound verbs and examining misuses of spatial prepositions “in/on/at” in “TUFs Sunrise Learners' Corpus of English”. We propose two pieces of evidence for unboundedness in Japanese in terms of temporal and spatial lexicon.

First, in terms of temporal viewpoint, we discuss that Japanese VV compound verbs have no aspectual constraint while Chinese VV compound verbs have strong constraint that V2 should be telic. This claim can explain why Japanese learners of Chinese make frequent errors in lack of V2 in Chinese compound verbs and Chinese learners of Japanese find difficulty in atelic inchoative/durative V2 in Japanese like “-kakeru” (start to ˆ), “-tsuzukeru” (continue to ˆ). We exemplify these phenomena by offering misused examples in our TUFs learners' corpora of Japanese/Chinese.

Second, in terms of spatial viewpoint, we discuss that spatial unboundedness is prominent in Japanese lexicon compared with English and Chinese. This claim can explain why Japanese learners of English and Chinese find difficulty in “in/of”, “in/on/at” in English and “Noun+ 上 shang(on)” in Chinese. We exemplify these phenomena by offering misused examples in our TUFs Japanese learners' corpora of English/Chinese.

〈論文〉

# 言いさし文における日仏対照研究

—Parce que, puisque, から—

秋廣尚恵（東京外国語大学）

キーワード：従属節、独立した発話、発話内効力、間主観的モダリティー、談話の結束性

## 1 はじめに

フランス語においても、日本語においても、従属接続詞を伴う従属節の形式を取りながら、結びつくべき主節を持たず、一見すると統語的には不完全な文によって構成される発話が存在することは、よく知られている事実である。白川（2009）はこうした表現を網羅的に扱った研究であるが、その中でも、本稿では、とりわけ、「から」節を取り上げ、それに対応する理由を表すフランス語の従属節である *parce que* 節や *puisque* 節と対照させながら、それぞれの形式の間に見られる類似点と相違点を浮き彫りにしたいと思う。

## 2 従属節の独立節的用法：「言いさし」、*subordonnée orpheline* 「孤兒的従属節」

### 2.1 日本語の「言いさし」表現の類型

さて、日本語における「言いさし」には、白川（2009：7）が指摘するように、「言うべき『後件』を言わずに途中で言い残している」タイプ（例1）と「従属節だけで言いたいことを言い終わっている」タイプ（例2や例3）の2つに大別することができる。本稿では、とりわけ、後者の「言い終り」のタイプに焦点をしばって論じることにしたい。

白川（2009：9-11）によれば、この「言い終り」のタイプは、主節の再現可能性によって、さらに2つの下位分類に分けることが可能である。語用論的推論から、主節の再現が可能であるような「関係付け」のタイプ（例2）。そしてもう一つは、主節の再現が不可能かつ、不必要であるような「言い尽くし」のタイプ（例3）である。

#### 1) 正樹「今日泊って行けよ。」

慎平「そうしたいんだけどね（溜息をつく）。」

（鎌田敏夫『男たちによろしく』白川（2009：8））

#### 2) 耕作「美味いッ。」

ともみ「おいしいネ。」

耕作「今日はよく働いたから。」

ともみ「お腹空いていると何でもおいしい。」

耕作「いや、料理、上手だよ。」

ともみ「田舎料理は得意なんや。もともと百姓の娘やから。」

（市川森一『夢紀行』p.201 白川（2009:9-10））

#### 3) 大樹が出て行く

大樹「行ってきます」

正樹「うん」

慎平が自分の部屋から出てきて、

慎平「おやつ、アイスクリームが冷蔵庫に入っているからな」

大樹「うん、行ってきます」

（鎌田敏夫『男たちによろしく』p.69 白川（2009：10））

白川 (2009 : 11) には以下のように、言いさし表現の類型がまとめられている。

表 1 : 言いさしの類型 (白川 (2009:11)) (+ は当該の特徴を持つこと、- はその特徴を持たないことを示す)

	関係付け	言い尽くし	言い残し
主節の非存在	+	+	+
発話内容の完結性	+	+	-
関係付けられる事態の文脈上の存否	+	-	-

## 2.2 フランス語の「孤兒的従属節」の類型

一方、フランス語学においても、以上に述べたような「言いさし」のように、主節が文脈上に明確な言語形式として存在しないような従属節が存在し、subordonnée orpheline「孤兒的従属節」や désubordination「脱従属化」と呼ばれてきた。文法書などでも取り上げられ、一般によく知られている例としては、「Si 節 + 半過去形」を用いた誘いの表現や、Que ではじまる祈願文などがある。

4) Si on allait au cinéma ?

映画館に行きませんか？

5) Qu'il réussisse !

彼が成功しますように！

規範遵守の傾向が強いフランス語伝統文法の枠組みにおいては、こうした一部の例外を除いて、従属節の独立節的用法は非規範的で俗語的なものであると考えられてきたために、「孤兒的従属節」の問題への関心は、これまで、非常に薄かった。

しかしながら、実際の日常会話においては、従属節の独立節的用法は、それほど珍しいことではなく、頻繁に耳にすることが出来るものである。1970 年代以降、話し言葉コーパスに基づいた、文法の記述的研究が重視されるようになった背景もあって、ごく最近になって、「孤兒的従属節」の問題を扱った研究が見られるようになった。ここでは、まだまだ希少な研究の中でも、とりわけ、Debaisieux, Deulofeu et Martin (2008)、及び、Debaisieux (2013) を取り上げる。

Debaisieux は 1990 年代から一貫して、parce que をはじめとするいくつかの因果関係の従属節、また、条件節を導く接続詞 si の研究を多く行ってきた。その最近の研究である Debaisieux (2013) では従属節が取り得る様々なステータスを、①発話内効力を有するか否か、②韻律的特徴により独立した発話を構成するか否か、③インタラクションの冒頭に現れることが出来るか否か、という 3 つの基準に照らし合わせて、接続詞の導く節のタイプを以下の a から f の 6 つのタイプに分類している。簡潔に以下にまとめておく。

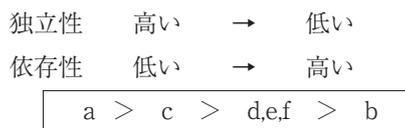
- a) Noyau「核」: 統語的制約<sup>1</sup>を受けず、完全に独立した談話の単位をなす要素。
- b) Régi intégré「統合される従属節」: 統語的制約を受け、主節に統合される要素。
- c) Noyau introduit「導入される核」: 統語的制約を受けず、発話内行為力を有するが、コミュニケーションの冒頭に独立して現れることが出来ず、前件を必要とする要素。
- d) Satellite「衛星的従属節」: 統語的制約を受けないが、単独では、発話内行為力を有する発話を構成できず、主節に衛星的要素として付属する要素。
- e) Epexégèse「分離された従属節」: 統語的制約を受けつつも、会話のターンや韻律的特徴(ポーズやイントネーション)によって、主節から切り離されて、独立した談話の単位を構成する要素。
- f) Noyau régi antéposé「前置される従属節」: 統語的制約を受けつつも、主節に対して前置することが出来る要素<sup>2</sup>。

表2：6つの従属節のタイポロジー<sup>3</sup> (+は当該の特徴を持つこと、-はその特徴を持たないことを示す)

6つのタイプ	a	b	c	d	e	f
内的構造に関する特徴						
統語的制約を受ける	-	+	-	+	+	+
発話のモードを有する <sup>4</sup>	+	-	+	-	+	+
発話内行為的なモダリティ <sup>5</sup> を有する。	+	-	+	-	-	-
外的構造に関する特徴						
範列化のテスト <sup>6</sup> を受け入れる		+	-	+/-	+	+
主節のモダリティの影響を受ける		+	-	-	-	-
主節に対し、前置することが出来る		-	-	+	-	+

以上の表の左欄の基準は、従属節の内部に現れる要素の特徴と、主節との関係に関する特徴を明らかにするための基準である<sup>7</sup>。従属節の持つ主節への統語的依存性から見た場合、aからfまでの6つのタイプを比較すると、以下のような順位をつけることが出来る。また、本研究のテーマである「孤兒的従属節」に関わるタイプに当てはまるのは、この6つの分類の中でも、とりわけ、aとcに限られることが指摘できる。

図1：主節への統語的依存性から見た従属節の順位



タイプaの「Noyau (核)」は、接続詞の導く要素の中でも最も独立性の高いものであり、先に挙げた①から③の3つの基準を全て満たす。例えば、先に挙げた例4や例5がこれに当たる。いずれの例も、韻律的特徴から一つの談話を構成する基本単位としての独立した発話をなす。また、例4は「誘い」という間主観的モダリティを伴う発話行為をなし、例5は、「祈願」という発話行為をなしているといえる。また、なんの前置きもなく、独立した発話として、インタラクションの冒頭に現れることが出来る。このような例は、先に挙げた日本語の言いさし表現の「言い尽くし」に類似した表現であると言える。

またタイプcの「Noyau introduit (導入される核)」は、「Noyau (核)」と同様に、韻律的に発話としての独立性が見られ、かつ発話内効力も有する点で、統語的構成要素としての「節」の単位をなすというよりは、談話的構成要素としての「発話」の単位をなすと考えられる。しかし、「Noyau (核)」とは異なり、インタラクションの冒頭に、単独で現れることが出来ず、必ず何らかの前件<sup>8</sup>との関わりを必要とするものである。例えば、

6) Viens vite! Parce qu'on est en retard.  
 早く来なさい！ 遅れているんだから。

では、前件 Viens vite! 「早く来なさい！」に、Parce qu'on est en retard. 「遅れているんだから」が続いている。この parce que が導く発話は、韻律的に独立した発話であり、Viens vite ! という「命令」を発したことに対する「正当化」という発話行為を行っているものである。しかし、あくまで、インタラクションの冒頭に現れる Viens vite ! に連結するものであり、この前件なしには、現れることが難しい表現である。

7) ?Parce qu'on est en retard.  
 遅れているんだから。

また、前件は必ずしも明確に言語化されていなくてもよい。以下がその例である。

8) (A と B はもうすぐ定年退職を迎える。定年になったら、日本人の友達 C に会いに行きたい。)

A : quand on sera à la retraite on ira le voir au Japon

C : pas de problème hein vous nous

A : *parce que* toi tu X<sup>9</sup> tu as soixante toi

B : Eh oui.

(TUFS フランス語話し言葉コーパス)

A : 定年になったら、彼に会いに日本へ行こう。

C : 問題ないですよ。あなたたちは、私たちに・・・

A : 君は 60 歳だったよね。

B : ああ、そうだよ。

Parce que toi tu X tu as soixante toi 「君は 60 歳だったよね。」で *parce que* によって導入される発話は、B の年齢を確認する発話行為を行っていると考えられることができる。また、明確に言語化はされていないものの、文脈から、その前件は、C'est bientôt la retraite 「もうすぐ定年だ。」という内容であると解釈される。ちなみに、このような解釈を可能にする背景には、フランスでは「63 歳から定年」という社会文化的な知識が A と B の間に共有されている事実も無視することが出来ないだろう。このように、語用論的推論によって解釈される内容を、Debaisieux, Deulofeu et Martin (2008) は、「コミュニケーション単位 (unité communicative)」をなす「談話的記憶 (mémoire discursive)」と名づけ、文脈の中で明示的に言語化されたものであれ、あるいは、含意的なものであれ、談話を構成する重要な単位をなしていると考えている。

表 3: フランス語の孤兒的従属節の類型

	Noyau (核)	Noyau introduit (導入された核)
①韻律的特徴により独立した発話を構成する	可能	可能
②発話内効力を有する	可能	可能
③インターラクションの冒頭に現れることが出来る	可能	不可能。前件を必要とする

日本語の言いさし表現と、フランス語の孤兒的従属節の現象は、もちろんそれぞれ個々の言語に特有なものであり、必ずしも同じように扱うことが出来るわけではない。談話レベルの議論に伴う必然的な問題ではあるのだが、とりわけ、発話の独立性の定義や、文脈の中で明示的に言語化されていない前件をどう扱うかという点においては、それぞれの研究者の理論的枠組みに依拠することが多く、意見の一致は見られない。実際、白川 (2009) と Debaisieux (2013) の間にも、多くの分析の違いが存在するように思われる<sup>10</sup>。

しかし、具体例の検討において、対照可能な表現を比べることによって、以下のように、日本語の言いさし表現の 2 つのタイプ (「関係付け」と「言い尽くし」と、フランス語の孤兒的従属節の 2 つのタイプ (「Noyau introduit 導入される核」と「Noyau 核」) を大まかに対応させて考えることは可能であろう。

表 4: 日本語の言いさし表現とフランス語の孤兒的従属節の対応関係

(日本語)	(フランス語)
「関係付け」の言いさし表現	Noyau introduit 導入される核タイプ
「言い尽くし」の言いさし表現	Noyau 核タイプ

### 3 言いさし／孤兒的従属節における *parce que*, *puisque*, 「から」のそれぞれの特徴

#### 3.1. *parce que* について

秋廣 (2016 年出版予定) で行った、インフォーマルな会話コーパスに現れた *parce que* の 2050 例の調査でも、また、Debaisieux (2013) において行われたフランス語話し言葉・書き言葉のサンプルコーパスに現れた *parce que* の 2230 例の調査でも、*parce que* が、インタラクションの冒頭に独立した単位である「Noyau (核)」として現れる例を、実際には、一つも見つけることが出来なかった。

このことから、*parce que* が談話の中では、必ず、何等かの前件に関係付けられて現れてくる「Noyau Introduit (導入される核)」として機能していることが分かる。その際、前件は、先行文脈の中で明確に言語化されたものである場合もあれば、文脈から語用論的推論によって解釈される談話的記憶である場合もある。後者の場合の例が先にあげた 8 であるが、さらに以下の例を挙げよう。

9) (朝の授業は授業の学生数がしばしば多すぎることがある。)

BM<sup>15</sup>: Ça a été bien. (Il) y avait beaucoup moins de monde que ce matin.

LF6 : Ah ouais ?

BM6 : Franchement, (il) y avait vachement moins de monde.

LF7 : *Parce que* quand je suis venue t(out) à l'heure, eee,

BM7 : [aspiration la bouche arrondie]

LF8 : Woooooh !

BM8 : C'était, c'était le grand rush ! C'était le stress !

(TUFS フランス語話し言葉コーパス)

BM5 : よかったよ。今朝よりはずっと人数が少なかった。

LF6 : ああ、ホントに？

BM6 : 正直言うと、随分人数が少なかった。

LF7 : だって、さっき私が授業に来たときにはねえ、

BM7 : (ため息)

LF8 : わー！

BM8 : 相当なラッシュ。ストレスだったね！

例 9 では、前述の (Il) y avait beaucoup moins de monde que ce matin 「今朝よりもずっと人数が少なかった」に *parce que* が導く発話 *Parce que* quand je suis venue (tout) à l'heure, eee 「だって、さっき私が授業に来たときにはねえ」は関連付けられている。今朝よりも人数が少なかったと判断した根拠を述べるために、LF7 は、さっきは授業にいったときの状況について、新たな情報の導入を *parce que* を用いつつ、切り出しているのである。実際には、LF7 の発話は、BM7 のため息で中断され、それに続く、LF8 の Woooooh ! 「わー！」という感嘆表現、及び、それを受けた BM8 の補足的発話 C'était le grand rush ! C'était le stress ! 「相当なラッシュ。ストレスだったね！」というインタラクションによって、「今朝、とても人数が多かった」ことの表現が完結される。このように、前件との関連付けながら、新しい情報を談話内に導入したり、発話を切り出したりする *parce que* の機能は、非常に頻繁に、とりわけインフォーマルな話し言葉の中で観察される<sup>12</sup>。以下もまた、その機能を果す *parce que* が多用されている会話の一部である。

10) (これから大学に掲示されている期末試験の点数を見に行かなくてはならない。)

MW<sup>1359</sup> : Alors enfin bon, ouais. Il faudrait qu'on y passe maintenant.

CD60 : *Parce qu'*après il faut que je passe à super U. *Parce que* maintenant j'ai découvert où il se trouvait. Je serais très contente d'y aller, à Super U.

MW60 : Ah oui ! Tu dois aller faire des courses aujourd'hui ?

CD61 : Oui enfin deux petits trucs quoi *parce que* Aurore revient en fait ce soir, et elle prend le train de Lyon, elle revient donc jusqu'à Aix-en-Provence et elle arrive à Aix-en-Provence à 20h40.

MW61 : D'accord. *Parce que* moi, j'y vais avec une amie, faire des courses à Géant tout à l'heure. Si t'as envie.

(TUFs フランス語話し言葉コーパス)

MW59 : それじゃ、結局、うん。(点数を見に) 今すぐ、行ったほうがいいね。

CD60 : (そうしよう。) だって、私は、その後で私はスーパー U に行かなくちゃいけないからね。スーパー U が、どこにあるかやと分かったから。スーパー U に行けるのはとてもうれしいわ。

MW60 : ああ、そう！あなた今日、買い物に行かなくちゃいけないの？

CD61 : そう、ちょっとしたものを少し買いにね。というのも、オロールが実は今晚帰ってくるの。リヨンから電車に乗って、エクスまで帰ってくるんだけど。エクスには 20 時 40 分につくかな。

MW61 : 分かった。私、友達と後でジェオンに買い物に行くから。もし、行きたいんなら。

この例の中に現れる *parce que* の用法を見ると、いわゆる論理意味的な因果関係を明示する機能を果たすものではなく、先行する発話を「帰結」とする「前提条件」や、先行する「主題」についての「説明」となるような新情報を次々に導入しながら、談話を展開していく機能を果たしていることが分かる。

この例の冒頭の *Il faudrait qu'on y passe maintenant* 「今すぐ、大学に掲示されている点数を見に行かなくてはならない」という MW59 の発話に CD60 は同調しつつ、その根拠として、自分が、*Parce qu'après il faut que je passe à super U* 「その後で、スーパー U へ行かなくてはならないから」という情報を導入している。ここで興味深いのは、CD60 の「同調」自体は、全く言語化されてはいないということである。*Parce que* が導く発話が表す間接的発話行為として、「CD の MW への同調」が解釈されるのである。また、ネイティブによれば、この文脈において、*Parce que* が導く発話を「反対理由」(「スーパー U に行かなくてはいけないのでテストの点を見には行かない」) としては解釈できないという。後者の解釈を導くには、まず、「反対の意」を表明する言語表現が前件として明示されていなくてはならない (*Non, je ne peux pas, parce que... いや、無理だな、だって...*)。

さらに、後続する文脈で、CD60 は「スーパー U」を主題とする情報補足 (*Parce que maintenant j'ai découvert où il se trouvait* 「やっどこにあるか分かった」) を導入しつつ、談話を展開している。そして、*Tu dois aller faire des courses aujourd'hui ?* 「今日、買い物に行かなくちゃいけないの？」という MW60 の問いかけに対しては、*parce qu'Aurore revient en fait ce soir* 「オロールが夜に帰ってくるから (今のうちに必要なものを幾つか買いに行かなくてはいけない。)」と「買い物」の理由を説明する。

CD60 は、続けてオロールの細かい旅程について話を続けていくのだが、それをさえぎるかのように、MW61 は、先に MW60 で述べた「買い物に行くのか」という自らが発した問いかけについて、その根拠を表す *parce que* を関係付けつつ、自分は友達と巨大スーパーであるジェオンに行く予定あることを告げ、一緒に行かないかと誘っている。ネイティブによれば、MW61 の *parce que* を削除してしまうと、発話のニュアンスが変わるという。もし *parce que* を削除して *Moi, j'y vais avec une amie* 「私は友達とジェオンに行く」と述べた場合には、積極的で協調的な「誘い」のニュアンスが消えてしまうという。むしろ、「あなたはスーパー U へ行くのね。私たちはジェオンに行くわよ。一緒に行きたかったら、連れて行ってやってもいいけどね」といった冷たい印象を与えてしまうという。

例 10 において、*parce que* が導く発話が遂行する「同調」、「情報補足」、「積極的な勧誘」といった発話内行為は、本来 *parce que* に特化した機能として存在しているわけではないように思われる。Debaisieux (2013) によれば、*parce que* の本来の意味的価値は、前置詞「*par* (経由)」に由来するものであるという。「S1 *parce que* S2」というとき、S1 は、S2 の成立を前提としている。」と Debaisieux (2013 :229) と述べている。

*Parce que* が示すのは、前件を成り立たせるための、様々な前提や説明を関係付ける (すなわち「経由させる」) 機能なのであって、その本来的な価値が、それぞれの文脈や状況に応じ「同調」、「情報補足」、「勧誘」といった様々

な発話内的行為として解釈されるのであろう。

### 3.2. puisque について

次に、puisque の孤児的従属節についてである。秋廣(2014)の調査で TUF5 フランス語話し言葉コーパス中に見つかった puisque については、「Noyau (核)」の例は皆無であり、全て「Noyau introduit (導入される核)」の例ばかりであった。ただし、Debaisieux(2013)でも指摘されているように、puisque には、「Noyau (核)」の例は存在する。しかも、それらの例は、例外的で奇異な例ではなく、ごく普通に耳にする例なのである<sup>14</sup>。以下は、インターネットで収集した puisque の「Noyau (核)」タイプの例である。そのいずれもが、「je vous dis que (私はあなたに que 以下のことを言う)」という「断定」の発話内行為力を伴った形式や、さらに文頭に、Mais puisque je vous dis que といった、強意の mais を伴う形式であったことが興味深い。インターネットでの例は全て書き言葉の例であるが、いずれも感嘆符 (!) を伴う例であった。ネイティブによると、これらの例で現れる puisque を parce que に変えることは不可能である。

11) Puisque je vous dis que je sais tout de vous !

私は あなたのことは全部知っていますから !

(インターネットの例)

12) (怪談集の宣伝文句)

Mais puisque je vous dis que ça fait peur !

怖いですから !

(インターネットの例)

Ducro (1983 : 179) でも指摘されているように、規範的用法において、puisque は、従属節として主節とともに1つの発話を構成する。その用法において、puisque は、既に前提となる理由を繰り返す、もしくは、既にどこかで述べられた発話を引用したり、思い出させたりする場合にもっぱら用いられると言われている。以下に例を挙げる。

13) Il va faire beau. Alors sortons puisqu'il va faire beau.

天気がよくなるだろう。では、出かけよう。天気が良くなるんだから。

Ducro (1983) では、このような puisque の機能を独自の「ポリフォニー理論」によって説明する。「ポリフォニー」では、発話者が幾つかの異なったレベルのステータスを重ねて持つことを表す。そのために、聞き手は、2つの異なる「声」を聞くことになる。Ducro (1983) によれば、①何らかの発話行為を積極的に自らの責任において行いつつ発話する発話者と②そのような責任を全く引き受けず、他人が発話した内容、あるいは自分が以前に発話した内容を引用するだけの発話者の2つがあるという。Puisque で導かれる発話は、発話者が文脈上既に発した発話をただ引用しているだけ、あるいは繰り返しているだけであり、発話者は、ここで「断定」の発話行為を自らの責任のもとで遂行するものではないと Ducro (1983) は指摘する。したがって、本来は、puisque は、「je vous dis que… (私はあなたに言う)」といった「断定」の発話行為の遂行を示す表現とは、相容れないはずなのである。

しかしながら、Ducro (1983) の記述は、規範文法的な用法を観察した結果であり、インフォーマルな会話に現れる多様な例に関しては、必ずしもその観察を当てはめることが出来ない。コーパスを見ると、puisque je vous dis que のほかにも、puisque je vous avoue que や puisque je crois que などの例は頻繁に観察される。

さて、ネイティブによれば、11 や 12 の例では、puisque は、因果関係の接続詞としては機能しておらず、むしろ、インタラクションの冒頭で、発話の切り出しをしつつ、その発話を強調し、共発話者に対し、何らかの「働きかけ(注意の喚起など)」を行っているような印象を受けるといふ。

これらの例では、前件が欠落しているが、その欠落した前件こそが、共発話者への「働きかけ」であると解釈される。その解釈は、当然のことながら、発話状況によって変わってくる。例えば、11 では、「私はあなたのことは全

部知っていますからね」は共発話者の注意を喚起し、「うそをついても無駄だ。」あるいは「説明する必要はない。」等々、相手への何らかの働きかけを行っているものとして解釈される。また、12では、「怖いですからね！」は共発話者に対して注意を喚起し、怪談集の「怖さ」を強調するために、「閲覧注意！」といったような指示を出しているものとして解釈をすることができる。

この点において、*puisque* は、以下に述べる「言い尽くし」の「から」の用法に非常に近い機能を果たしているように思われる。欠落する前件が、つねに共発話者への何等かの働きかけとして解釈をされるような、11や12において、*puisque* は、談話の結束性を担うマーカーというよりは、間主観的なモダリティを担うマーカーとして機能している。そのことは、*puisque* が導く発話によって、インタラクションを完結することが可能であるということと強く関わっていると考えられる。さて、このような *puisque* の間主観的モダリティへの強い傾向性は、実は言いさし表現にのみ現れるものではなく、主節を伴う表現の中にも、同様に共通して、見られることが指摘されている。

Groupe λ -I. (1975) は、*parce que* と *puisque* の違いを、結び付ける要素の持つステータスの違いから説明しようとしている。*Parce que* の用法の1つ（主節と従属節の間にポーズを置かず、一続きに発話する用法）には、主節に統合されるいわゆる従属節としての命題内容節を導き、事実に基づいた客観的理由を表す用法がある。しかし、*puisque* にはそうした用法はなく、言いさし表現であろうとなかろうと、常に独立した発話行為に結びつき、その発話行為に対する根拠となる発話を導く機能があるとされる。また、Ducro (1986) では *puisque* が持つ語彙意味的な特性として、「帰結を共話者に強制的に認めさせるような前提を提示する」特性があると述べ、その意味特性を「強制力 (*coup de force*)」という言葉で表している。例えば、一見同じように見えるが、13と14aと14bは異なった意味を伝えている。

13) Il était très malade depuis le matin : Il est parti tôt, puisqu'il était malade.

彼は朝から体調が悪かったんだよ。彼は早く帰ったよ。(と判断されるのは) 体調が悪かったんだから。

14 a) Il est parti tôt parce qu'il était malade.

彼は体調が悪かったので早く帰った。

14 b) Il est parti tôt, parce qu'il était malade.

彼は早く帰ったよ。(と判断されるのは) 体調が悪かったから。

13の *puisque* は、その前に行われた断定の発話行為そのものに対する根拠として、「彼が病気であった」ことを、繰り返し談話の中に導入する機能を果たす。談話の中で既に言及された内容を再導入するということは、ある意味「分かり切った内容」を提示することによって、共話者に対して、前件の発話の妥当性を認めさせるという「強制力」すなわち、共話者に対する働きかけを持つ。

14aの主節と従属節の間にポーズ、もしくは書記上のカンマが置かれず、一続きの発話として機能する用法において、*parce que* は、早退したという事実を引き起こした直接の理由が、体調不良という事実であることを表している。ここで、*parce que* は命題内容が表す事実を客観的な事実の因果関係に結び付けている。

しかし、14bのように、*parce que* の前に、ポーズ、あるいは書記上ではカンマなどの区切りがある場合には、*parce que* は、2つの独立した発話行為を結びつけるマーカーとして機能している。つまり、ここでは、「彼が早く帰ったよ」という断定の発話行為の根拠を示すために、「体調が悪かった」という断定を行っているのである。14bのような *parce que* は、改まった話し言葉、もしくは、書き言葉では、*car* として表されることが多い。既に明らかになったことを繰り返している13に対し、14bは談話の中で新たな発話の断定を行っている点で異なる。ただし、この断定の発話行為は、あくまで情報を補足するために機能しているのであって、13の *puisque* に見られるような「強制力」を持つものではない。

13に見られる *puisque* の機能とは、既に明らかなことを正当な根拠として挙げることによって、前件に現れる発話行為を認めさせようと、共話者に働きかける機能である。因果関係を表し、談話の結束性を担う機能を果たしつつ

も、間主観的なモダリティ<sup>15</sup>を積極的に表す機能をもつマーカであると考えることが出来る。

既に文脈の中で発せられた発話を繰り返すのではなく、発話者自らが、新たな断定の発話行為を行っている11や12は、一見すると、13のような *puisque* の基本的な用法とは矛盾するように見える。しかし、共話者への働きかけを含意する傾向を強く示すという点においては、実は *puisque* がそもそも持っている間主観的なモダリティを示す機能に根差しているのではないかと考えられる。

### 3.3. 言い尽くしの「から」について

最後に、「から」であるが、「から」が「関係付け」だけではなく、「言い尽くし」の表現を持つことは、よく知られている事実である。白川(2009)に挙げられる例がそれにあたる。

15) ちょっと、煙草買うてくるから。

(鎌田敏夫『男女7人秋物語』117 白川2008:59)

16) ああ、今度の日曜、一日ほくいないからね。

(山田太一『ふぞろいの林檎たち』44 白川2008:59)

このような例は「終助詞的」用法とも呼ばれている<sup>16</sup>。白川(2009)では、その機能として、①「聞き手に条件を提示するもの(条件提示)」、②「聞き手に前提情報を与えるもの(お膳立て)」、③「聞き手に予定された筋書きを提示するもの(段取り)」を挙げている。いずれの場合についても、「から」は発話者が共発話者に対して何らかの働きかけ(勧誘、命令、禁止、依頼、など)を行うという間主観的なモダリティを表現していることが分かる。

また、「から」の「終助詞的」用法に関して、前田(2009:143)では、「話者から聞き手への何らかの情報の告知であり、(典型的には話者の意志の告知)、話し手の意志的行為の実行や新情報の伝達が、聞き手にとって何らかの影響を与えるような場合に用いられる」と述べている。

これらの定義を見ると、「から」の終助詞的用法は、先に挙げた *puisque* の11や12の例に非常に類似したものであると考えることができる。

さて、*parce que*, *puisque*, 「から」について、どのような言いさし表現、孤兒的従属節の表現を取るかという点について、以下の表にまとめることが出来る。

表5: *Parce que*, *puisque*, 「から」の比較

	<i>Parce que</i>	<i>Puisque</i>	から
関係付け (Noyau Introduit)	可能	可能	可能
言い尽くし (Noyau)	不可能	可能	可能

## 4. おわりに 談話標識としての、*parce que*, *puisque*, 「から」

談話標識となる語は、接続詞、前置詞、副詞など、様々な品詞に属する語があるが、多くの場合、本来の語彙的特徴を失いつつ、談話標識として、文法化されたものが多いことは、よく知られている事実である。談話標識については、様々な定義、議論があり、いまだに完全なる意見の一致は見られないものの、大まかに分類すると、①テキストの結束性を取り持つ機能、②発話者の主観的なモダリティを表す機能、③発話者と共話者の間主観的なモダリティを表す機能の、3つのタイプがあると言われている<sup>17</sup>。

この観点から見ると、「Noyau introduit 導入された核」を導く *parce que* は、常に前件への関係付けを行い、談話を構成する単位としての「発話」を前件との関係に位置づけながら、談話を展開していく役割を果たしていると言える。また既に、多くの先行研究<sup>18</sup>でも明らかされているように、*parce que* の取り持つ意味関係は、単なる事実の因果関係に留まらず、実に多様な意味に広がる傾向がある。話し言葉における *parce que* の頻度数は、他の接続詞

に比べ、圧倒的に高い (Debaisieux 2013 :24)。そのことは、parce que が、論理意味論的な観点からがっちりと捉えられた「因果関係」から、ゆるやかな「前提・帰結関係」に至るまで、実に様々な意味関係を取り結ぶ結束性のマーカーとして、多用されているということと無関係ではないだろう。

一方、「Noyau 核」を導入する puisque や、言い尽くし表現の「から」は、parce que とは異なり、前件の部分が、欠落した完全なる独立文として機能している例が観察される。欠落した前件は、「後件が関わり、談話を進展させている起点となる単位」としてではなく、puisque や「から」が導入する発話によって喚起され、促される「共発話者への様々な働きかけ」として解釈される。Puisque や「から」の完全文の例では、連結の機能は背景に退き、むしろ発話者のモダリティの表現機能が前面に現れているといつてよいだろう。

統語的レベルにおいて、接続詞は、複数の節や文を結びつける連結辞としての役割を担う。しかし、その談話レベルにおける機能は、接続詞が関係付ける要素のステータス（発話・発話行為・談話的記憶や発話状況など）や、その接続詞が談話全体において、どのような標識としてその役割を果たしているのか（結束性やモダリティの標識）に応じて様々に変わる。その一端を、parce que, puisque, 「から」の言いさし的な表現において観察した。

今回は紙面の都合上、完全文になる可能性を持つか否かという観点から、3つのマーカーの対比を行った。「発話」の独立性という観点で見て、完全文として機能するのではなく、文脈に現れる何らかの要素を前件としてそれに関係付ける機能を果す傾向がある parce que に対し、完全文としての用法を持つ puisque, 「から」との違いを際立たせて、指摘した。

しかしながら、puisque や「から」にも、parce que 同様、「関係付け」の用法が存在するし、談話の結束性を担うマーカーとしても重要な機能を果たしている。また、parce que にも間主観的モダリティを示している例は数多く観察される。したがって、それぞれのマーカーの「多機能性」が大きな問題となることは明らかである。3つのマーカーの用法をそれぞれ、全体的に、そして、詳細に記述した上で、俯瞰的な展望のもと、再度、対照研究を行う必要があるだろう。この点に関しては、今後の研究課題としたい。

## 参考文献

- 秋廣尚恵 (2013) 「Parce que の用法をめぐって先行研究のまとめと今後の課題」『ふらんぼー 39』東京外国語大学 フランス語研究室 66-88.
- 秋廣尚恵 (2014) 「話し言葉に現れる非従属的な puisque の用法について」『ふらんぼー 40』東京外国語大学 フランス語研究室 76-101.
- 秋廣尚恵 (2016 出版予定) 「インフォーマルな会話における parce que の用法において」東郷雄二・春木仁孝編 『最前線のフランス語 4』ひつじ書房
- 白川博之 (2009) 『「言いさし文」の研究』くろしお出版
- 前田直子 (2009) 『日本語の複文—条件文と原因・理由文の記述的研究—』くろしお出版

Debaisieux, Jeanne-Marie. (1994) *Fonctionnement de parce que en français parlé, Thèse de doctorat en sciences du langage*. Université de Nancy 2.

Debaisieux, Jeanne-Marie. (2004) Les conjonctions de subordination : mots de grammaire ou mots de discours, le cas de parce que, *Revue de sémantique et pragmatique* 15/16 : 51-67. Presse Universitaire d'Orléans.

Debaisieux, Jeanne-Marie. (2006). La distinction entre dépendance grammaticale et dépendance macrosyntaxique comme moyen de résoudre les paradoxes de la subordination, *Faits de Langue* 28 : 119-132. Paris : Ophrys.

Debaisieux, Jeanne-Marie. (eds.) (2013). *Analyses linguistiques sur corpus, subordination en français*, Paris : Lavoisier.

Debaisieux, Jeanne-Marie, Deulofeu Henri-Jose et Martin, Philippe. (2008). Pour une syntaxe sans ellipse, Jean Christophe Pitavy et al. (eds.) *Ellipse et effacement*, Saint-Etienne : Publications de l'Université de Saint-Etienne. 225-

- Degand, Liesbeth. (2014). So very fast then, discourse markers at left and right periphery in spoken French, in Beeching, K. and Ulrich Detges, *Discourse Functions at the Left and Right Periphery: Crosslinguistic Investigations of Language Use and Language Change.*, Brill, Leiden 151-178.
- Ducrot, Oswald. (1983). Puisque : essai de description polyphonique, *Revue Romane numéro spécial 24* :166-185. Etudes Romanes de l'Université de Copenhague.
- Groupe λ -I. (1975). Car, parce que, puisque, *Revue Romaine 10* :248-280. Etudes Romanes de l'Université de Copenhague.
- Moeschler, Jacques. (1986) Connecteurs pragmatiques, lois de discours et stratégies interprétatives : parce que et la justification interprétative, *Cahiers de Linguistique 7* :149-167. Université de Genève.
- Moeschler, Jacques. (1987) Trois emplois de parce que en conversation, *Cahiers de linguistique française 8* : 97-110. Université de Genève.
- Moeschler, Jacques. (2003) L'expression de la causalité en français, *Cahiers de Linguistique française 25* : 11-42. Université de Genève.
- Moeschler, Jacques. (2009) Causalité et argumentation : l'exemple de parce que, *Nouveaux Cahiers de linguistique française 29* : 97-110. Université de Genève.
- Moeschler, Jacques. (2011) Causalité, chaînes causales et argumentation, Gill Corminboef and al. (dir) *Du système linguistique aux actions langagères, Mélanges en l'honneur d'Alain Berrendonner.* pp. 339-355. Bruxelles : Duculot.
- Roig, Audrey and Dan Van Raemdonck. (eds.) (2014) *Les liaisons de prédications*, Langue Française 182. Paris : Larousse / Armand Colin.
- Sweetser, Eve E. (1990) *From etymology to pragmatics metaphorical and cultural aspects of semantic structure.* Cambridge : Cambridge University Press.
- Traugott, C. Elisabeth (2003) From subjectification to intersubjectification, in : Raymond Hickey (ed.) *Motives for Language Change*, Cambridge : Cambridge University Press : 124-139.

## 注

- 1 Debaisieux(2013) では、統語的制約の有無を見極めるための基準として、焦点化、代名詞化、副詞の前置など形式的なテストが適用可能であるかを挙げている。適用可能である場合には、その従属節は主節による統語制約の下に置かれていると判断される。
- 2 フランス語において、従属節の通常的位置は、主節の後である。従属節の前置の可能性には、その従属節の主節に対する統語的依存度、談話文法的依存度が関わっていると考えられる。
- 3 Debaisieux (2013 : 87) の表を基に6つのタイプを日本語で説明したもの
- 4 イントネーションやポーズにより示されるモードのこと(疑問、発話の区切りなど)。
- 5 発話媒介の動詞、あるいは、疑問形、命令形などの形態統語的なマーカーにより、示される断定、疑問、命令といった様々な発話内行為的なモダリティのこと。
- 6 従属節を他の従属節と等位接続することが出来るかどうかを見るテスト。このテストによって、従属節を他の要素と範列の関係におくことができるかどうかを検証する。
- 7 紙面の都合上、それぞれの基準についての説明をここでは省く。秋廣(2013 : 73 - 78)を参照のこと。
- 8 以降、「主節」と「前件」を以下のように使い分けることにする：主節とは統語レベルでの節同士の結びつきにおいて従属節が統語的に依存する要素であり、前件とはそれを超える談話レベルでの単位(発話、談話的記憶)同士の結びつきにおいて、接続詞が導く発話が談話文法的に依存する要素のことである。
- 9 Xは転写者が聞き取れなかった音声連続を表す。
- 10 Debaisieux (2013)の定義する Noyau は、厳密には、白川(2009)の「完全文」にのみ対応している。白川(2009 : 第2章)では、言語化されない前件に関わる用法も、「言い尽くし」の中に含まれている。
- 11 BMとLFはこの会話に参加する2人の発話者を示す。番号は、それぞれが発した会話を対話のターンごとに区切って番号を振ったものである。BF5はBFが発した5番目の会話を示す。
- 12 Debaisieux(2013 :24)によれば、フランス語サンプルコーパス(CRFP)において、従属節の中でも、最も頻度が高く出現したものが、parce que(1955例)である。ちなみに、第2位は条件節を導く si(990例)、そして時の副詞節を導く quand(952例)そして、puisque(334例)、対比を表す alors que(149例)であった。Parce queの突出した頻度数から、フランス語の談話における、parce queが果たす機能の多様性と重要性を見ることが出来る。
- 13 MWとCDはそれぞれ発話者を示し、番号はそれぞれの発話者が発した会話を対話のターンごとに区切って番号を振ったものである。MW59はMWが発した59番目の会話を示す。
- 14 コーパスには量的な限界があるために、直観的には、実際には存在すると考えられるような例が、なぜかコーパスには現れないということが、往々にして起こる。とりわけインフォーマルな会話では、語彙の出現や統語のタイプに偏りが見られてしまうということも1つの原因である。このような問題を解決するためには、出来るだけ偏りが無い良質なサンプルコーパスを大量に収集する必要があるだろう。

- 15 「間主観的なモダリティ」については、話し手が共話者に対するなんらかの働きかけを伴う態度の表明と広く定義しておく。
- 16 ここでの「から」を「ので」にすることは、筆者の直観からは難しいように思われる。「ので」には、一部の文体を除き(「ちょっと煙草買ってきますので」という丁寧な文体では終助詞化もあるかもしれない)「から」よりも終助詞化する可能性は低いように思われる。
- 17 Degand (2014: 151)
- 18 Debaisieux (1994, 2002, 2004, 2006, 2013), Moeschler (1986, 1987, 2003, 2009, 2011) などの研究を参照。

# Contrastive Study about “*iisashi*” in French and Japanese

—Focus on “*parce que*” , “*puisque*” and “*kara*” —

Hisae AKIHIRO (Tokyo University of Foreign Studies)

Keywords: Clause dependency, Independent speech, illocutionary force, Interpersonal modality, discursive coherence

Over the last decades, clause dependency has given rise to a wealth of studies in Japanese and French linguistics. Actually, we know very well that the dependent clause markers can, contradictorily, introduce independent sentences, and that they are used as discourse connectives which indicate pragmatic dependency among larger elements in discourse.

In this paper, we are interested in a usage of subordinate markers introducing independent sentences. In this usage, a subordinate clause is not directly related to any principal one. This phenomena is called “*iisashi*” in Japanese and “*subordonnée orpheline*” in French. Contrasting the French markers as *parce que*, *puisque* and the Japanese marker *kara* (japanese) observed in theses independent usages, we try to explain the differences and similarities between them.

Based on the studies of Shirakawa (2009) and Debaisieux (2013), we categorize two types of usage: the first type relates necessarily a sentence to a discursive element considered as premise, while the second one introduces a completely independent speech act which can appear to be an interaction.

*Parce que* works always as a marker of the first type. Even if the premise does not seem to exist explicitly in a linguistic form, we can always reconstruct it through a pragmatic inference. *Parce que* can mark various semantic relationships among the related elements (premise-conclusion, topic-comment), according to the types of these elements (sentence, speech act, speech situation and discursive memory). The main role of *parce que* seems to relate them and contribute to the organization of discourse coherence.

*Puisque* and *kara* function obviously as markers of the first type. However, it can also operate as a marker of the second type, what seems to be an important difference from *parce que*. In the usage, *puisque* and *kara* can accomplish independent speech acts oriented toward the listner. They contribute thus to a speaker/listner interaction and function as markers of interpersonal modalities.



# 言語要素（語・文法）のリンク教材に関する可能性： タイ語母語学習者への教材作成・活用を踏まえて

鈴木美加（東京外国語大学）

キーワード：言語要素リンク教材、コロケーション、教材開発

## 1. はじめに

本稿は、2012年度から2013年度のタイ語母語学習者を対象とする日本語教育に関する共同研究<sup>1</sup>の一環として行った日本語学習教材の開発及び活用に関する成果をまとめ、今回の実践を日本語教育研究に位置づけることを意図して記すものである。

まず、学習対象とする言語要素（語や文法）を共起しやすい言語要素と結びつけるための練習により、対象要素を適切に、速く処理して技能面で活用できるようにすることを目指した開発教材である「処理短」、「処理短II」の2種を簡単に紹介する。その際、タイ語母語話者の教材使用による教材評価と回答の傾向についても述べる。さらに、他の母語話者を対象とする教材の可能性についても検討することとする。

なお、本稿では、学習対象とする言語要素と関連する語や表現と結びつけるための教材を「言語要素リンク教材」と名づけ、以下で使用する。

## 2. 言語要素リンク教材：「処理短」

言語学習において、語や文法など言語要素の学習は必須であり、レベルに合った言語要素の学習及び技能への活用が求められる。鈴木（2002, 2006）は中級後半の学習対象語 338 語について、①対象語の意味を正しく理解し、対象語の理解や産出をするのに必要な時間を短縮化（自動化）<sup>2</sup>すること、②関連する語・表現と結びつける経験により、対象語の深い知識、関連言語要素とのリンクを作ること<sup>3</sup>、を目的として、言語要素リンク教材（「処理短」<sup>4</sup>）が開発され、その有用性が示された。

タイ国タマサート大学の「通訳入門」科目において、この教材が授業の一環として使用され、教材の有用性が検討された。教材を使用した後で、学習者は教材を高く評価し、9割以上の学習者が語が深くわかるようになった、文を早く読めるようになったと答えており、このような練習には効果があると感じていることが示された（鈴木・メーターピスィット 2014）。

また、学習者の解答データから、正答率が低かったものとして、語同士のコロケーション（例「人間性－豊かな」正答率 48%）だけでなく、「(家計を) 圧迫－する」(9%)、「(1960 年頃テレビが) 普及－した」(38%) のような動詞の自他およびヴォイス、「(生活) に－適応する」(39%) といった助詞＋動詞の組み合わせも見られ、文法的な結びつきについても確認、支援する必要が認められた。表 1 に正答率の低かった問題を示す。

表 1 正答率の低い言語要素リンク：文法知識活性化 (Grammatical association)

問題文	正答率	正答	誤答	旧能試 (級)
物価が上がり、一般家庭の家計を <u>圧迫</u> （している させている されている）。	9%	2	21	1
自然の少なくなってしまった今、人間はやっと自然の <u>貴重さ</u> に気がついたのだと（言えよう 言えまい 言えるか）。	33%	15	31	2
「学生のみなさんにお知らせします。8時に玄関（に を で） <u>集合</u> してください。」	35%	8	15	2
日本では、1960 年頃、一般家庭にテレビが <u>普及</u> （した させた された）。	38%	22	36	2
日本の生活（が に を） <u>適応</u> できるように、オリエンテーションを開いた。	39%	9	14	1
山本さんと下田さんは、 <u>共同</u> （で に と）研究を続けている。	39%	9	14	2

### 3. 言語要素リンク教材2：「処理短II」

上述した「処理短」に加え、「通訳入門」科目では、受講生が授業内で使用される言語要素を適切に、また関連語や表現と関連づけて使えるようにすることを意図して、テーラーメイド方式での言語要素リンク教材「処理短II」が作成され、使用された（鈴木・メーターピスィット 2014）。この教材は、授業活動に則して作成されたもので、受講生はゲストスピーカーの講演を聞いた後で日本語要旨を提出、教師の添削・再提出がなされ、並行して処理短II実施、その後で最終提出要旨の音声吹き込みを行うという一連の活動の一環として使用された。

提出された要旨文から、複数の学習者の要旨文に共通する語や文法の誤用の傾向が認められた。誤用をもとに、言語要素の意味及び用法を適切に理解し、関連語や表現と結びつける練習が全113問作成された。この練習教材を授業で使用したところ、学習者が各問題平均10～20秒で解答した。

教材作成の手順の第一に行ったこととして、以下、学習者の要旨に見られたテンス・アスペクトに関する誤用を示し、検討を加える。（テンス・アスペクトの誤用に筆者が下線をつけた。また、（ ）内に要旨作成者の意図した内容を参考として記す。）

#### ①結果の状態

・家はコンクリートじゃなく、木や竹から建てられたので、簡単に波にさらわれてしまいます。

#### ②V 場合／時

・バンコクで激しくて、急速な洪水が起きる場合のために、この避難場所はワンランというマーケットシリラード病院のそばに設立されました5000の難民は止まることができるとおもいます。（バンコクで急な激しい洪水が起こった場合に備え、ワンランというマーケットシリラード病院のそばに、この避難場所が設定され／作られ、5000人が避難できると思います。）

・「生存しなきゃならない」の作品は定められる26つの日用品を大洪水が起こっている時に使えるものに変える設計。この作品コンテストは仏暦2554年に行われた。その頃にはまだタイ大洪水が起こっていない。優勝作品はウタイターニー県の科学教師によって作られたもの。魅力的に目立つ作品ではなく、発明者が定められる26つの日用品を応用し、思いがけないほどのものを完全に考え出すことができた。（「生存しなきゃならない」というテーマでの作品は、決められた26の日用品を、大洪水が発生した時、どう活用できるかについての工夫（改造法）を示している。（以下略）

#### ③（間違う）+かもしれない

・もし地震があったら、高さ25メートルの水量が5時間でカーンチャナブリーに入って、高さ2メートルの水量が35時間でバンコクに着くという噂があります。これはインターネットの情報なので、間違うかもしれませんが、地震はいつ起こるのか、酷い状況になるのかはわからないので、ダムが崩壊することについて研究者の間にも注目しているようです。

タイ語母語話者による日本語のアスペクト表現については、②の「起きる場合」のような「変化動詞+場合／時」については、メーターピスィット他（2000）によると、タイ語の変化動詞は、変化が実現した状態が基本形で表されるとされ、その影響から誤用が生じたものと推測される。また、進行状態より結果の継続の用法のほうが習得が困難であることがパオサタポーン（2014）に示されているものの、まだ解明されるべき点が多く残されている。

上記①から③については、ほかの学習者の要旨にも、似た傾向が認められ、以下の練習を教材用に作成し、活動の内容、文脈に則して、テンス・アスペクトの確認ができるようにした。太字の箇所が該当する練習部分である。練習問題の後に続く[]内に、該当箇所の問題番号と正答率（%）を示した。

#### 【言語要素リンク教材の例】

①結果の状態

家は、木や竹（から で）（建てられる 建てられた 建てられている）ので、強い波で流されてしまいます。  
[U2-3、4%]

②V 場合／時

バンコクで（急速に 急で 急激で）激しい洪水が（起きる 起きた 起きている）時のために、この避難場所が（設立 設定 設置）されました。[U2-2、54%]

③（間違う）+かもしれない

これはインターネットの情報なので、（間違う 間違った 間違っている）かもしれませんが、地震はいつ起こるのか、ひどい状況になるのかはわからないので、ダムが崩壊する（こと か）について研究者の間（に で）も意見が異なるようです。[U3-9、46%]

本教材の使用の後、次の授業で正答の確認と対象要素に関する教師の説明がなされ、学習者が対象とした言語要素について適切な理解を促す機会が設けられた。教材への学習者による評価においては満足度が5段階評価で平均4.2であった。学習者のコメントとして「語彙力を高めるには、繰り返して学習することを習慣づけることが大切であることが分かった」「このような実践を通して、自分の実力を気づかせてもらえた」という意見があり、授業活動に則した言語要素リンク教材により、語彙等の知識を広げられることや学習者自身の言語要素の知識について自覚を高め、動機付けにも役立ったことが推察される。

#### 4. 言語要素リンク教材による学習

先の1及び2においては、言語要素リンク教材の実際の使用により認められた学習者の解答傾向や教材評価について示した。学習者の言語要素の知識を広げたり、深めたりするということに加え、本節では、学習者が抱える学習上の問題点への対応策の一つとして、このタイプの教材の可能性について考えてみたい。

ここで、言語要素リンク教材を、ほかの形式の問題と比較してみる。まず、以下のAとBの問題に答えていただきたい。解答選択までの視線の動きや、解答する際に頭の中で行っていることを意識してみしてほしい。

A

- 1) この携帯電話はボタンが押しにくいという（ ）を持つ利用者もいる。  
a) 関心    b) 不満    c) 目標    d) 我慢
- 2) セミナーに参加したい人は、（ ）に住所、氏名、希望日を書いてください。  
a) 証明書    b) 領収書    c) 申込書    d) 参考書

B

- 1) この携帯電話はボタンが押しにくいという不満を（する 持つ 取る）人もいる。
- 2) セミナーに参加したい人は、申込書に（氏名 料金 レポート）と希望日を書いて出してください。

Aに答える時には、（ ）とa)からd)の選択肢に注視が多くなされ、文中にどれが入るか、文の意味と、4つの選択肢の意味との適合度の確認がされたいだろうと思われる。Bの場合は、文全体を読みつつも、下線部の語と、選択肢の各語とのセットが適切かどうかを確認することに意識の比重が置かれたのではないだろうか。Aタイプは、選択肢の語が指す意味を知識として有しているかどうかを測るタイプの問題（国際交流基金2012）で、Bタイプは、下線部の語と適合する選択肢とをひとまとまりにするタイプの問題で筆者が作成した。本稿で示した言語要素リンク

教材は、Bタイプの教材である。この教材の各問題は、概ね比較的短い文で示されているが、

3) AさんはBさんのことを正しいと言った。私は、逆に、Bさんは(正しい 正しくない 間違いだ)と思う。

のように、「逆に」を確認するため、複数の下線部分をもとに、関連要素を結びつけるための練習もある。このような教材をだれでも東京外国語大学が開発したe-Learningシステム「JPLANG」<sup>5</sup>で使用することができ、主に中級～上級レベルの学習者を想定して開発された練習により、学習者自身が言語要素に関する知識の確認、関連言語要素の結びつけをすることができる。日本語学習では、中級終了までに六千語程度の語の知識が必要だとされる<sup>6</sup>(国際交流基金他 1994)が、実際の授業では各言語要素の学習に充てられる時間は非常に短いため、個々の学習者が自分で知識を効率的に伸ばせる教材は常に求められていると言える。

また、先の2で見たように、学習者の言語使用における誤用を踏まえ、より伝わりやすい産出ができるようにする支援教材も望まれる。2では、タイ母語話者の防災講義の日本語の要約文をもとにしたが、その他の言語を母語とする学習者に対する教材作成もできるだろう。

例えば、伊集院・高橋(2010)は、説明のモダリティとして、「のだ」の使用により、内容の背後の事情や論理的帰結、言い換え等が提示されるが、中国語母語学習者、韓国語母語学習者には使用が少なく、学習者には「のだ」の用法の習得が容易ではないことを指摘している<sup>7</sup>。その他にも、高(2015)は、韓国、台湾の上級学習者の作文データコーパス調査により、学習者は「と思う」を多用し、認識のモダリティの使用のバラエティが少ないことに言及している。

中～上級レベルでは、すでに学習した語や文法でも、多義語・表現の場合や、より複雑な文脈での文法使用など、理解や産出が難しい事態も生じる。その膨大さゆえ、個々の語や文法について、中級以降に系統的な指導は行われにくく、誤用の原因になることもよくある。2で示した言語要素リンク教材のタイプとして、一連のテキストを用いて練習をすることも可能である。以下の例を見ていただきたい。

4) 来日して23年ほどたつが、日本語でのコミュニケーションの「暗黙の了解」の部分にまだ悩まされている。実は、この「暗黙の了解」に初めて遭遇したのは、成田空港から大学の寮に着いたその晩だった。「日本の先生に」と思ってメキシコから持ってきたお土産を、間違って先生にではなく、料理や掃除のおばさんたちに(渡したい渡さなかった 渡してしまった) のだ。<sup>8</sup>

5) 終助詞「ヨ」と「ネ」の使用について、男性のみ、女性のみ、男女2人ずつのグループの自然な会話データの分析から、男女のグループの会話では男性は「ヨ」を、女性は「ネ」を多く使い、同性同士のグループの会話では、女性は「ヨ」を、男性は「ネ」を多く使っていたことがわかった。これは、相手が異性の場合、相手が性による典型的な言語使用を期待していると感じ、会話を進める(ためだ ことだ はずだ) と考えられる。…

上の4)は、個人的な経験を語る時によく使われる「のだ」であり、5)は現象の原因を推論、説明する際の「と考えられる」の文である。どちらも典型的と言える文脈を提示し、関連する言語要素をつなぐ練習として提示してみた。

中級あるいは上級で使用されるテキストでは、4)や5)の下線で示したような表現が使用されていることもよくあるだろう。授業で明示的に確認がなされる場合もあれば、そうでない場合もあると思われる。少々長くはなるが、上記のような文脈を提示しながら、関連する言語要素のリンクを作る練習があれば、授業時間を長く使うことなく、また学習者自らで学習を進め、理解・産出どちらの技能にも使える言語要素の知識を得ることができるであろう。

## 5. 今後の課題と可能性

本稿では、言語要素リンク教材について、主に2つのタイプの実践とその有用性について述べた上で、このような教材が、学習者の誤用あるいは非用が生じやすい項目を取り上げて教材を作成する可能性についても検討した。検討

において、中～上級のタイ語母語話者の学習者による教材の使用を踏まえ、言語要素リンク教材は、学習者に語や文法を適切に、また瞬時に使えるようにするための練習として、学習者から高い評価を受けていること、学習者が自分で進められる学習の1つとして活用ができることが示された。

最近のコーパス研究から、学習者の誤用や非用に関する情報も収集しやすくなり、学習者の言語要素に関する知識や産出の状況を踏まえ、よりニーズに合った教材作成が可能になっていると言える。今後、このような言語要素リンク教材の開発がさらに進められることが期待されよう。

## 参考文献

- アンドリュウ・バーク (2003) 「日本語に隠れているジェンダー・品詞の使用頻度の差－言語表現に見られるジェンダー：日本語の性差の視点から考える」『日本事情テキストバンク』(CD-ROM) 東京外国語大学留学生日本語教育センター
- 長谷川ニナ (2003) 「人は見かけによらない－日本人とスムーズなコミュニケーションを取るための秘訣」『日本事情テキストバンク』(CD-ROM) 東京外国語大学留学生日本語教育センター
- 伊集院郁子・高橋圭子 (2010) 「日本語の意見文に用いられる文末のモダリティー－日本・中国・韓国語母語話者の比較－」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』36、pp.13-27.
- 国際交流基金、日本国際教育支援協会 (2012) 『日本語能力試験 JLPT 公式問題集 N3』 凡人社
- 国際交流基金・(財)日本国際教育協会 (1994) 『日本語能力試験出題基準』凡人社
- 高恩淑 (2015) 「上級日本語学習者の意見文における『と思う』系および『と考える』系の使用傾向について：日本語母語話者との比較を通じて」『人文・自然研究』9、一橋大学大学教育研究開発センター、pp.67-83.
- タサニー・メーターピスイット、坂田睦深、アルニー・チュンシリウィロート (2000) 「タイ人日本語学習者のアスペクト表現」『日本語とアジア諸言の作文対訳コーパス：対照言語学・日本語教育への応用』、国立国語研究所、pp.81-94.
- 望月正道 (2010) 『技能別及び総合的英語能力を推定する語彙テストの開発：サイズ、構成、認知速度の融合』平成19-21年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書
- ドゥアンケーオ・パオサタポーン (2014) 「タイ人日本語学習者の『結果状態』の『テイル』の習得－『タイ語の影響』に着目して－」日本語・日本文化研究24、pp.59-68.
- Schmitt, N. (2010) *Researching Vocabulary: A Vocabulary Research Manual*. Palgrave and Macmillan
- 鈴木美加 (2002) 「読解における語彙の知識の自動化に向けた教材の作成－読解に利用できる知識を早く処理するために－」、『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』28、pp.133-138.
- 鈴木美加 (2006) 「言語要素をまとまりで処理する読解の基礎練習：語の核となる意味の理解と読解における自動化に向けて」、『東京外国語大学 留学生日本語教育センター論集』32、pp.109-122.
- 鈴木美加、タサニー・メーターピスイット (2014) 「中～上級専門日本語における語彙知識の精緻化を目指した練習の導入－タイ語母語話者を対象にした「通訳入門」科目の一環として－」『国際日本語教育部門3ヶ年プロジェクト成果報告論文集 日本語学習者の母語・地域性をふまえた日本語教育研究－国内外の日本語教育研究機関との協働的研究(2010-2012)』 pp.67-81. 東京外国語大学国際日本研究センター
- 卯城祐司 (2009) 『英語リーディングの科学－読めたつもりの謎を解く－』研究社
- 田野村忠温 (2010) 「日本語コーパスとコロケーション－辞書記述への応用の可能性－」『言語研究』138、pp.1-23.

## 注

- 1 本研究はタイ国タマサート大学タサニー・メーターピスイット氏と筆者が共同で行ったものである。
- 2 語に関する知識を技能に役立てる際、知識の「広さ」、「深さ」、「処理の円滑さ」が必要であるとされ(卯城2009、望月2010、Schmitt 2010等)ここで示した「自動化」はこのうち、「処理の円滑さ」にあたる。語の深い知識とは、語のネットワーク(つながり、コロケーション)や文法的働き、綴り、音声などに関する知識を有することを示す。
- 3 「関連言語要素とのリンク」は意味あるいは形式の上でのつながりを指し、「コロケーション」とほぼ同義である。ここでの「コロケーション」とは、「言語表現どうしの習慣的な共起関係全般」を指し、文法的要素のつながり(Colligation)(田野村2010)も含めることとする。

- 4 教材の概要については鈴木・メーターピスイット（2014）に詳しい。
- 5 URL: <<https://jplang.tufs.ac.jp/>>
- 6 古いデータとなったが、公表された日本語教育用語彙リストである『日本語能力試験出題基準』（国際交流基金・日本国際教育協会 1994）（p.52）の2級の語彙リストで示された「4833語を含む6000語とする」という記載による。
- 7 誤用や非用については、母語による特徴が見られる場合と、母語にかかわらず、学習者全般に見られる特徴がある場合とがあると考えられる。伊集院・高橋（2010）は中国語母語話者と韓国語母語話者に共通するモダリティ使用、中国語話者のみで見られるモダリティ使用の特徴について指摘している。
- 8 教材作成にあたり、4)では長谷川（2003）を、5)はバーク（2003）の内容をもとにした。

# **Perspectives on Vocabulary Elaboration Exercises in Materials Developed for and Implemented with Thai Students**

SUZUKI Mika(Tokyo University of Foreign Studies)

Keywords : vocabulary elaboration exercises, collocation, educational material development

This paper offers an overview of collaborative research on effective vocabulary/grammar learning materials development and implementation conducted between 2012 and 2013. It reports the distinctive characteristics of material that has helped learners become mindful of the usage of word/grammatical components and collocations in Japanese. Furthermore, this research attempts to identify and analyze relevant research accomplishments in the Japanese language education/research field.

This discussion includes materials offering learners the opportunity to correct their misunderstanding of the meaning and usage of vocabulary/grammar items in Japanese that differ in usage from the system used in their mother tongue. One example given here demonstrates how this material can offer Thai learners the feedback and support needed to acquire the ability to use the aspectual system in Japanese, which clearly differs from the Thai language.

Furthermore, the materials development described in this work may be desirable for Japanese language learners with other mother tongues to learn the linkages between meaning related words and/or expressions.



# アラビア語エジプト方言における詫び表現<sup>1</sup>の機能とストラテジー

谷口龍子（東京外国語大学）  
ハーネム・アフマド（カイロ大学）

【キーワード】 アラビア語エジプト方言 詫び表現 語用論的機能 感謝 使役

## 1. はじめに

本稿は、アラビア語エジプト方言（以下、アラビア語）における詫び表現の使い分け、語用論的機能、および詫びのストラテジーについて、概観するものである。

自分の行為が相手にとってマイナスとなった場合に詫びる行為は、おそらくほとんどの言語生活で行われることであろう。

従来、あいさつ表現の一つとして取り上げられてきた詫び表現は、発話行為（Searle (1969)）やポライトネス研究の枠組みにおいても欠かせないキーワードとなっている。英語、日本語、中国語などの言語では詫びに関してこれまで多くの研究が行われてきた。

詫び表現の形式についての研究から、詫びのストラテジー、詫びられる側も含めた談話研究へと発展を続けている。さらに、詫び表現の詫び以外の語用論的機能については、中田（1989）、三宅（1994）等、談話全体の構成における詫び表現の役割は大浜（1997）等で指摘されている。

一方、アラビア語の詫び表現については、2000年以降、談話完成タスクによるデータにより、表現の使い分けについての分析が始まっている。しかしながらアラビア語では実際の発話データにもとづく談話の分析はほとんど行われていない。そこで、まずはアラビア語の話し言葉における詫びという言語行為とその表現の周辺について体系的に探る必要があると思われる。

本稿では、アラビア語エジプト方言の詫び表現が使われる談話をテレビドラマや映画の発話から収集し、詫びのストラテジーや詫び表現語用論的機能を中心に分析を行う。分析に際しては詫び表現や談話に関する先行研究が多い日本語や中国語と比較しつつ検証した。

## 2. 先行研究の概観

ここでは、これまでの日本語の詫び表現に関する研究を概観する。

日本語の詫びや感謝の定型表現の種類を分類した初期のものとして、佐久間（1983）、奥津・沼田（1985）、金田一（1987）、森山（1999）などが挙げられる。金田一（1987）、森山（1999）では、詫びと感謝を相対する行為として捉え、いずれも人間関係を修復するための方略として位置づけている。

続いて、1980年代後半から1990年代前半にかけてSearle（1969）の発話行為理論をもとに英語と他の言語との対照研究が行われるようになった。山梨（1986）は、詫びと感謝は、問題の行為の主体が話し手が聞き手か、また、その行為に対し話し手がどのような心的態度を抱き、それをどのように表出するかという点で対照的な行為であると指摘している。また、中田（1989）は、自分の行為に対する陳謝と相手の行為に対する感謝とを明確に二分している英語に比べ、日本語では相手が行った自分にとってのプラス行為を相手にとってのマイナス行為として捉えるという見解を示している。Coulmas（1981:80）では、“indebtedness”（恩義）の有り無しにより詫び（apology）あるいは感謝（thanks）行為が行われるとしている。その後、Brown and Levinson（1987）において、詫び行為（apologize）がネガティブ・ポライトネスとして取り上げられている。詫び表現や感謝表現の種類と、詫びや感謝が行われる場面やその要因を解明しようとする量的データに基づいた実証的研究が行われるようになったのは、1990年代以降である。

1990年以降は、特に質問紙調査やシナリオデータなどの量的データに基づく実証的研究が行われている。「すみません」の使用の実態調査については、酒井(1979)、住田(1990)、三宅(1994)、小川(1995)などが挙げられる。三宅(1994)では、日本人の大学生・大学院生とイギリス人の大学生や大学卒業直後の青年層を対象にアンケート調査を行い、日本人の詫び表現の使い方が、相手の負担の量や話し手の利益の大小などの要因以上に、相手の種類や人間関係に強く影響を受けていることを指摘している。さらに、小川(1995)は、世代の異なる社会人にアンケート調査を行い、「すみません」の使用には制約があり、感謝を表す全ての場面で使われるものではないこと、相手や状況による使い分けだけでなく、使用する側に世代差があることを指摘している。つまり、「すみません」は、若い世代の軽い感謝のことばとして、目上やソトの人に多用され、上の世代では目下や友達に対して使われる傾向があるということである。ポイクマン・宇佐美(2005:42-43)は、謝罪を受ける側の方策に注目し、日本語母語話者と中国語母語話者を比較し、中国語母語話者は相手のフェイスをそれほど考慮することなく、直接的な非難を行い、相手の責任を追及し、そのことが、謝罪をする側に「自己弁護」という方策が誘引される。一方、日本語母語話者の場合は、相手のフェイスを尊重しつつ間接的な方法で非難を行い、それを受けて謝罪する側は自分で自分の責任を認め、問題解決交渉を行う、ことを指摘している。

アラビア語に関する詫び表現の研究は、前述のように談話完成テストデータ(以下、DCT)にもとづき、使用状況やジェンダー差による詫びストラテジーの相違についての分類が多く見られる(Bataineh& Bataineh(2008)、Nureddeen(2008)など)。これらの研究は発話行為理論(に基づくものであり、詫びという一つの発話内行為(Austin(1975),Searle(1986))で括っており、複数の詫び表現の使い分けや詫び以外の使い方についての考察は見当たらない。

言語表現による機能の相違に言及しているものは寡少だが、Y.Samarah(2010)では、8種類の詫び表現について、社会的要素により分類し、“maʕliff”は、いずれの階層でも使われるが、公的な場では比較的使用されず、誠実さが低い(-serious)ことを指摘している。谷口・榮谷(2010)は、苦情、誘いなど場面を設定したロール・プレイデータにより、詫びや感謝を示す表現の種類や使い分けを概観しているが、局所的な言及にとどまっている。谷口・榮谷(2011)は、アラビア語エジプト方言の詫び表現や感謝表現の使い分けについて概観し、“maʕliff”がFTA(Face-threatening acts)の前に使われることに言及している。

### 3. 調査方法について

本研究のように言語表現のバラエティや談話構造を観察するためには、会話コーパスを利用することが最も理想的である。しかしながら、現在のところ、アラビア語の話言葉コーパスは、存在していない。これまでの研究に多く使われたDCTによる調査では、話し言葉を回答シートに書き込むことになり、アラビア語のように正則アラビア語(フスハ)とアラビア語の各種方言(アンミーヤ)の区別が明確である言語では正確なデータが採取できるとは言い難い。

言語表現の種類やその語用論的機能を絞り込めば、ロールプレイやインタビューなどの手法で自然談話に近いデータの収集が可能であるが、本研究のように、詫びや感謝に関する表現の全体像を捉えるにはさまざまな場面からデータを収集する必要がある。そこで、もっとも自然談話に近く、しかもできるだけ多くの場面における言語使用の実態を掴むために、映画やテレビドラマでの発話を収集し文字化することにした。先行研究の調査データにはシナリオを扱っているものもあるが、役者によっては、必ずしもシナリオどおりではなく、それぞれの場面においてより自然な発話をする者もいることから、映画やテレビドラマでの実際の発話を文字化したほうが、自然談話に近いデータが収集できると考えた。しかも、本研究で対象としている詫びや感謝の定型表現は、無意識のうちに発せられる場合が多く、シナリオとは異なり、より自然な言語表現を役者が発話すると考えたからである。

また、取り扱う映画やテレビドラマの選別にあたっては、以下の点に留意した。まず、現代を設定して、ストーリーにできるだけ現実味があり日常的な内容のもの、できるだけ会話が自然で脚本が言語的に特殊ではなくしっかりしているもので、映画の場合は、映画賞受賞作品など内容やシナリオの質が高いものを選んだ。

収集したデータの出典は、次の通りである。

表 1)

Title	Film/TVdrama	Senario writer	year
<i>Sana ?u:la nas'ib</i>	F	<i>Sami:ra Muhsin</i>	2004
<i>Ma?fa sabq il-?isra:r</i>	TV	<i>?aiman Sala:ma</i>	2012
<i>?ala gussiti</i>	F	<i>Ta:mir ?ibrahi:m</i>	2012
<i>1/8 dastit ?afra:r</i>	F	<i>Wa:?!il ?abdallah</i>	2006
<i>?ihki ya fahraza:d</i>	F	<i>Wahi:d Ha:mid</i>	2009
<i>Bolbol haira:n</i>	F	<i>Nivi:n ?il-Zuhairi</i>	2010
<i>Fir?it Na:gi ?at'illa</i>	TV	<i>Yu:suf Ma?fa:t'i</i>	2012
<i>?il-Dada Duddi</i>	F	<i>Na:dir S'ala:hiddi:n</i>	2008
<i>?il-hubb kida</i>	T	<i>?a:ri? ?il-?ami:r</i>	2007

## 4. 調査の結果

### 4.1 詫び表現の数と種類

今回のデータから収集された詫び表現は以下のとおりである。<sup>2</sup>

表 2)

表現	数 <sup>3</sup>
ma?li?j	41
so:ri	33
?ana m. ?a:sif/f. ?asfa <sup>4</sup>	24
kasbin ?ann-i	2
?ana m. muta?assif/f. muta?assifa	2
parudon	1
その他	4
計	107

“parudon”はフランス語由来、“so:ri”は英語由来の外来語が多く使われていることがわかる。これらは、詫びる行為が軽微な場合や詫び以外の機能として使われることが多い。(Ma?fa sabq il-?isra:r に登場するアハラムは、普段“so:ri”で詫び、相手に重大な損失を与えた場合は、?ana m. ?a:sif/f. ?asfa を使用して詫びている)

“ma?li?j”は、正則アラビア語(フスハ)では使われないが、エジプト方言(アンミーヤ)による日常会話では頻繁に聞かれる表現である。“ma?li?j”について、辞書には、① I never mind, don't worry about it. ② sorry! excuse me! (『A Dictionary of Egyptian Arabic』 Librairie du Liban 1986)と記述されており、相手の行為に対する受け入れと自分の行為についての詫びという相反する用法を有することになる。①の用法で使われているものはデータから削除した。

### 4.2 詫び表現の機能

Brown and Levinson(1987)は、Goffman(1967)のフェイス(face)という概念を取り入れ、人には次のような二つのフェイスが存在するとしている。

a. ポジティブ・フェイス(positive face): 縄張り、個人的領分、邪魔されない権利-つまり、行動の自由と負担からの自由-に対する基本的要求

b. ネガティブ・フェイス (negative face) : 相互行為者 (interactants) が求める肯定的な、一貫した自己イメージ、つまり「人格」(重要なのは、この自己イメージが評価され、好ましく思われたいという欲求を含んでいることである) <sup>5</sup>

そして、これらのフェイスを脅かす行為を FTA(Face-threatening acts) とし、FTA への配慮として、ポジティブ・ポライトネス並びにネガティブ・ポライトネスを挙げている。相手に対する誘い、依頼や要求は、ネガティブ・フェイスを脅かすものになり、相手からの依頼や要求を断る行為はポジティブ・フェイスを脅かす行為と考えられる。また Brown and Levinson(1987) では、FTA を緩和するネガティブ・ポライトネス (negative politeness) の方策の一つとして "Apology" が挙げられ、これまでの研究で、日本語の「すみません」や中国語の“不好意思”(=すみません) などの表現が、依頼、断りの場面で使用されることが指摘されている (blum-Kulka 他(1989)、柏崎(1993)、生駒・志村(1989) 等)。

謝罪表現を含む談話を意味公式 (Beebe 他(1990) 等) を参考にコーディングした。

“maʕliʃf” が依頼や抗議など FTA の前置きとして使われることは、谷口・榮谷(2011) と同様の結果であった。

表 3)

機能	数	言語表現 <sup>6</sup>
詫び	71	maʕliʃf (22) so:ri (27) ʔana m. ʔa:sif/f. ʔasfa (21) ʔasbin ʕann-i (2) ʔana m. mutaʔassif/f. mutaʔassifa (2) その他 (4)
断り (の前置き)	7	maʕliʃf (6) so:ri (1)
要求・依頼 (の前置き)	7	maʕliʃf (5) so:ri (1) ʔana m. ʔa:sif (1)
抗議 (の前置き)	2	maʕliʃf (2)
不満 (の前置き)	2	maʕliʃf (1) so:ri (1)
質問 (の前置き)	2	so:ri (2)
言い訳 (の前置き)	2	pardon (1) ʔana m. mutaʔassif (1)
否定 (の前置き)	1	so:ri (1)
感謝	4	maʕliʃf (3) ʔana m. ʔa:sif (2)
話題転換	2	maʕliʃf (2)

計 100

#### 4.3 詫びストラテジーの構成要素

発話行為「詫び」を中心とする談話のパターンを見たところ、相手から非難、苦情、叱責、不満あるいは注意を受けて詫びを示す談話 24 件の談話構造には次のようなパターンが見られた。

詫び表現 + 言い訳	(22)
詫び表現 + 詫びる行為の言明	(1)
詫び表現 + φ	(1)

谷口(2001) では、日本語のテレビドラマや映画での発話データのうち、相手から非難、苦情、叱責、不満あるいは注意を受けて詫びを示す談話 31 件のうち、最も多いパターンは詫び表現のみの発話 21 件であり、詫び表現 + 言い訳のパターンは 1 件のみであった。つまり、人から不満など自分のマイナス面を指摘された時に日本語では詫びる行為のみを行うが、アラビア語の場合は、行為についての理由を説明したり、自分の正当性を述べる場合が多いと言えよう。詫びのストラテジーにおける意味公式の構成要素の数を比べると、アラビア語では 3 パターン (「言い訳 + 詫び

表現+詫びる行為」は3と数える)が多く、1パターン(詫び表現のみ)や2パターン(詫び表現+詫びる行為)が多い日本語と比べて発話が長いと言える。東(1997:175)には、ドイツ語やフランス語などの欧米語と比べてアラビア語は日本語と同様に高コンテキスト言語として挙げられているが、アラビア語話者と日本語話者を比べると、アラビア語話者のほうが饒舌であり、言い訳も多いということであろうか。

#### 4.4 自分のプラスは相手のマイナス

使役構文に詫び表現が後接される場合は、使役主体が自分の利益のために動作主体を使う”つかいだて性”(早津(2007)による)を持つ場合に限られる。また、意志動詞の場合、聞き手に対して話し手が依頼した事柄を聞き手が遂行した(あるいは遂行中)後に発せられるものである。以下に例を挙げる。

例1) 桜子「とうちゃん ごめん うそつかしてごめん」

—やまとなでしこ

しかし、聞き手に対して強制ではなく依頼をした場合や話し手の利益になることを聞き手が自ら行った場合であっても、使役構文が使われる場合がある。

次の例は、親しい同僚に休日を返上してプライベートな用事を手伝ってもらったことを詫びている場面である。

例2) 杏子「ごめんね 休みなのにつきあわせちゃって<sup>7)</sup>」

—ビューティフル・ライフ

使役構文を授受的補助動詞と比較したものには次のような考察がある。奥津・徐(1981)では、a「私は彼にピアノをひいてもらった。」と、b「私は彼にピアノをひかせた。」を比べて、「私」が「彼」に要求し、その結果「彼がピアノをひく」という行為が実現したという文の意味は共通しているが、「させる」を使うと尊大で強制的な感じを与えることから、事実としては明らかな使役行為であっても「～もらう」が使いやすいとしている。また、「～もらう」は、その基本的意味から派生し、文脈によって使役行為の謙讓的表現になると述べている。益岡(2001)では、a「私はきのう田中君に辞めてもらった。」b「私はきのう田中君を辞めさせた」のような対立について、強制性の有無において対立しているのであり、恩恵性の意味を強く帯びることはないとしている。

例4)では、話し手は同僚に手伝いを依頼したか、あるいは同僚自らが話し手に手伝うことを申し出たことが想像されるので、「休みの日につきあってくれてありがとう」と表現してもよいのだが、あえて使役構文が使われている理由は、使役構文の使用によって、相手へ負担をかけたことを誇張するという待遇的配慮であると思われる。使役構文のあとに感謝表現は使えず(\*[SCV]+[感謝表現])、詫び表現が後接される([SCV]+[詫び表現])。

中田(1989:202)は、日本語では、相手の行為で恩恵を受けた場合でも謝罪表現を使うことがあることから、自分のプラスと相手のマイナスを自動的に結びつける傾向が強い点を指摘しているが、“maʕliʃ”にも同様の使用がある(谷口・榮谷(2011)で既出)。

アラビア語にも感謝の場面において詫び表現と使役表現が使われる例が見られた。

次の例では、常に自分に対して献身的に接してくれるセイフ(男性)に対して、ハビーバ(女性)が、感謝をする場面である。

例3)

ha bi: ba: maʕliʃ ana taʕabtak maʕaya men yo:m ma ʔabelteni wenta

marra twaṣalni we marra ansa maṣa:k el aḥla:m fi elṣarabeyya.  
heyya eẓ-zuruuf keda. haẓzak baʔa.

(ハビーバ：私に会った日以来、あなたを疲れさせて、ごめんね。一回、私を送ったり、一回、あなたの車に映画のCDを忘れたり。状況はこうだ。あなたの運（バッドラック）だ。)

se:f: : da ana haẓzi zai elful.

enti ṣarfa eẓ-zuruuf lamma betetʔabel maṣa elhaẓ beyeṣmelu haḡa:t keti:r  
agmal memma natawaqaṣ.

(セイフ：僕の運は茉莉花のようだ。知ってる？状況は運と遭遇したら、私たちが期待していることよりきれいなことをするさ。)

ha bi: ba: maṣliḡ ana dawaṣtak maṣaya.

(ハビーバ：あなたに迷惑かけてごめんね (煩いことして))

se:f: dawaṣtini maṣaki? enti le: mkabbara elmawdu:ṣ keda!

enti ṣarfa en ana batmanna kol yoom tensi maṣaya haḡa wa eddewef  
ed-dawfa el-helwa di.

(セイフ：僕に迷惑？なんでこのことをこのように大きくしてるの？知ってる？僕は毎日君が僕と何かを忘れて、このようなかわいい迷惑がかかることを願ってる。)

—ʔil-hubb kida

ハビーバは、自分を送ってくれたり、忘れ物を取りに行ってくれたことについて感謝の意を示す代わりに、使役表現を用いて、「あなたを疲れさせてごめんね」と詫びている (taṣabta 疲れる → taṣabta + k (使役マーカ))。

このように、アラビア語も日本語と同様に、相手の行為で自分が利益を得た場合について、受け手側の視点で感謝するだけでなく、行為者側の視点になって詫びるという2種類のパターンが見られる。後者の戦略は、中国語や英語ではそれほど頻繁には行われないうである。中国語では、“rang ni jiu deng” (待たせてごめんなさい) のように定型的な表現で使役が使われる。英語では、“Thank you for waiting” のように受けて側の視点で感謝する場合が一般的である。<sup>7</sup>

相手の行為で恩恵を受けた場合に謝罪表現を使うことが比較的多い点では、英語や中国語と比べると、アラビア語は日本語に近いと言えよう。

## 5. おわりに (まとめ)

アラビア語は、相手の行為が自分の利益になった場合、感謝する戦略のほかに、相手の負担に言及して詫びる戦略が取られることがわかった。この点は、日本語と類似している。また、詫びの戦略の構成要素の数が日本語の場合より多く、言い訳も多く聞かれることがわかった。

本稿での調査はテレビドラマの発話データをもとに分析したものであり、自然談話で同様の結果が出るとは限らない。ただしアラビア語の詫び表現の語用論的機能や詫びの戦略について概観することができたと思う。映画やテレビドラマの発話データは言語使用の規範意識を探る上でも有効であると思われる。今後、ロールプレイなどで条件統制を行ったデータを取得し、検証を進めたい。さらに、日本語と比べてアラビア語の低コンテクスト性を知ることができた。アラビア語母語話者が日本語を使用する際に、相手に対して自分の行為の言い訳をしたり、説明をすることが予測される。

## 参考文献

東照二 (1997) 『社会言語学入門』 研究社

- Austin, J.L. (1975) *How to Do Things with Words*. Cambridge: Harvard University Press.
- AL-Adaileh Bilal A. (2011). When the strategic displacement of the main topic of discussion is used as a face-saving technique: Evidence from Jordanian Arabic. *Journal of Politeness Research*. pp.239-257.
- Bataineh Rula Fahmi, Bataineh Ruba Fahmi (2008). A cross-cultural comparison of apologies by native speakers of American English and Jordanian Arabic. *Journal of Pragmatics*, 40, pp.792-821.
- Beebe, Leslie M., Tomoko Takahashi, and Robin Uliss-Welt (1990) Pragmatic transfer in ESL refusals. In Scarcella, Robin C., Elaine S. Anderson, and Stephen D. Krashen (eds.) *Developing communicative competence in a second language*. Boston, Mass.: Heinle & Heinle Publishers. pp.55-73.
- Blum-Kulka Shoshana, House Juliane, Kasper Gabriele (1989) *Cross-cultural pragmatics: requests and apologies*. Norwood, NJ Ablex
- Brown Penelope and Levinson Stephen (1987[1978]). *Politeness: Some Universals in language usage*. Cambridge University Press. (田中典子監訳『ポライトネス 言語使用における、ある普遍現象』研究社 2011:79)
- Coulmas, F. (1981) Poison to Your Soul: Thanks and Apologies Contrastively Viewed. *Conversational Routine*, The Hague Mouton, pp.69-91.
- Eisenstein Miriam, W. Bodman Jean (1986). I Very Appreciate': Expressions of Gratitude by Native and Non-native Speakers of American English. *Applied Linguistics*, Col.7, No.2, Oxford University Press, pp.166-185.
- 三宅和子 (1994a) 「詫び」以外で使われる詫び表現—その多様化の実態とウチ・ソト・ヨソの関係—『日本語教育』(日本語教育学会) 82号, pp.134-146.
- 中田智子 (1989) 「発話行為としての詫びと感謝」『日本語教育』(日本語教育学会) 68号, pp.191-203.
- Nureddeen Fatima Abdurahman. (2008). Cross cultural pragmatics: Apology strategies in Sudanese Arabic. *Journal of Pragmatics* 40, pp.279-306.
- 大浜るい子 (1997) 「日本語による会話終了のメカニズム解明のための予備的考察」『広島大学教育学部紀要』(広島大学) 第二部第46号, pp.159-167.
- Owen, Marion (1983). *Apologies and Remedial Interchange*, New York: Mouton.
- ポイクマン 綾子・宇佐美洋 (2005) 「友人間での謝罪時に用いられる語用論的方策—日本語母語話者と中国語母語話者の比較—」『語用論研究』第7号、日本語用論学会
- Rosch, M and K. Segler. (1987) "Communication with Japanese," *Management International Review*, 27, 4
- Searle, J.R. (1969) *Speech Acts: An essay in the philosophy of language*, Cambridge Univ. Press.
- (1975) Indirect speech acts. *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*, New York: Academic Press, pp.265-277.
- サール J.R 著 坂本百大・土屋俊訳 (1986) 『言語行為』勁草書房
- 谷口龍子 (2009) 『詫びおよび感謝表現の日中対照分析—談話構造から見た機能とポライトネス—』国際基督教大学博士論文
- (2010) 「詫びおよび感謝表現の選択と文・談話構造との関わり—日本語と中国語のヴォイスに注目して—」『東京外国語大学論集』第80号
- 谷口龍子・榮谷温子 (2011) 「アラビア語のエジプト方言における詫びおよび感謝表現の語用論的機能」『横浜国立大学留学生センター教育研究論集 シンポジウム『エジプトにおける日本研究—過去、現在、未来』開催記念号』第19号、横浜国立大学
- (2012) 「儀礼的方言としてのアラビア語—エジプト方言“maʿslif”の使用」『日本語・日本学研究』vol.2 東京外国語大学国際日本研究センター
- 山梨正明 (1986) 『新英文法選書 12 発話行為』大修館書店
- Y. Samarah Abdullah. (2010). Views of Apology in linguistics: Examples of Arabic culture. *Journal of Language and Literature*. No.3, pp.57-73.

## 注

- 1 Apology の日本語訳として、「謝罪」「謝罪表現」という言葉が使われるが、「謝罪」は個人ではなく、組織間の公的な行為として使われることが多く、本稿では個人対個人の言語行為に注目することから、「詫び」「詫び表現」という言葉を使うことにした。
- 2 間接的に詫びを示すものは本データには含めなかった。
- 3 一談話に複数の詫び表現が使用されることがあり、合計数は談話数と異なる。
- 4 *m.* は男性形、*f.* は女性形を示す。
- 5 Brown and Levinson (1987|1978) の邦訳『ポライトネス 言語使用における、ある普遍現象』田中典子監訳、研究社、2011:79) による。
- 6 一つの機能に複数の表現が使用されていることから、合計数は総数と異なる。
- 7 英語でもよほど相手に負担をかけたり、強い負い目を感じた場合は、“I’m sorry to cause you trouble.”、“I’m sorry I took up some of your time.” のように表現することもある。

# **Pragmatic Function of Expressions and Strategies of Apology in Arabic (Egyptian Dialect)**

Ryuko TANIGUCHI ( Tokyo University of Foreign Studies )

Hanem AHMAD ( Cairo University )

keywords: Arabic (Egyptian dialect), Expressions of Apology, Pragmatic function, Thanking, Causative marker

This paper is a research conducted by collecting utterance data of TV-drama and films and analyzing the functions of expressions of apology and strategies of apology in Arabic language (Egyptian dialect) comparing with Japanese and other languages.

The research paper compares the findings in Arabic with those in Japanese and other languages.

In this research , there are two main findings. First, on occasions of appreciation, the speaker uses expressions of apology in addition to causative phrases. Second, in structuring strategies of apology in Arabic, the number of elements (semantic formula) is bigger than those in Japanese structures.



# 中級日本語学習者の作文における語彙使用の誤用と問題点

森本 一樹 (英国 リーズ大学)

キーワード: 作文、中級日本語、誤用分析、語彙、カタカナ語

## 1. はじめに

英国の大学で日本語学習者の作文添削に携わっていると、英語の影響や辞書からの直訳などによる学習者の不自然な語彙使用が目立つ。特に、初級文法を一通り学び、一年間の留学を経た中級学習者の場合は、自分の言いたい事なるべく母語と同じレベルで伝えようとするあまり、時には語彙の選択が原因で意味が通じにくくなることもある。そこで、本稿では、英国の大学で日本語を専攻する3、4年生8人の学生による作文コーパスをもとに、語彙使用という観点から、誤用や問題点の分析、考察を試みたい。

## 2. 作文における誤用分析

日本語教育の分野で、日本語学習者の作文における誤用を分析したものや、作文指導に関して提案したものは数多くあり、誤用分析では、ある学習者集団の誤用を全面的に分析したもの、ある言語項目や文法表現にフォーカスしたもの、ある国の学習者に特化した母語の干渉に関して分析したものなど、さまざまある(楊 2014:15)。その内、語彙に焦点を当てた研究としては、鈴木(1999, 2002)は学習者の作文における語彙・意味的な誤用の主な傾向を分析し、特に慣用的に定着した表現(コロケーション(連語))、その他の慣用的な言い回し、漢字熟語等に関する誤りについて困難点を例示している。

さらに、鈴木(2010)では、初中級レベルの学習者による不自然な表現を学習者の辞書使用という観点から質的に分析し、学習者が母語や第二言語からの辞書を介した直訳に頼るという問題や、既存の辞書からは学習者が句単位の的確な表現を探し出すことができないという問題点を指摘している。学習者の母語に着目した研究では、大塚、林(2010)は、各国出身の中上級学習者の意見文を旧日本語能力試験の級別語彙一覧表と照らし合わせて分析し、漢字圏の学習者である中国人、韓国人、漢字圏以外の学習者の順で難しい語彙および漢字を使用し作文を書いていることを明らかにすると同時に、中国母語話者の使用語彙、漢字については母語の影響を強く受けていることを指摘している。

一方、語彙と文法の両方の領域にまたがる習得困難な項目として、陳(2012)は学習者の複合動詞に関する誤用に着目し、量的、質的両面から分析を行った結果、使用例の半数以上が誤用若しくは不自然と判定され、母語や学習者の日本語レベルに関わらず学習者が複合動詞を正しく理解できていないと結論付けている。より近年に行われた研究では、八木他(2013)が日本語作文支援システム構築の観点から、10か国以上の母語話者による285の作文の誤用を誤用の要因・背景に着目して分析し、「類似」、「母語干渉」、「レジスター」という3つのタイプに大別している。

これらの研究はいずれも、一定量以上のコーパスデータを用いて特定の観点に焦点を絞って誤用分析を試みている点で貴重であるが、英語や欧州語母語話者によく見られがちなカタカナ語の誤用や不自然な使用に関しての言及はほとんど見られない。従って、本稿では、鈴木(2002)、八木他(2013)、楊(2014)の分析項目に加えて、カタカナの使用法に関する分析を試みたい。

## 3. 研究方法

本研究の対象となるのは英国の大学で日本語を専攻(二科目専攻を含む)する8人の学習者が2015年10-11月に書いた作文である。学習者の母語は英語5人、広東語1人、スウェーデン語1人、ブルガリア語1人であり、8人は全員2年次に一年間の留学を経験しており、現在は中級若しくは中上級レベルの授業を履修中である、2015年10

月に行われた日本語診断テスト<sup>1</sup>では、8人の日本語能力にはかなりのばらつきが見られるものの、概ね能力試験のN3-N2に相当する「中級レベル」とであると判定される。

作文の課題は、「もしもあなたが宝くじに当選したら、そのお金をどのように使いますか。また、その理由を教えてください。」と「科学技術によって私たちの生活は良くなったでしょうか。理由も合わせて教えてください。」の2種類で、いずれも400字程度の作文を時間制限なし、辞書使用可の条件でワープロを使って書かせ、電子メールで提出させた。

これら計16の作文の中で、語彙使用に関して筆者が誤用若しくは不自然であると感じた用例を抜き出した。なお、誤用の対象は内容語に限り、助詞、助動詞等の機能語は除いた。また、同一学習者が同じ誤用を複数回繰り返している場合は最初の一のみ取り上げた。その結果98の誤用若しくは不自然な語彙使用の例が検出された。それらの誤用例を考えられる誤用の要因という点から分類を試みた。

## 4. 分析、考察

それぞれの学習者の属性と誤用数の一覧は以下の表1の通りである。

表1 学習者の属性と誤用数

学習者	A	B	C	D	E	F	G	H
母語	英語	ブルガリア語	英語	英語	広東語	英語	英語	スウェーデン語
学年	4	4	3	4	4	3	3	4
診断テスト	130	117	136	118	141	142	134	162
語彙の誤用数(異なり数)	16	17	9	19	7	11	8	11

サンプルが少ないこともあり、学習者の属性と語彙の誤用数との関係については明確な結びつきが見られなかった。例えば、診断テストの結果が比較的近い学習者Aと学習者Gでは誤用数は倍の差が見られる。また、確かに、留学からの帰国直後である3年生の方が4年生よりもやや誤用が少ない傾向が見られ、より話し言葉に近い平易な構文に頼っている様子が窺えるものの、総じて結論付けることはできない。

一方、誤用の要因に関しては、質的分析の結果、主に、1) 類義語・多義語・ニュアンス、2) コロケーション、慣用的言い回し、3) カタカナ語、4) 英語からの直訳、5) レジスター、に大別することが可能であると思われる。実際には、上記5つの分類に当てはまらなかった例が18あるが、本稿ではこれらの誤用例については、分析を試みないことにする。

### 4-1. 類義語、多義語、ニュアンス

誤用例として、最も多かったのは(38例(全体の39.2%))、「類義語、多義語、語のニュアンスの違い」に関するエラーであった。類義語に関する主な誤用例は以下の通りである。

- (1) 生暖かいビールを飲む必要はもうありません。(生ぬるい)
- (2) 私たちの生活のクオリティーはものすごく上達した。(向上した)
- (3) 競争者が追いつけなくなって滅亡し…(競合者、競合相手)(撤退し)
- (4) 人間は月面に着陸したことがある。(人類)
- (5) 今の人口がもっと長く生きてきた。(人々)
- (6) 今からも便利になっていくだろう。(これから)
- (7) 未来に自分の子供も大学に行けるように…(将来)
- (8) コーヒーを飲みながら、人と分け合うことは私の夢です。(共有する)
- (9) 付き合わなくて(て)も、携帯で話せるから…(会わなくても)
- (10) ゆっくり生活をするのは難しくなると考えます。(思います)
- (11) 確かに生活を成長するために…(向上させる)

- (12) 一万千（一千万？）ポンドくらいの多額なら・・・（高額）
- (13) 永い時間を心配しないで生活できるでしょう。（長期間）
- (14) 14歳から自分で暮らさなければならなかった。（一人で）
- (15) 新しい友達に会いたいし・・・（出会いたい、（を）作りたい）
- (16) ボランティア活動とかインターンシップなどの動作をするつもり（活動、体験）
- (17) 私たちの命が長くなりました。（寿命）

これらの誤用例の中には、「競争者（競合者）」「今から（これから）」「未来（将来）」「考える（思う）」「多額（高額）」「自分で（一人で）」のように日本人母語話者であっても、その使い分けについての理由やルールを明確に説明することが難しいと考えられるものもある。その一方で、「上達（向上）」「分け合う（共有する）」「会う（出会う）」「命（寿命）」などは、実は、それぞれ英語の“improve”, “share”, “meet”, “life” からの直訳の可能性も考えられる。英単語もしくは英熟語が表す意味領域が日本語より広がったり、日本語と完全に対応していない場合、学習者は辞書に載っている訳語のうちのどれかを無作為に使用していることが分かる。

また、誤用とまでは言えないまでも、語の持つニュアンスが文脈にやや相応しくない例も見られた。

- (18) 年寄りにとって、今の技術が想像できないくらい進んだんだろう。

「年寄り」という語は「年寄りの冷や水」などやや否定的、または、自己蔑視の表現として使われることが多いのではないであろうか。ここでは、「高齢者」のように中立的な語彙を選ぶか、「お年寄り」のように尊称を用いた方がよいであろう。

また、単語でなく表現に関しても、ニュアンスや使用場面の違いという点で不自然であると思われる例がいくつか見られた。

- (19) 現代の技術で持ち歩きやすいビールタップを作るのはお安い御用です。
- (20) 私たちの生活に新たな挑戦を挑む。
- (21) 経験で教えてもらったことや・・・にはきりが無いでしょう。

(19) では、「お安い御用」という表現が用いられる一般的使用場面から、作文の筆者がビールタップを作ることを直接誰かに頼まれたかのような印象を受けてしまう。ここでは「いとも容易い」のような表現に留めておくべきであろう。また、(20) では、動作主は「社会問題」という非生物であり、文として意味は通じるものの、ぎこちなさや不自然さが感じられるため、「課題を投げかけた、課題を突き付けた」等に改めるべきだと思われる。(21) については「無限」ということを述べようとしていると推察されるが、語の意味としては「限り」と「きり」はやや類似しているため、「限りがない」とすべきところを「きりが無い」という全く意味やニュアンスの異なる表現を使用してしまったものと考えられる。

#### 4-2. コロケーション、慣用的言い回し

コロケーションや慣用的言い回しに関する誤用は第二番目に多く、15例（全体の15%）に上った。

- (22) 積もった罰金を払ったりすることは当然です。（溜まった）
- (23) たとえ値段を4倍（に）増やしても・・・（上げて）
- (24) 科学技術を使って問題を直せる（解決できる）
- (25) 社会危機が現れた（起こった）
- (26) 自分のカフェを立てる夢を実現するために・・・（開く、経営する、持つ）
- (27) 違う考え方を持っている人とコミュニケーションする（コミュニケーションを取る、コミュニケーションを図）

る)

これらの誤用は単に日本語のコロケーションを習得出来ていないだけでなく、やはり、「積もった罰金」(“accumulated fine”)「値段を増やす」(“increase the price”)などのように英語からの直訳の影響を受けているものと思われる。

また、慣用的な言い回しに関する誤用としては次の例が挙げられる。

(28) 科学技術は大抵現代の人の生活を良くなった・・・(現代人)

この例のように、「有名な人(有名人)」「環境の問題(環境問題)」など、誤用ではないが、「の」を用いずに漢字熟語として取り扱うのが一般的なものがあるが、学習者にとってはそのルールが不明確であるため習得が困難であると思われる(鈴木(2002)を参照)。

#### 4-3. カタカナ語

カタカナ語の習得の困難点に関しては、諏訪他(2002)、山縣(1999)等が指摘しているとおり、英語起源の片仮名語の音がもとの英語と異なるため、混乱を起こし、英語の学習経験が日本語学習者のカタカナ語習得の妨げになってしまう場合もある(安2001: 55-56)。実際、本稿においても最も多く見られたカタカナ語に関する誤用は綴りに関するものであった。

(29) カナダでのカヤンプにいくため・・・(キャンプ)

(30) テレビをはじめ、インタネットなどの科学技術は・・・(インターネット)

(31) 治療からコミュニケーションまで・・・(コミュニケーション)

(32) このパソコンがなかったら・・・(パソコン)

これらの誤用はもちろん単なる入力ミスの可能性もあるが、安(2001)が指摘しているように、日本語学習者にとってカタカナ語の長音に関する習得が特に難しく、「インタネット」「コミュニケーション」のような誤用が生まれると考えられる。また、「パソコン」に関しては、同じ作文内で二度の誤用が見られたことから、入力ミスとは考えにくく、初級の語彙であってもカタカナの綴りが定着していないことが分かる。なお、今回の作文課題はワープロ入力であり、学習者が変換方式による入力を行っていれば防げたエラーであるとも言える。ワープロ利用の際のストラテジーの指導が有効かもしれない。

こうした綴りの問題とは別に、日本語として定着しているとは言えない英語をそのままカタカナ化している例も見られた。

(33) 家族のモーゲージを支払ったり・・・(住宅ローン)

(34) 答えとしてドライすぎると思います。(そっけない、無味乾燥だ)

(35) 友達と家族へのギフトをよく買ったり・・・(プレゼント)

在英日本人同士ならば、「モーゲージ」は十分通用する外来語であるが、一般的には「リバースモーゲージ」等の業界用語を除けば、カタカナ語として定着しているとは言いがたい。また、「ドライ」についても、「あの人はドライな人だ。」のように情に流されず、合理的な様子を表す形容詞としては使用されているものの、質問の答えとして「ドライ」という使い方はあまり見られないように思う。「ギフト」については、語彙としては完全にカタカナ語として定着しているが、ニュアンスとして「ギフトセット」など、やや改まった場面や相手に対して用いられるのが通例である。このように、意味領域やニュアンスが異なるカタカナ語の使用が見られるが、外来語の使用に関しては、日本人の間でも理解や許容にかなりの差があると思われる。国立国語研究所「外来語委員会」(2006)も日本語母語話者

に対して「言い換え」の提言を行っているくらいであるが、英語母語話者や第二言語話者にとって、適切なカタカナ語の指導は重要であろう。

#### 4-4. 英語からの直訳

本研究の対象となった学習者8名は全員英語母語話者及び第二言語話者であり、日本語学習においても英語の影響を大きく受けていると思われる。そのため、「類義語、多義語、ニュアンス」や「コロケーション、慣用的な言い回し」に分類された誤用も、同時に英語からの直訳が直接の要因となっている可能性もあるが、次の例は特に英語からの直訳の影響が強く感じられる。

- (36) 貯金したら、利益をもらえるので・・・(利息 "interest")
- (37) 借金を払うつもり・・・(返す、返済する "pay (off) a debt")
- (38) 勉強するために融資を取った。(ローンをした、ローンを受けた "take a loan")
- (39) そうすれば、(宝くじに) 勝ったお金を・・・(当たった "win a lottery")
- (40) 自分の子どもも大学に行けるように気をつける。(したい "make sure/ensure to")

鈴木 (2010) でも述べられているように、学習者によっては単語レベルでの辞書の「直訳」に頼りがちであり、辞書の利用方法や注意点などについての指導が必要であろう。

#### 4-5. レジスター

レジスターとは、「社会的な拘束力をもつ言語学上の規範」における言語使用域の変異のことであり、書き手と読み手がどのような関係で、どのようなコンテキストのもとで言語表現を使用するかによって、異なる語彙・文法項目で記述されることを示すものである (八木他 2014:167)。

今回の作文でも意見文等に相応しくない話し言葉の使用、混合が数多く見られた。例としては、「ものすごく (非常に)」「すごく (とても)」「やっぱり (やはり)」「すごい (素晴らしい)」「でも (しかし)」「いっぱい (たくさん、数多く)」「ちょっと (少し)」「よっぽど (よほど)」など計12例に上った。

作文を書いた8名の学習者はいずれも「書き言葉と話し言葉の違い」については既習済みである。興味深いことに、話し言葉の使用頻度は必ずしも日本語診断テストの結果や学年 (留学直後かどうか) と結びついておらず、レジスターに対する個人の意識の違いも関係しているのではないかと思われる。即ち、文法や語彙などのように誤用によって読み手への意思疎通が直接阻まれるわけではないため、学習者によっては十分に注意を向けていない可能性がある。従って、読み手への印象をより意識させる指導が必要であろう。

### 5. まとめ

本稿では、英国の大学において日本語を専攻している8名の中級学習者によって書かれた2種類、計16の作文を対象に語彙使用の観点から分析した結果、98の誤用または不自然な使用法が見られた。また、誤用の要因に着目し、質的分析を行った結果、「類義語・多義語・ニュアンス」「コロケーション、慣用的言い回し」「カタカナ語」「英語からの直訳」「レジスター」という5つの誤用タイプに大別できることが分かった。

誤用数に関しては、「類義語・多義語・ニュアンス」が最多で、次いで「コロケーション、慣用的言い回し」に関する誤用が多く、「英語からの直訳」に分類されたのは7例 (全体の7.2%) だけであった。しかしながら、前述のとおり、上位二つの誤用タイプに分類されたものの中にも、英語の影響が誤用の直接の原因であるものも多いと推察される。従って、今後は英語母語話者や第二言語話者を対象としたより効果的な語彙学習指導が望まれる。特に、八木他 (2013, 2014) 等が目指している、中級学習者が容易に使いこなせるオンライン学習者コーパスのさらなる発展、整備に期待したい。

## <参考文献>

- 安榮花 (2011) 「日本語学習者に対するカタカナ語教育の問題と提案」『玉藻』第 46 号 pp. A55-A66.
- 大塚薫、林翠芳 (2010) 「中級レベルの日本語学習者の作文教育 —意見文にみる語彙・漢字使用及び誤用の分析結果を踏まえて—」『高知大学総合教育センター修学・留学生支援部門紀要』第 4 号 pp.47-66.
- 国立国語研究所「外来語委員会」(2006)『『外来語』言い換え提案—分かりにくい外来語を 分かりやすくするための言葉遣いの工夫— 第 1 回～第 4 回 総集編』  
[http://pj.ninjal.ac.jp/gairaigo/Teian1\\_4/index.html](http://pj.ninjal.ac.jp/gairaigo/Teian1_4/index.html).
- 鈴木智美 (1999) 「意味的な誤用に見られる主な傾向—慣習的に定着した表現および類似の表現に関わる誤り—」『日本語学習者の作文コーパス：電子化による共有資源化』平成 8 年度～平成 10 年度科学研究費補助金（基盤研究 (A)(1)）研究成果報告書（研究課題番号 08558020）研究代表者：大曾美恵子 pp. 131-145.
- 鈴木智美 (2002) 「2000 年度中級作文に見られる語彙・意味に関わる誤用 —初中級レベルにおける語彙・意味教育の充実を目指して—」東京外国語大学留学生日本語教育センター『留学生日本語教育センター論集』第 28 pp.27-42.
- 鈴木智美 (2010) 「辞書の使用が引き起こす学習者の不自然な表現—『JLPTUFS 作文コーパス』の作文から見えてくること—」『2010 世界日本語教育大会 (ICJLE) 予稿集』(DVD 版) 1436-0-1436-9.
- 陳曦 (2012) 「日本語学習者における複合動詞の誤用分析 —作文データベースを用いて—」『ことばの科学』25 号 pp.63-74.
- 八木豊、ホドシチェク・ボル、阿辺川武、仁科喜久子 (2013) 「学習者が犯す誤用の要因・背景からみる日本語作文支援」『国立国語研究所第 3 回日本語ワークショップ予稿集』pp. 307-312.
- 八木豊、ホドシチェク・ボル、阿辺川武、仁科喜久子 (2014) 「日本語作文推敲支援システム『ナツメグ』における誤用検出手法の評価」『国立国語研究所第 5 回日本語ワークショップ予稿集』pp. 167-170.
- 楊帆 (2014) 「中級日本語学習者の作文における困難点 —文構造の呼応関係について—」『秋田大学国際交流センター紀要』第 3 号 pp.15-28.

## 注

- 1 学年のはじめに日本語診断テストとして、筑波大学による『筑波日本語テスト集(TTBJ)』<http://ttbj.jp/index.html> のうち、「SPOT90」および「文法 90」による計 180 点満点のテストを実施した。「SPOT90」では 56-80 点を、「文法 90」では 51-80 点をそれぞれ中級レベル（日本語能力試験 N3、N2）としている。従って、今回の日本語診断テストにおいては 107-160 点を概ね中級レベルとする。

# **Errors and Problems in the Use of Vocabulary in Compositions by Intermediate Learners of Japanese**

Kazuki MORIMOTO (The University of Leeds)

Keywords: Composition, Intermediate Japanese, Error Analysis, Vocabulary, Foreign Loanwords

This paper investigates lexical errors and the unnatural use of words and phrases in compositions written by intermediate learners of Japanese who are studying at university in the UK. Having examined 16 short compositions written by eight students, 98 errors were identified.

Further qualitative analysis has suggested that these errors can be broadly categorized into the following five error types, namely 1) synonyms, polysemes and words with different nuances, 2) collocations and fixed expressions, 3) katakana or foreign loanwords, 4) direct translation from English, and 5) register.

Among these error types, type 1 was the most commonly observed error type followed by type 2, and only a fraction of errors were categorized as type 4. However, close investigation found that some of the errors which were categorized as type 1 and 2 may also stem from learners directly translating from English. As for the use of foreign loanwords, there were some cases where learners used katakana words which are either not commonly used in Japanese or through which the specific meanings of the original English words may not be correctly conveyed.

This study concludes that more effective ways of learning vocabulary, including the use of online learner corpora, need to be explored.



# Time-Related Conjugational Error Types in TUFS Sunrise Advanced Japanese Learners' Corpus of English

Caroline E. Kano (Tokyo University of Foreign Studies)

Keywords: Advanced Written English, Misused English, Time-related Conjugational Error Types, Tense and Aspect, Online Dictionary of Misused English Corpus

## 1. Introduction

This paper is based on material selected for analysis by the Online Dictionary of Misused English Corpus (TUFS Sunrise Advanced Japanese Learners' Corpus of English) Project Team at Tokyo University of Foreign Studies, of which the author is a member, and presents some observations on the part of the author of certain time-related conjugational error types which are frequently seen in the written English of advanced Japanese learners at the university level. It constitutes an attempt to understand the reasons as to why the errors may occur, the degree of influence of the first language upon the target language, and the characteristic differences between the two respective languages, not simply in obvious syntactical terms, but also from a cultural and conceptual point of view.

## 2. Approach

After first considering the case of errors typically made by Japanese learners in connection with the past tense in English, some examples of other time-related errors as revealed in a series of English essays by forty-two advanced learners towards the end of their first year at university will be examined. The assigned essay topic was 「もしもあなたが宝くじに当選したら、そのお金をどのように使いますか。また、その理由を教えてください。 *Moshi mo anata ga takarakuji ni toosen shitara, sono okane wo dono yooni tsukaimasuka? Sono riyuu wo oshiete kudasai.*」 (If you won [were to win] the lottery, how would you spend the money? Please explain your reasons.), wherein an immediate point of interest lies in the use of the subjunctive and modal past. Thought will be given to the cultural concept or perception of time, namely if and where the perception of tense and the perception of aspect in the two languages correspond.

## 3. Observations and Discussion

One conspicuous time-related error which is seen in the writing of even advanced Japanese learners of English is that connected with the simple past tense of the verb, which learners tend to forget to use. Notwithstanding certain irregularities of past forms in English and the fact that certain tense distinctions as in English do not exist in Japanese, the Japanese language would seem to have a similar system of indicating a clear distinction between the present and past tenses of the verb, whereby the suffix of the present tense form, 「る *ru*」, changes to the past tense suffix, 「た *ta*」. In the case of learners whose first language is Chinese, which is an entirely aspect-focused language, where the verb itself never changes its form, and aspect particle markers only follow the verb where added clarity is necessary, it might be understandable for a difficulty in forming the past tense in English to occur. This can be understood since 'tense' is defined in terms of the position and viewpoint of the speaker, who fundamentally perceives of events as: already having taken place at different stages in the past; being in the process of taking place in, or in some way relating to, the present; or yet to take place in some way in the future -- which distinctions, generally speaking, are indicated by different conjugations of the verb. On the other hand, 'aspect'

constitutes a more abstract concept of completion or incompleteness, with the notion of 'completion' referring to that which has gone before, but also to possible 'completion' yet to come about -- whereby form the verb itself remains unchanged.

Nevertheless, a similar situation to Chinese can be seen with Japanese. That is, even though verbs do appear to 'conjugate' in Japanese, the language is also, like Chinese, fundamentally aspect-focused, and the distinction between the '*ru*' and '*ta*' forms of the verb is not exactly that of past and present tense, but that of non-completion and completion. Moreover, the fact that the '*ta*' form is also used to indicate completion of an 'event' in the past creates further difficulty. Thus, without a deep understanding of the concept of the tense system in English on the part of the Japanese learner -- namely, how the speaker perceives events which have occurred before the time of speaking -- the choice of when to use which form (the past tense form or the non-past (present) form) will inevitably tend to reflect the instinctive choice rather between '*ru*' and '*ta*', in terms of the 'cultural-linguistic' concept of completion or non-completion.

A further factor which should be taken into consideration is the way in which the first language, Japanese, is treated in terms of English education at the secondary school level -- in other words, the linguistic background which Japanese learners bring with them to the university English classroom. According to Takashima (1995), 「... 日本語の「る」形と「た」形の使い方にいかに[英語に]対応するのであろうか。現在の学校教育においては、「る」は動詞の活用の一部(終止形)として扱われ、「た」は助動詞として扱われているため完全に対応した概念とはなりえない。しかしながら、日本語の動詞の「た」形と「る」形の対立は、過去と非過去(現在)というテンスの対立ではなく、完了・未完了というアスペクトの対立とみる方が妥当である。(57)」 “. . . It is interesting to consider to what extent the function of the Japanese *ru* and *ta* suffix forms corresponds with English usage. Since, on the basis of the guidelines of current secondary school education in Japan, *ru* is treated as one type of verbal conjugational form (suffix), and *ta* is treated as an auxiliary, the notion of their corresponding completely is not possible. Rather, it would be more reasonable to consider the concept of the Japanese verbal *ru* and *ta* forms not as one of past and non-past (present) 'tense', but as 'aspectual' completion and non-completion.” Moreover, 「日本語は本来アスペクト中心の言語なのである。このため現在・過去という時間(絶対的, 客観的基準)で規定し表現するよりも、話者の主観性、すなわち話者がその時点で物事を「完結・完了しているとみる」か、「未完結・未完了と見る」かで、「る」と「た」とのいずれかの形態素を用いて表現するのである。このズレが時として学校教育の中で英語を学習者に教えるときに、誤解や混乱の原因のひとつとなると考えられる。(61)」 “Japanese is fundamentally an aspect-focused language. For this reason, rather than being expressed in terms of fixed present and past time (based on an absolute, objective standard), a speaker judges subjectively as to whether at the point of utterance the object is perceived to be 'resolved' and 'complete', or 'unresolved' and 'incomplete', choosing the suffixal form *ru* or *ta* accordingly. This difference in concept between Japanese and English, can be considered to be one of the causes of occasional misunderstanding and confusion in the teaching of English within the confines of secondary school education in Japan.” [Translation mine]

It is fascinating to consider, however, how, conversely, native speakers of English do not tend to have the same difficulty with the use of '*ru*' and '*ta*' in Japanese. This is due to the fact that the function of these suffixes is generally taught within the context of the natural English perspective of 'tense', with '*ru*' and '*ta*' being treated as equivalents of the present and past tense conjugations of the verb in English. An interesting illustration of the difference between the aspectual suffixes '*ru*' and '*ta*' is that of the last lines of the fourth, eighth and ninth verses of the NHK Great East Japan Earthquake Recovery Support Song, 『花は咲く *Hana wa Saku*』, (words by Iwai Shunji, music by Sugino Yoko), 「わたしは何を残したんだろう *Watashi wa nani wo nokoshita darou?*」. Written from the point of view of the victims of the disaster, this line can be translated literally as: “I wonder what I have left behind me?”, conveying completion. Four years on from the disaster, however, it was decided that the perspective at the end of the song should be changed to that of the survivors, and the last repetition of this line at the end of the

ninth verse was accordingly changed to 「わたしは何を残すだろう *Watashi wa nani wo nokosu darou?*」, “I wonder what I will leave behind me?”, with a sense of incompleteness and looking to the future.

#### 4. Examples for Consideration

Further examples of the influence of the cultural-linguistic context of Japanese in terms of the perception of time, were revealed in an essay assignment set for advanced learners towards the end of their first year at Tokyo University of Foreign Studies, on the topic of 「もしもあなたが宝くじに当選したら、そのお金をどのように使いますか。 *Moshi mo anata ga takarakuji ni toosen shitara, sono okane wo dono yooni tsukaimasuka?*」 This was a particularly interesting topic to select as material for analysis, as the students would inevitably be required to express the question of the title in English, and probably also to use the same construction in the first sentence and elsewhere in the body of their essays.

Out of the forty-two essays, approximately half contained the correct rendering of the title and first sentence of the essay, 「宝くじに当選したら、私は～をする *Takarakuji ni toosen shitara, watashi wa ~ wo suru*」, in terms of a hypothetical context, with the use of the pattern “If I (did) [were to do] ~ , I would (do) ~ ” (“If I won [were to win] the lottery, I would (do) ~ ”), using the past tense subjunctive and modal past (would) pattern. However, even if this was used correctly at the beginning of the essay, in several cases it was used incorrectly further on. This might possibly be an illustration of students having originally learnt the pattern as such at the upper secondary school level, and being able to reproduce it automatically, but then being unable to use it in a more flexible way. Moreover, several students who successfully used the past subjunctive pattern at the beginning of a sentence, then incorrectly combined it with either the simple present tense or the future tense in the latter part of the sentence (or vice versa). The following are some examples of this incorrect usage:

- (1) \*If I won the lottery, I can do a lot of things.
- (2) \*If I won the first prize in a lottery, I want to realize one thing *by* the money.
- (3) \*I want to use all *the* money if I won the lottery.
- (4) \*If I won the lottery, no matter how much money it *is*, I will donate (*it*) to *the* people who are in need of money.
- (5) \*If I won in a public lottery, I will use (*the money*) in two ways: (*as*) saving(s) and (*for*) self-improvement.
- (6) \*I also want to take dance lessons if I won the lottery.

[NB In all the examples presented in the paper, \*(an asterisk) is used where a sentence contains certain grammatically incorrect elements. A #(hashtag) is used in the case of a sentence which is generally grammatically correct, but which is semantically or contextually incorrect in terms of the context or discussion. Elements central to the discussion are underlined. Other grammatically or idiomatically incorrect words or expressions are indicated by means of italics, and additional corrections by the author are indicated by means of italics in parentheses.]

Several students used the present tense implying the future, together with the simple present tense, as follows:

- (7) # If I win a hundred million yen, I use 20% to buy a fixed property in (*a*) developing country.
- (8) # If I win the lottery, I use half of it and save the rest of it.
- (9) # It depends on how much money I win.
- (10) # If I win the first prize in a lottery, I want to save it *because of a lot of*

*problems that I will experience in my life.*

- (11) # If I win a lottery, I have a lot of things I want to do, but *they depend* on how much the prize in a lottery I *can get*.
- (12) # If I win (*in*) a public lottery, I have mainly three things I want to do.

All these examples are very interesting, as, apart from a few incorrect expressions (in italics), and necessary additions given by the author (italics in parentheses), they are not grammatically incorrect. The meaning, however, is undoubtedly different from that intended by the writers. Although the present tense verbs given in the first part of each sentence (win/depends), were presumably used to imply the future, due to the fact that they are followed by verbs also in the simple present tense, all convey the idea that the subject ('I') does in fact win the lottery from time to time, and explain what they habitually do when/if they win. The verb ('want') in the latter part of each of examples (10), (11) and (12) could equally be taken to imply the future, in which case the sentences would still be grammatically correct, though not contextually correct.

It should here be emphasized that the reasoning as to what constitutes an error in the discussion in English of 'the lottery' in this paper is based on the premise that there is a generally agreed idea as to the difficulty of winning the lottery, and also that, when talking in terms of winning the lottery, it is not usually the possibly more likely smaller prizes, but the first prize that one has in mind. In other words, the idea of winning the lottery is interpreted within a hypothetical context.

The majority of students used a combination of the simple present conditional tense implying the future with the auxiliary future tense form:

- (13) # If I win a prize in a lottery, I will buy books and comics without hesitation because I like to read them, and there are many books and comics I want.
- (14) # If I win the lottery, I will use half of *that* money as a donation for children suffering from poverty and (*half*) as funds to travel all over the world.
- (15) # If I win a lottery, I will spend all of *them* as soon as possible instead of saving *them*.
- (16) # Although it depends on the amount of the prize money, if I win the lottery and I get a large amount of money, I will donate *them* to some charity organizations such as the Japanese Red Cross Society and WHO.
- (17) # If I win the lottery, I am going to spend it (*on*) studying abroad or going to new places that I have never been to.

Again, although this usage of the simple present conditional tense with the future tense is not in itself grammatically incorrect, it provides a good illustration of different cultural-linguistic perceptions of 'nuance'. Since this combined use of the present and future tenses implies that there is a conceivable possibility that the matter in question will come about, it would be completely accurate in a sentence such as: "If I finish this work by the end of the day, I will come to the concert with you this evening." Or even: "If I pass the exam, I will take a few days' holiday", where there might be a varied range of possibility of success. In all of the above examples, the idea, therefore, is that there is certainly at least a 50% possibility of winning the lottery. Debatable as this might be, it is probably not wrong to say that both the Japanese and English language perception of 'the lottery', is as something which is in reality not at all easy to win. Nevertheless, with this image in mind, the combined use of the present and future tenses would appear to be the most habitually used by Japanese learners of English. The proverbial "If I were a bird" offers a good explanation as to what could be the cause of this, as follows:

---

仮定法過去

「鳥だったら、空を飛べるのになあ」(If I were a bird, I could fly in the sky.)

<従属節>～た(だ)ら ([\*ASPECT] = Per., [TENSE] =  $\phi$ ) + <主節>～なあ (= 現在)

「鳥であるなら、空を飛べるのになあ」(If I were a bird, I could fly in the sky.)

<従属節>～る ([\*ASPECT] = Imp., [TENSE] =  $\phi$ ) + <主節>～なあ (= 現在)

(Takashima: 87, eg.40. & 41.)

---

Subjunctive Past

“*Tori dattara, sora wo toberu no ni na.*” (If I were a bird, I could fly in the sky.)

<Subordinate Clause> ~ *ta (da) ra* ([\*ASPECT] = Per., [TENSE] =  $\phi$ ) + <Main Clause> ~ *naa* (= Present)

“*Tori de aru nara, sora wo toberu no ni na.*” (If I were a bird, I could fly in the sky.)

<Main Clause> ~ *ru* ([\*ASPECT] = Imp., [TENSE] =  $\phi$ ) + <Main Clause> ~ *naa* (Present)

---

In other words, English perceives this situation in terms of the past subjunctive tense, whereas Japanese perceives the same situation in terms of aspect. The English sentence “If I were a bird, I could fly in the sky”, when translated into Japanese, reflects more the idea of completion or incompleteness, or the perfect or imperfect, and can be translated thus in two different ways, either using 「だ～たら *da ~ tara*」, or 「あるなら *aru nara*」. Neither of these Japanese translations, however, would seem to contain the specific idea of the subjunctive, and the necessity in English for the past tense.

As in example (18) below, in some inverted sentences, the past modal ‘would’ was used correctly, but in a combination with the future sense of the present tense, instead of the subjunctive past, possibly revealing an incomplete understanding of the nuance of the subjunctive in terms of ‘tense’.

(18) \*I would use the money for *contribution* and for travel if I win the lottery.

Though the following example (19) similarly uses the past modal ‘would’ with the present tense, since ‘would’ is combined with ‘like’ to form the polite form ‘would like’, used in place of the present tense ‘want’, it does, of course, work grammatically. Nevertheless, contextually, it is not completely natural, as it implies a conceivable possibility of winning the lottery, as opposed to the hypothetical implication of the past modal and the subjunctive past combination.

(19) \*I would like to (*make a*) trip all over the world if I win the lottery.

Apart from the use of ‘when’, instead of ‘if’, the inverted sentence in example 20 below uses a correct combination of the modal past and the past subjunctive tense. The use of ‘when’, however, implies that the subject (I) will definitely win the lottery at some stage, and, therefore (notwithstanding that this is not the correct nuance in the context of this sentence), needs to be combined with the future sense of the present tense ‘win’.

(20) \*I would divide my money into some groups *according to the way I use it when*

I won (*in*) a public lottery.

Although the Japanese 「もし *moshi*」 is readily translated into English as “if”, since the suffix 「～したら *~ shitara*」 used independently without 「*moshi*」 can be translated into English in two ways, both as “if” and “when”, it is

understandable that the Japanese learner might be confused as to which to choose. Similarly, the English-speaking learner can face some difficulty in translating the Japanese ‘~ *shitara*’, due to its ambiguity. Furthermore, as seen in examples 13-17 above, the Japanese 「~したら、~する ~ *shitara*, ~ *suru*」, is in itself ambiguous, relating to the concept of ‘aspect’ – hence the dilemma in the choice of “If I (do) ~, I will (do) ~” or “If I (did) [were to (do)] ~, I would (do) ~”. A good illustration of the difference in nuance between “if” and “when”, and also between the subjective past and modal past combination and the present and future tense combination, might be the case of an American presidential candidate in responding to questions from the media. One can envisage the situation of their being asked: “If you were elected president, what would you do?”, and of their responding with: “You mean, **if** I am elected president, what **will** I do?”. Or, even more emphatically and effectively: “**When** I am elected president, what **will** I do?”

The same essay topic was given to British learners of Japanese at Leeds University in the UK as an assignment in Japanese [See 『中級日本語学習者の作文における語彙使用の誤用と問題点』 (*Errors and Problems In the Use of Vocabulary In Compositions by Intermediate Learners of Japanese*), Morimoto, Kazuki]. As far as the author can see, however, on the basis of these essays, despite the ambiguity of the Japanese construction ‘~ *shitara*, ~ *suru*’ when attempting to translate back into the first language, English, it would seem that native speakers of English have no great difficulty, from the point of view of concept, in conversely translating the English “If I did [were to do] ~, I would do ~” into the target language, Japanese ‘~ *shitara*, ~ *suru*’. It can perhaps be surmised that, while the English-speaking learner approaches Japanese with inherent knowledge of, and instinctive ability to distinguish between, the nuance of the two more ‘restrictive’ or ‘prescribed’ English constructions “If I (do) ~, I will (do) ~” and “If I (did) [were to (do)] ~, I would (do) ~”, they are able to comprehend and assimilate the flexibility of the more extensively embracing aspectual ‘~ *shitara*, ~ *suru*’ when translating into Japanese with greater ease than their Japanese-speaking counterparts when translating from their first language into English. It is of further interest, thus, to consider to what degree the concept of the subjunctive exists in the Japanese mind when translating the Japanese pattern into English within a context which in English would be interpreted as, or instinctively felt, to be subjunctive, and whether the distinction between the two possibilities of meaning is consciously made.

One particular linguistic type which would tend to cause more difficulty for English-speaking learners of Japanese is the translation into English of the ‘~*ru*’ suffix of the verb, which contains the ambiguous aspectual nuances of what in English would constitute both the present and future tenses; that is, denoting ‘incompletion’ and future ‘incompletion’. A good example of this is 「花が咲く “*Hana ga saku*”」, which appears as the title and the chorus of the NHK Great East Japan Earthquake Support Song (mentioned earlier). According to the sentiment of the song, the meaning is undoubtedly intended to be as in the English translation “Flowers **will** bloom”. Without a definite context, however, the same expression could equally be interpreted as conveying the habitual present in English, and be translated as “Flowers **bloom**”, as in 春に花が咲く *Haru ni hana ga saku* (Flowers bloom in spring). Particularly within the realm of more abstract literary, or poetry translation, from Japanese into English, this aspectual nuance of the verb is always a fascinating matter for deliberation, and inevitably results in various differing interpretations and translations. (Whether the image in the mind of the poet is of ‘one flower’ or the plural ‘flowers’, is, of course, another exciting challenge in the translation of Japanese poetry.)

It is of further interest to consider possible translations of the Japanese 「もしもあなたが宝くじに当選したら、そのお金をどのように使いますか *Moshi mo anata ga takarakuji ni toosen shitara, sono okane wo dono yooni tsukaimasuka?*」 into the entirely aspect-focused language of Chinese, as follows:

1. 如果你中彩票了，怎样使用那笔钱？

*Ruguo*(2,3) *ni*(3) *zhongcai*(4,3) *le*(0), *zenmeyang*(3,0,4) *shiyong*(3,4) *na*(4) *bi*(3) *qian*(2)?

(If you won the lottery, how would you use the money?)

2. 假如 (有幸) 中了头彩, 你打算怎么花这笔钱呢?

*Jiaru*(3,2) (*youxing*)(3,4) *zhong*(4) *le*(0) *toucai*(2,3), *ni*(3) *dasuan*(3,4) *zenme*(3,0) *hua*(1) *zhe*(4) *bi*(3) *qian*(2) *ne*(0)?

(If you were (lucky enough) to win the first prize in the lottery, how would you decide [intend] to spend the money?)

3. 假如你中奖的话, 那笔钱怎么花呢?

*Jiaru*(3,2) *ni*(3) *zhongjiang*(4,3) *de*(0) *hua*(4), *na*(4) *bi*(3) *qian*(2) *zenme*(3,0) *hua*(1) *ne*(0)?

(If you were to win the lottery [a prize], how would you spend the money?)

4. 若 (有幸) 中彩, 你打算如何花?

*Ruo*(4) (*youxing*)(3,4) *zhongcai*(4,3), *ni*(3) *dasuan*(3,4) *ruhe*(2,2) *hua*(1)?

(If you were (lucky enough) to win the lottery, how would you decide [intend] to spend it [the money].)

5. 如果我中了彩票, 我会把钱都用在投资上。

*Ruguo*(2,3) *wo*(3) *zhong*(4) *le*(0) *caipiao*(3,4), *wo*(3) *hui*(4) *ba*(3) *qian*(2) *dou*(1) *yong*(4) *zai*(4) *touzi*(2,1) *shang*(4).

(If I won the lottery, I would (probably) [use all the money in investments [invest all the money].)

[NB The numbers in parentheses indicate the tone of each syllable.]

The above are a few variations by different native speakers. *Ruguo*, *jiaru* and *ru* all have the meaning of 'if', *ruguo* being the most informal, *ru* being the most formal, and *jiaru* being formal and conveying a slightly more emphatic nuance, as of '(Just) supposing', or the Japanese 「仮に *karini*」. There is in addition one other slightly emphatic informal *yaoshi* not included here. They can all be used with or without the verbal suffix *de hua*, while *de hua* can also be used on its own to mean 'if'. Like English, and unlike Japanese (where, as seen above, '*moshi(mo)*' does not always have to precede '~ *shitara*', except in more emphatic sentences), the equivalent of 'if' is necessary in a conditional or subjunctive sentence.

The noun for lottery is *cai(piao)* and the verb 'to win', or literally 'hit', is *zhong*, which, as is the case with all Chinese verbs, does not conjugate, retaining the same form, regardless of the aspect of time it conveys. The time implied, therefore, is very much dependent on, or implied by, the context, or indicated by adverbs of time, such as 'yesterday' or 'tomorrow'. Nevertheless, in none of the above examples is the idea of 'one day', or 'some time', given. This is, of course, similarly the case with Japanese, where the insertion of '*itsuka*' would, ironically, specify "(*Moshimo*) *takarakuji ni toosen shitara*," as being hypothetical. Examples 3 and 4 above, therefore, rely entirely on context as to the intended meaning. As can be seen in examples 1, 2, and 5, however, a suffixal particle, *le*, either follows immediately after the verb or comes at the end of the clause (or, in some cases, both). Yet the particle *le*, is entirely aspectual in function, denoting 'completion' or a 'change in state or situation', and can refer equally to the past (as is the case with the Japanese '*ta*' form), the simple future, or the hypothetical subjunctive past. Were example 1 above to be translated back into English, therefore, apart from the hypothetical interpretation, it could also be translated not only as "If you win the lottery, how will you use the money?", but also, "If you had won the lottery, how would you have used the money?" This latter sentence in Japanese would be "*Moshi(mo) anata ga takarakuji ni toosen shitara, sono okane wo dono yooni tsukaimashitaka?*", '(*i*)*dashita*' being the polite form equivalent of what is taught at the secondary school level in Japan as being an auxiliary suffix '~ *ta* (*tsukat-ta*)' (Takashima 1995), previously discussed. All in all, although Chinese is a wholly aspectual-focused language, similarities between Chinese and Japanese in terms of aspect can be seen.

Finally, it should be mentioned that English can also be analysed as containing 'aspect'. Strictly speaking, it has, for example, no future tense as such, since the English future forms 'will' and 'going to' are not morphologically connected to the verb as conjugational verb forms, but rather, function as modal auxiliaries. Other so-called tenses

also are composed either of combinations with the auxiliary 'have' and the past participle, '-ed/-en', as with the present, past and future perfect, or of composed of combinations with the auxiliary 'be' and the present participle, '-ing', as with the present, past and future progressive (Evans and Green, 2006:387~389). Thus, "Tense and aspect can 'cut across' one another within the tense-aspect system. In other words, they can be combined to produce a large number of different permutations." (Evans and Green: 388) In the interest of space, however, the author would like to pursue the theme of the existence of 'aspect' in English (together with the use of the gerund and infinitive, the progressive present, and the modal auxiliary) in more detail in a future paper.

## 5. In Conclusion

The above discussion constitutes merely an initial stepping stone in an attempt to understand, from the point of view of the complex topic of tense and aspect, certain time-related conjugational errors typically produced by advanced Japanese learners of English, and to provide some 'food for thought' thereby. Nevertheless, on the basis of the above discussion, it can probably be concluded that the first language exerts a considerable influence in the process of 'assimilating' English on the part of Japanese learners. Furthermore, in terms of discrepancies which exist in the concepts of tense and aspect, the influence of the relation between cultural background and ways of perception in the first language of the writer (speaker) in the conveyance of ideas in the target language, can be seen to be very great. It therefore follows that the apparent hesitation to use the simple past tense, and the subsequent difficulty in comprehending the distinction in nuance between the simple future conditional and the hypothetical subjunctive past tense in both the spoken and written English of Japanese learners can be better understood when considered against the cultural-linguistic backdrop of Japanese. Moreover, the fact that time-related conjugational errors in English are made by even advanced Japanese learners at the university level, could be seen to reflect some difficulty in the learning process at the upper secondary school level. Though the teaching of basic linguistic patterns is in itself certainly important, in order to facilitate more confident communication and clearer delivery of written (or spoken) ideas on the part of the learner, there might possibly be a need for more consideration to be given to the influence of the first language on the target language, and for more flexibility in the way in which both Japanese and English are presented, in the language classroom.

---

### Natural Renderings of Above Example Sentences

1. If I won the lottery, I would be able to do a lot of things.
2. If I won the first prize in the lottery, I would like to realize one thing with the money.
3. I would like to use all the money if I won the lottery.
4. If I won the lottery, no matter how much money it was, I would donate it to people who are in need (of money).
5. If I won 「in a [the] public lottery, I would use the money in two ways: as savings and for self-improvement.
6. I would also like to take dance lessons if I won the lottery.
7. If I won a hundred million yen, I would use 20% to buy a fixed property in a developing country.
8. If I won the lottery, I would use half of it and save the rest (of it).
9. It would depend on how much money I won.
10. If I won the first prize in the lottery, I would like to save it 「to use in the case of any problems (which) I might experience [in case I (were to) experience any problems] in my life (in the future).
11. If I won the lottery, there would be a lot of things I would like to do, but it would depend on how much lottery prize money I could win.
12. If I won 「in a [the] public lottery, there would mainly be three things I would like to do.

13. If I won a prize in the lottery, I would buy books and comics without hesitation because I like to read [reading], and there are many books and comics I want [would like] (to have).
14. If I won the lottery, I would 「use half of the money as a donation for [donate half of the money to] children suffering from poverty and (use) half as funds for travelling all over the world.
15. If I won the lottery, I would spend all of the money as soon as possible, rather than saving it.
16. Although it would depend on the amount of the prize money, if I won the lottery and got a large amount of money, I would donate it to some charity organizations such as the Japanese Red Cross Society and WHO.
17. If I won the lottery, I would spend it on studying abroad or going to new places「that I have never been to [where I have never been].
18. I would use the money for making donations and for travel if I won the lottery.
19. I would like to make a trip all over the world if I won the lottery.
20. I would divide the money into different amounts, and use each amount in a different way if I won「in a public [the] lottery.

### Bibliography

- Deutscher, G. (2001) *Through The Language Glass - Why the World Looks Different In Other Languages*. Random House Arrow Books, London
- Evans, V. and Green, M. (2006) *Cognitive Linguistics - An Introduction*. Edinburgh University Press
- Petersen, M. (2010) 'English without "I Wish I Were a Bird"' . 連載 Future Perfect, Vol.26, *Argument* 2010, 第2号, 旺文社
- Petersen, M. (2014). 'Tense, Aspect, and "Problem-Verbs"' , 連載 Future Perfect, Vol.33, *Argument*, 2014, 第1号, 旺文社
- Swan, M. (2005) *Practical English Usage*, Oxford University Press.
- 影山太郎編 (2001) 『日英対照 - 動詞の意味と構文』大修館書店
- 小池清治 (1994) 『日本語はどんな言語か』筑摩書房
- 小泉保 (1980) 『形態論的比較』(國廣哲彌編, 日英語比較講座, 第1巻 (音声と形態) 第3章) 大修館書店
- 兒島義郎 (1988) 『日本語の意味英語の意味』南雲堂
- 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』岩波書店
- 高島英幸 (1995) 『コミュニケーションにつながる文法指導 - A Form-Focused Approach to Communication in English - Theory and Practice in the Japanese Classroom』大修館書店
- 武本昌三 (1993) 『英語教育のなかの比較文化論』鷹書房弓プレス
- 中右実 (1980) 『テンスとアスペクトの対応』(日英語比較講座, 第2巻 (文法) 第4章, 國廣哲彌編集) 大修館書店
- 中村明 (2000) 『日本語案内』筑摩書房
- 森本順子 (1996) 『日本語の謎を探る - 外国人教育の視点から』筑摩書房
- ピーターセン, マーク (1998) 『日本人の英語』岩波新書
- ピーターセン, マーク (1990) 『続日本人の英語』岩波新書
- 町田健編・初山洋介著 (2002) 『認知意味論のしくみ』(シリーズ・日本語のしくみを探る 5) 研究社

# 東京外国語大学上級英語学習者コーパスにみられる 接続表現におけるテンス誤用

キャロライン狩野（東京外国語大学）

キーワード：上級英作文、英語誤用、時間関連動詞活用、テンスとアスペクト、オンライン英語誤用辞典

本論文では、東京外国語大学の上級学習者の英作文における時間関連動詞誤用の例を挙げ、学習者の母語や文化的背景がどのように第二言語習得に影響を与えるかを探る。特に、上級学習者の英作文によく見られる過去形や仮定法過去に関する誤用をテンスとアスペクトの観点から分析し、日英それぞれの言語の異なった概念から、テンスとアスペクトとは何か、また、なぜ誤用が起こるのかを考察する。

## 第 3 章

〈報告〉

## 学習者誤用コーパス用ウェブ検索システム

呉佳厚（国立台湾師範大学）

李迎日（東京外国語大学大学院総合国際学研究所）

井上剛（東京外国語大学外国語学科）

佐野洋（東京外国語大学）

キーワード：学習者コーパス、誤用分析、ウェブ検索システム

### 要旨

本報告は、学習者誤用コーパスをデータとして利用し、それらのデータを対象にウェブブラウザを通じて誤り箇所を検索することができるソフトウェアについての技術説明である。三つの学習者コーパス（英語学習コーパス、中国語学習者コーパス、日本語学習者コーパス）をデータとして利用している。従って、三つの検索システムがある。本報告の中では、ソフトウェア開発に利用した実装技術とその技術特長を説明する。サイトの使用事例を簡単に紹介する。作文内の誤用位置はKWIC形式で表示されるだけでなく、作文文章全体の中での位置関係がわかるように表示される。オリジナル作文、誤用部分、修正後の文章を比較しながら、誤用表現を観察することが可能である。なお本検索サイトはメニューを多言語化している。最後に、今後の学習者誤用コーパス検索サイトの拡張の方向性を示す。

### 1. はじめに

#### 1.1. 学習者誤用コーパスの構築目的

学習者誤用コーパスを構築する目的は大きく二つある。一つは、上級者の語学学習者が引き起こす誤り箇所を見つけ出すことである。文法上の難しさや表現概念の著しいずれ、構文は比較的簡単であるが、描写の視点が異なる点などが、これらの誤箇所に見れていると推測している。学習が難しい箇所は、学習言語のシステムそのものが難しい（複雑である）場合と、母語の干渉によって概念変換が難しい場合があると考えている。この違いを明らかにすることで、語学学習教材を改善することができるだろう。

二番目の研究目的は、対照言語学分野における新しい知見を得ることである。誤り表現の分析を通じて、物事を描写するという観点で、ことばの表現を検討できる。その成果から、概念をことばで表現する際に現れる二つの特長を明らかにする。表現の文化依存性と言語普遍性である。二つの特長を意識して区別することが語学教授法の改善につながる。例えば、速習が可能な教材を作成することや学習項目の再検討が可能だ。

以下は、学習者作文のリソースを示している。

- 英語作文

東京外国語大学（英語専攻に所属する学生が書いた作文、2013年～）

台湾師範大学（英語専攻に所属する学生が書いた作文、2014年～）

上海外国語大学（2015年～）

- 中国語作文

東京外国語大学（中国語専攻に所属する学生が書いた作文、2013年～）

- 日本語作文

国際教養大学、上海外国語大学、北京大学、リーズ大学（2015年～）



ス化している。それぞれの作文の収集規模や作文内容、学習者属性については本稿の範囲ではないので説明はしない。別稿を参照されたい。

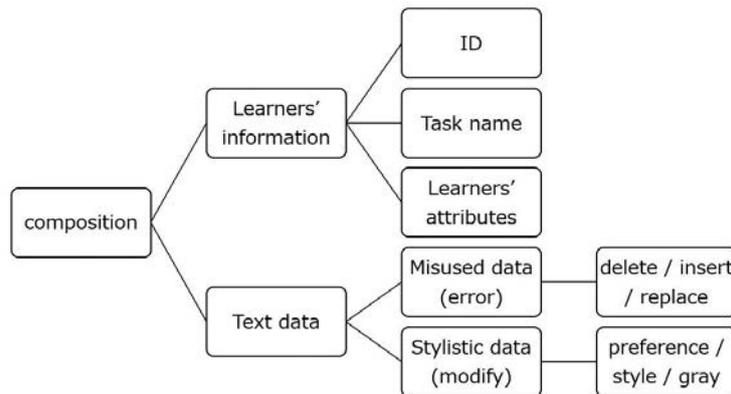


図 2 XML データとそのマップ

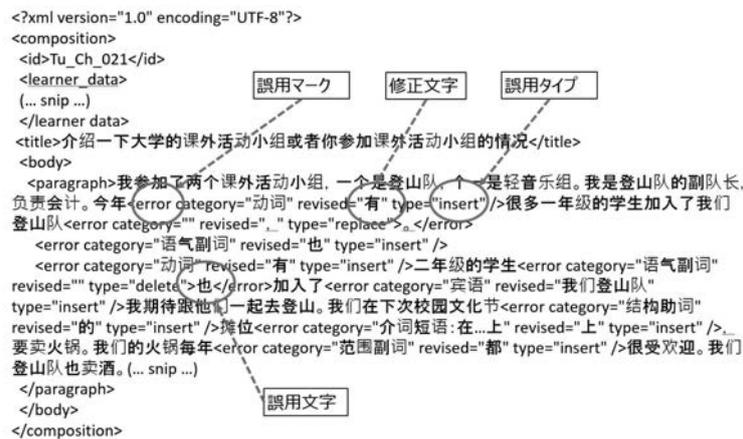


図 3 誤用作文コーパスデータ例 (XML 形式)

## 2. システム構成

### 2.1. 構成概要

図 4 は検索システムの構成概要図である。

図中、XML ファイルは誤用データファイルである。誤用箇所が誤用タグでマークされている。さらに文章属性や学習者属性も記録されている。これらデータはシステム内のコーパス DB に取り込まれる。コーパス DB は RDB<sup>2</sup> (MySQL<sup>3</sup>) を採用している。

コーパス DB にデータを記録する際に、XML ファイルの妥当性検証や、誤用箇所を表示するための要素の追記や、システム内部で利用するため属性の修正等を行っている。これらのプロセスは、システム利用の際に一度だけ行われる。但し、XML ファイルが更新されるたびに実施される。

検索エンジンによって得られた結果は、フィルターを通じて整形され、テーブル形式で利用者に示される。テーブル形式を用いることで、KWIC<sup>4</sup> 形式で表示することができる。

誤用箇所を誤用作文文章と対応付けることで、文章全体を参照して、誤用箇所を確認することができる。KWIC に比べ、より広範囲の文章を考慮して誤用箇所を確認することが可能である。

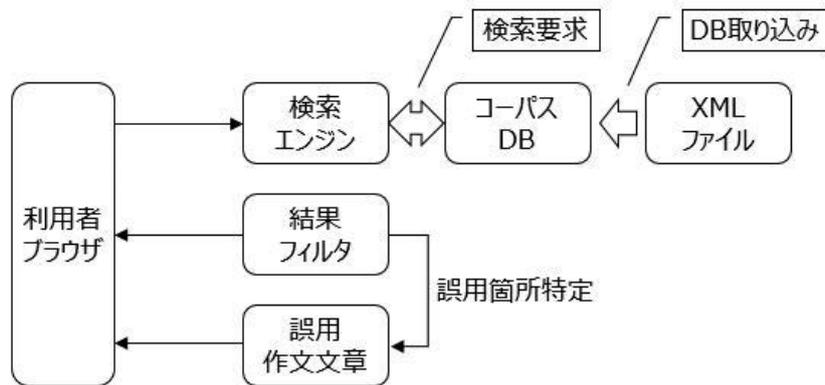


図4 システム構成の概要

## 2.2. システム機能

図5は、検索システムの機能の概要図である。

利用者は、ブラウザを通じて誤用作文コーパス検索システムにアクセスすることができる。誤用箇所の検索手順は以下のとおりである。

1. 誤用タイプ（置換、削除、追加）を指定する
2. 誤用カテゴリ（言語毎に異なる）を指定する
3. 誤用文字列を指定する
4. 修正文字列を指定する

上記手順を通じて調べたい誤用箇所を特定し、その誤用箇所（その数）と、当該誤用の修正結果を確認することができる。

すべての誤用タイプを指定すると、すべての誤用箇所を検索することができる。このように1から4の指定は組み合わせやすく、検索目的に応じて使い分けることができる。

検索は2段階で行われる。

まず、検索エンジンを使ったDB検索では以下の処理が行われる。

1. 誤用文字列のデータ照合
2. 修正後文字列のデータ照合

この検索結果に対して、次のフィルタリングを実施する。

- 誤用タイプ（置換、削除、追加等）によるデータフィルタ
- 誤用カテゴリによるデータフィルタ（言語によっては下位カテゴリーも含む）
- XSLT<sup>5</sup>変換

そして、XSLTで変換されたXMLデータは、結果表現変換されてJSON<sup>6</sup>形式でブラウザに送信される。JSONによるデータ表現とAjax<sup>7</sup>を使った非同期通信によってブラウザ側でのレスポンス性能が向上している。

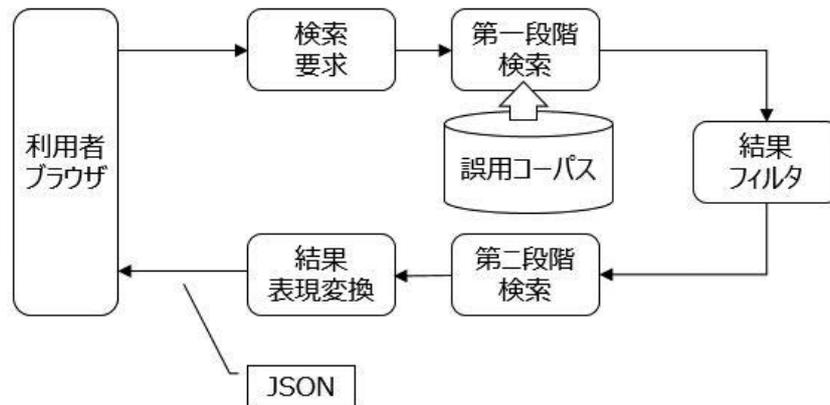


図5 システム機能の概要

### 3. 誤用コーパス検索サイト

誤用コーパス検索サイトは、研究室管理の公開サーバ<sup>8</sup> (ngc2068.tufs.ac.jp) 上に構築されている。誤用コーパスは三種類（英語、中国語、日本語）である。誤用作文数は、英語が41、中国語が230、日本語が44である（合計315 2016年2月現在）。なお学習者が重複することもある。誤用作文数は任意に増やすことができる。

#### 3.1. 英語学習者誤用コーパスサイト

英語学習サイトの URL は以下である。

[http://ngc2068.tufs.ac.jp/corpus\\_eng/](http://ngc2068.tufs.ac.jp/corpus_eng/)

図6は英語学習作文の誤用コーパス検索サイトのエントリー画面のスナップショットである。

[誤用文字列]は、作文テキスト中にある誤用文字列である。学習者が産出したテキストである。[修正文字列]は、作文の校正者によって修正された文字列である。[削除タイプから検索]における選択肢は[削除]、[追加]、[置換]である。[カテゴリーから検索]に掲載のカテゴリーは文法上の機能名である。英語作文の場合、前置詞や動詞、名詞などの区分がある。動詞のように文法機能が集中する範疇では、アスペクトや時制などの下位区分を持つ。カテゴリ名称は言語によって異なる。

例えば、誤用文字列と修正文字列を指定して対応のデータを検索することができる。例えば、学習者が“for”を用いたものの、それが“at”に訂正された箇所を探すことができる。



図6 トップページ（英語学習者誤用コーパスサイト）

### 3.2. 中国語学習者誤用コーパスサイト

http://ngc2068.tufs.ac.jp/corpus\_ch/

図 7 は中国語学習作文の誤用コーパス検索サイトのエントリー画面のスナップショットである。



図 7 トップページ (中国語学習者誤用コーパスサイト)

### 3.3. 日本語学習者誤用コーパスサイト

http://ngc2068.tufs.ac.jp/corpus\_ja/

図 8 は日本語学習作文の誤用コーパス検索サイトのエントリー画面のスナップショットである。



図 8 トップページ (日本語学習者誤用コーパスサイト)

図 9 には検索結果の例を示す。[誤用文字列]に「が」を指定し、[修正文字列]に「は」を指定した場合である。[該当部分前方]は左側文脈を示し、[該当部分後方]は右側文脈を示す。誤用作文データ内に記述されている誤用カテゴリを表示する。

該当部分前方	該当部分	該当部分後方	誤用タイプ	誤用カテゴリ	レビュー
塾や予備校はありません。	私が知っていることはアメリカに住んでいる韓国人は塾を作って学生に教えます → 私はアメリカに住んでいる韓国人が塾を作って学生に教えていることば知っています	。塾と予備校は少ないは昔	replace	文の構造・語順 文の要素 E:補文形式 J:アスペクト	📄
が、一番好きなジャンル	が → は	あります。私は大好きです	replace	文の要素 D:提題・取立 E:格助詞	📄
る。スポーツが一番好きな	が → は	が多分一番熱入のはラク	replace	文の要素 E:格助詞 D:提題・取立	📄
カバンがありません。私	が → は	ボタンはともにも便利だと。	replace	文の要素 E:格助詞 D:提題・取立	📄

図 9 検索結果例

[プレビュー]をクリックすると検索対象を含む作文文章を表示する(図10)。検索該当箇所はハイライトされて表示される。プレビューワーは、学習者情報、原文テキスト、誤用タグを含む修正された作文テキスト、修正後の作文テキストのそれぞれを利用者に提示する。

映画があります。ちょっと古い映画ですけど → が(replace, 文の要素 F:語・節の接続 L:文体・位相)、私は「インセブテオン」という映画 → が(add, 文の要素 E:格助詞) 好きです。とても面白かった → 面白い(replace, 文の要素 I:テンス H:い形容詞型) と思います。私 → /に (add, 文の要素 E:格助詞) は一番好きなゲームがない → なく(replace, 文の要素 F:語・節の接続 H:い形容詞型)、違うの時、違うのゲーム好きです → 時と場合によって好きなゲームは変わります(replace, 文全体)。でも → しかし(replace, 文の要素 F:文の接続 L:文体・位相) 一番好きなジャンルが → ば(replace, 文の要素 D:提題・取立 E:格助詞) あります。私は戦略のゲーム → 戦略ゲーム(replace, 文の要素 A:名詞 F:語・節の接続 K:連体修飾 B:複合名詞) → が(add, 文の要素 E:格助詞) 大好きです。最近私は「将軍トールワー → ウォー(replace, 表記)」というの → (delete, 文の要素 F:語・節の接続 K:連体修飾) ゲームをしています。戦国時代のゲームです。とても楽しいと思います。

図 10 誤用タグを含む修正された作文の表示

## 4. 実装技術

### 4.1. 技術仕様

検索の概要を示す。まず、ユーザーがブラウザを通じて検索リクエストを出す。その検索リクエストが検索式に変換されてデータベース問い合わせを行う。検索結果が得られたら、見やすい形式に整形し、ユーザーに示す。表1は検索システムの技術仕様である。

表 1

コーパスのデータ形式	XML (文字エンコーディングは UTF-8)
データベース	MySQL
検索インターフェイス	添削前(誤用文字列)のキーワード検索と添削後のキーワード検索の両方に対応している。誤用カテゴリー(置換、削除、追加)による絞り込み検索が可能。
実装言語	PHP、XSLT、JavaScript、Python
サーバ動作環境	Apache2.2、MySQL5.6、PHP5.5
クライアント側環境	ウェブブラウザ (Internet Explorer, Google Chrome, Mozilla Firefox, Safari の最新版で動作確認)

コーパスデータは、RELAX NG<sup>9</sup>を使ったデータ整合性の検証が行われる。そうして整合データのみがMySQLデータベースへ登録される。以下の手順によって検索が行われる。

1. XML形式の誤用コーパスを作成する
2. データの妥当性検証を行う
3. データベースに登録(RDB)
4. ユーザーリクエストをもとにデータベースに問い合わせる(PHP)
5. 問い合わせ結果を表示する

検索システムは、上記の4と5を繰り返すことで誤用表現をユーザーに提示している。検索はXSLTを使ってXML文書構造からの構造変換として行われる。

### 4.2. プログラム

Index.phpは主プログラムである。このプログラムは以下の処理を行う。

1. 検索条件などの入力フォームを表示する
2. カテゴリーデータをロードする
3. 多言語プラグインをロードする
4. Ajaxに対応する
5. JSON形式の検索結果を受け取る

findCorpusMatch.php プログラムは、検索処理を行う。以下の処理を行う。

1. データベースとの接続を確立する
2. 検索パラメーターを受け取る
3. 第一段階の検索を実施する
4. XML データの妥当性検証を行う
5. 第二段階の検索を実施する (XSL データ変換を行う)

結果表示には、サードパーティ製の jqxDataTable を用いている。誤用テキストのビューは、getCorpus.php が行う。

## 5. まとめ

本報告では、学習者誤用コーパスをデータとして利用し、それらのデータを対象にウェブブラウザを通じて誤り箇所を検索することができるソフトウェアについて説明した。三つの学習者コーパス（英語学習コーパス、中国語学習者コーパス、日本語学習者コーパス）検索システムが稼働している。これらの検索システムは、作文内の誤用位置は KWIC 形式で表示されるだけでなく、作文文章全体の中での位置関係がわかるように表示する。オリジナル作文、誤用部分、修正後の文章を比較しながら、誤用表現を観察することが可能である。

### 5.1. 多言語化

検索サイトのメニューは多言語化されている。今後は利用者ガイドを多言語化することで、とりわけ日本語誤用作文コーパスの活用を世界の日本語教育者に広げてゆくことができるだろう。

### 5.2. 将来計画

第一にコーパスサイズを大きくする必要がある。一般に言語の学習者データの収集にはコストを要する。さらに誤用部分を特定し、関係する情報を付与することは一層のコストと労力を要する。地道なデータ作成の取り組みが必要だろう。

また海外の大学との共同研究によってコーパス規模を拡大することもできる。今後も台湾師範大学や上海外国語大学と本学が協力することで学習者コーパスを充実させることができる。

本学における日本語学習者は、質、量ともに充実している。この環境を積極的に利用して、日本語学習者コーパスも充実していくことが求められる。

## 注

- 1 XML (Extensible Markup Language) は、文書やデータの意味や構造を記述するためのマークアップ言語の一つ。タグ (tag) と呼ばれる特定の文字列で地の文に情報の意味や構造、デザイン修飾のシンボル等を追加記述することを實現する言語である。XML は利用者が独自のタグを指定できることから、マークアップ言語を作成するためのメタ言語とも言われる。ソフトウェア間の通信や情報交換に用いるデータ形式や、様々な種類のデータを保存するためのファイルフォーマットなどの定義に使われている。
- 2 RDB (Relational Database) は、今日もっとも広く使用されているリレーショナル・データベースおよび、そのデータベース管理システム。リレーショナル・データベースのデータを操作するための言語は SQL (Structured Query Language) ある。SQL は業界標準として広く普及して、様々なデータベース管理システムで利用できる。SQL を使うことで RDBMS (リレーショナル・データベース・マネジメントシステム) に指令を行い、必要なデータを RDB に格納したり、格納したデータを RDB から取り出したりすることができる。
- 3 MySQL は高速性と堅牢性を追及したマルチユーザ・マルチスレッドのデータベース。人気の高いオープンソースデータベース。
- 4 KWIC (Keyword in context) は、文章データの索引を作成する方法の一つ。検索のため指定したキーワードと、その前後 (左右) のテキストも提示することで検索結果の確認が容易になり、文脈を考慮したキーワード検索部分の解釈の効率を高めることができる。
- 5 XSLT (XSL Transformations) は、W3C により標準化された XML 文書の変換用言語。
- 6 JSON (JavaScript Object Notation) はデータ記述言語の1つで、軽量である (データ送受信時の通信負荷が小さい) ことが特徴。
- 7 ウェブブラウザ内で非同期通信を行いながらインターフェイスの構築を行う手法。XMLHttpRequest による非同期通信を利用し、通信結果に応じてダイナミック HTML で動的にページの一部を書き換える。
- 8 サーバは Linux OS 系の CentOS 6.7 で運用している。
- 9 RELAX NG は、マークアップ言語 XML のスキーマ言語の一つ。RELAX NG で記述されたスキーマは、XML 文書の構造と内容のパターンを定義する。

# **Design and Implementation Technique of Web Search System for Learners' Error Corpora**

Wu Chia-Hou (National Taiwan Normal University)

YI Yeong-il (Tokyo University of Foreign Studies)

INOUE Go (Tokyo University of Foreign Studies)

SANO Hiroshi (Tokyo University of Foreign Studies)

Keywords: Learner Corpora, Error Analysis, Web Search System

The paper explains a web-accessible search engine for Learner's Error Corpora making use of XML representation which expresses multiple information (errors and the corresponding corrections) all together. Network-based implementation of the system enables the users to find the words which they are interested in via a Web interface. Implementation approach and architecture of the system are described in detail in relation to the software development. In the paper, some related examples will be introduced to lead the reader to understand technological complexity.

東京外国語大学国際日本研究センター

## 国際日本語教育部門3ヶ年プロジェクト成果論文集2

### 「日本語学習者の母語・地域性をふまえた日本語教育研究とウェブ辞典構築」

—国内外の日本語教育研究機関との協働的研究— (2013~2015)

Proceedings Vol.2, the Three-Year-Project:

“Japanese Language Research and Construction of Web Dictionary  
Based on Learners’ Native Languages and Regional Characteristics;

In Cooperation with Educational and Research Institutes Offering Japanese Language Study  
both within Japan and Abroad.”(2013-2015)

---

発行：2016年3月31日

編集者・発行者 東京外国語大学国際日本研究センター・国際日本語教育部門

代表者 小林幸江

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1 アゴラ・グローバル 2 階

電話 /FAX : 042-330-5794 E-mail: info-icjs@tufs.ac.jp

<http://www.tufs.ac.jp/common/icjs/>

印刷・製本 株式会社アトミ

〒187-0031 東京都小平市小川東 5 丁目 13-22

TEL.042-345-1155

**Proceedings Vol.2, the Three-Year-Project:  
“Japanese Language Research and Construction of Web Dictionary Based  
on Learners’ Native Languages and Regional Characteristics;**

In Cooperation with Educational and Research Institutes Offering Japanese Language Study  
both within Japan and Abroad.”(2013-2015)

